
聖なる右を持つ者 《更新停止》

零崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖なる右を持つ者《更新停止》

【Nコード】

N4721R

【作者名】

零崎

【あらすじ】

ある日、事故って死んで、神様に「この後いいこと無いから殺しました」

なんて言われて、飛ばされた世界はネギまの世界。

俺はフィアンマの使っていた聖なる右、インデックスの知識、聖人の肉体をもち、原作の二十年前に…

作者の初作品です

プロローグ（前書き）

はじめまして零崎です

初作品ですがよろしくお願いします

ここをこつしたほうがいいなどの意見をお待ちしております

プロローグ

プロローグ

16年、短いようで長い人生だった、まさか車にひかれて死ぬとはね
駄目だ、体中が痛い、どうにもなんねーなこりゃ
そして、意識を手放した

すべてが真っ白な部屋、そこに俺はいた

「……知らない天井だ」

目覚めてすぐに、お決まりなセリフを俺は言う
俺は事故って死んだはずなんだがな

「……ずいぶんと余裕なんですな」

「うわっ!!」

俺の後ろで気配もなくいきなり話しかけてきた人がいた
すぐに後ろを振り向くと、同年代くらいの女の子がいた

「あ、この姿は仕様なので気にしないでください

こっちのほうの話しやすいでしょう?」

その言葉に疑問を抱く

「仕様?」

「あ、伝えるの忘れてましたけど、あなた死にましたよ。

それと、私は神ですの。」

「は?」

女の子（自称神）は淡々と言い放つ

「自称ではありませんが、まあその辺は置いときましょう

別に大したことでもないので」

「どうやら神かどうかは大したことではないらしい

「はい、大したことではありません」

「……心読めるの？」

「はい、神ですから」

「……まあ、その辺はいいや。」

「で、なんでその神様がここにいるの？」

「実は、あなたの寿命はまだ先だったのですが、「間違っ

て殺しちゃったの？」いいえ、ぶっちゃけこの後あなたは生きててもいいこと無かつたみたいですし、どうせなら別の世界で楽しくやっ

てもらおうかな、と思ひまして」

「……俺あの中の人生いいこと無かつたんだ

「はい」

「それにしたつて、事故死だなんてありふれた悲劇で、この後いいこと無いからつて殺していいの？」

「普通はできないんですが、なぜかあなただけはできたんです」

「……さいますか」

「で、別の世界つて何？」

「漫画などの並行世界の一つ、ネギまの世界です」

「ああ、あの死亡フラグ万歳の世界ね

「もちろん願いは叶えてあげますよ」

よくあるSS小説のようになってきたな

まあいいや

「いくつまで？」

「3つですね」

3つか、結構あるけど絞らないとな。

「まず1つ目、禁書のフィアンマが使う聖なる右

もちろん神上状態で無制限」

「チートですね、大丈夫ですよ」
正直投影なんかよりずっと強いと思うんだがな、右手を振るだけで勝てるのかチートも甚だしいし。
むしろ今まで出なかったのがすごいと思う

「二つ目はインデックスの十万三千冊の魔導書の知識」
「知識を忘れないようにっていうのは正直めんどいので遠隔制御礼装の形にして知識を引き出せるようにしておきます。あ、あなた以外の人が使うと魔導書の毒に侵されますので注意してください」
なんかめんどくさがられた、まあ当然かもしれないけど。
さすがに毒はどうにもならんか。

「3つ目は聖人並みの身体能力で、弱点なしにして。」
「はい、わかりました。ついでに不老にしましたので。」

「これでいいですね？」
「サンキュー神様、オツケーだ」

「では行ってらっしゃい」
そして、意識が薄れていく
「あ、原作開始20年前ですのでご注意ください」
先に言えやあ！！

ブローグ（後書き）

ベタです、ハイ

不定期になると思いますので

温かく見守ってください

第一話 チートな自分を再確認（前書き）

どうも零崎です

第一話です

短いですが、楽しんでいただければ幸いです
それではどうぞ

第一話 チートな自分を再確認

第1話 チートな自分を再確認

どーも俺です、たった今日覚めたところです
これからどーしよーか考えてます

とりあえず今の状態を確認だな

服は黒のローブのようなもの、KH?の??機関の奴らが着てるよ
うな奴ね
服の中をあさくと、手紙のようなものがあつた

ーこれを読んでいるということはネギまの世界についたということ
とです。

えー、あなたはトリップしたため昔の名前は記憶に残ってないと思
います
なんで、適当に決めちゃってください。

肉体、というか顔はまんまフィアンマですので、

後、あなたが着ている服は??機関のそれです
私ファンなので、特に…つと話がずれました

その服は内側は倉庫になります、ぶっちゃけ夜傘です
後あなたの意志で伸びたり縮んだりします

例えると、ガツシユとかゼオンとかのマントです
あんな感じでやってください

霊装は倉庫の中に入ってますので。
by神様

……なんでもありだなあ、あの神

霊装、霊装つと、あった。

……どうやって知識取り出すんだろ
念じてみる…できた、意外と簡単なのな
まあ、俺以外の奴は毒で頭やられるだろうけど

さて、これからどうしようか
テンプレ通り紅き翼探すか、うん、そうしよう

〜2時間後〜

というわけで見つけました

戦争中の連合軍と帝国軍を
そもそも戦争してるのが連合軍と帝国しかないはずだけでも

崖下で戦ってる軍を見る

やっぱ魔法世界の戦争はすごいね
いろんな光が行ったり来たりしてるよ

千の雷とかためらいなく使っし、まあためらったらやられるんだろ
うけど。

さて、どうしようか

選択肢

- 1 帝国軍に助太刀
- 2 連合軍に助太刀
- ? 3 全部殲滅

よし、これで行こう、どっちに入るとかなんかどうでもよくなっ
てきた

そもそもどっちがどっちかさえ分かんないし

聖なる右を使おう

……どうやんのこれ？

わからないので頭の中で聖なる右を想像する
右肩に力を入れてみる

できねええええええええ

どうすんだよこれ!!、まじで!!

ん？

あれは？

流れ弾(というより流れ魔法)が飛んでくる

あれはおそらく雷の暴風だ

選択肢

- 1 霊装を使う
- 2 ゼオンのようにマント（この場合は服）で防ぐ

1、そうだこれがある、防御用の術式を……駄目だ、どれが防御用の術式かさっぱりわからん

2、論外、使ったことがないのにいきなりできるか！！

やべ、もう当たる、俺の第二の人生終わるの早かったなア
静かに目を瞑る

ドオオオオン！！

衝撃も何もない

そつと目を開けてみる

第3の腕が発動していた

あれかな、一方通行みたくデフォで自動防御とか

まあ、なににせよ助かった

どうやら一旦発動したら俺の意志のままに動くらしい

さて、無双タイムと行きますか

第一話 チートな自分を再確認（後書き）

はい、現状確認です

ちなみに作者が好きな作品からちょっとずつ出しました

（夜傘は便利そうだからです、ファンの方すいません）

次回、主人公の無双タイムと紅き翼の登場です

それではまた次回

……はっ、いかんいかんあまりのことに頭が
ショートしていたようだ

それにしてもやりすぎだろこれ、俺がやったことだけで。
地形が変わって両方の軍が壊滅している

まさかここまでとは……聖なる右、恐るべし

第三の腕を見ながら思う

こんな歪な腕がなんでここまで威力が出るんだろう、と
原作でもフィアンマは上条と同じ特殊な右手の持ち主だからってこ
とになってたし

俺もそれで納得しておこう

しかしやりすぎだな。

「おい、そこのお前……」
声が聞こえて振り返る

閃光と同時に爆音が聞こえてきた

「なんじゃこれは！！」

師匠が驚いて叫ぶ

「とにかく、行って見ましょう」

いつもは笑顔のアルが険しい表情で言う

そして俺たちは見た

俺と同じ赤い髪をセミロングにした男を、

黒いローブを着たその男を

いや、それよりも俺たちの目に入ってきたのは

男の右肩に生える歪な腕のようなものと

地形がおかしくなり、ほぼ全滅している二つの軍だった

「なんだよ、これ」

おれは自分の目を疑った

それほどにおかしな状況だった

「これを、あの男がやったのだろうか…」
詠春はつぶやいた

「とりあえず、あいつに話しかけてみようぜ」

「何を言っている！！、あの男がやったのかもしれんのだぞ、危険すぎる！！」

詠春が叫ぶが、おれは無視

「おい、そこのお前！！」

くSIDE 俺く

振り返ると赤い髪が目に入る

……あれナギじゃね？

「なんだ」

俺は冷静に答える

「お前がこれを行ったのか？」
ナギは聞く

ああ、やっぱりいきなりこの状況見たら驚くよなあ
第三の腕は発動したままだし

「そつだ、まあ少しやりすぎたけどな」

「どうやったんだ？」

興味津津だな、あいつ

他の三人はいつでも戦闘できるようにしてるみたいだけど

「簡単さ、この腕を振っただけだ」

「うそつくなよ、腕を振っただけでこんなになるかよ」

ま、いきなりこんな話を信じる奴もどうかと思うがね

「だったら、試してみるか？」

俺が言った瞬間、ナギ以外の三人が一斉に殺気を放ってきた
さすがに、このままだと敵だと思われそうだったから

「お前が好きなだけ攻撃して来い、全部防いでやるから」

「何？ いいのか？」

「ああ、お前の攻撃を防げれば、少なくともお前が使う魔法と同等
かそれ以上の力があるってことだからな」

「ハッ、後悔すんなよ！！」

ナギは笑いながら攻撃を仕掛けてきた

「百重千重と重なりて走れよ稲妻

『千の雷』！！！！」

俺はその攻撃を聖なる右で吹き飛ばす

どれくらいの出力が出るかは大体だが感覚でわかる

さっき、軍を壊滅させた時は初めてだったからわからないが、
結構出力が出ているような気がする

「どうだー!!」

自信ありげに叫ぶナギ、相当自信があるのだろう

「残念、この程度じゃ俺は倒せない」

腕を振って煙を吹き飛ばす

ちなみに無傷

「……何っつー!!」「」「」

後ろの三人もやったとまでは行かなくてもダメージはあると思って
たんだろう

相当驚いてる

「……あれが直撃して無傷って、どういうことだよ」

「どうした、もう終わりか？気が済むまで攻撃していいぞ？」

その言葉にカチンときたらしい

「おもしれえ、ゼツテエぶったおしてやる!!」

その後、『千の雷』や『雷の斧』『雷の暴風』を連発するも俺に傷
一つつけられず、

魔力切れでぶっ倒れた後、

「お前強いな、どうだ、俺たちと一緒に来ないか？」

「……ナギ……!!」「」

なんて言ってきた、警戒心少なすぎだろこいつ

後ろの三人は正常だと思う

ま、予定通りだしこのままいくとしますか

「ああ、構わない」

「よし、じゃ、お前の名前教えてくれ。」

俺はナギ、ナギスプリングフォールドだ」

そついや名前どうしようか、前の名前なんて思い出せんし、
まあ、この格好で、この魔術を使ってるわけだし

「俺はフィアンマだ、よろしくな、ナギ」

「結局こうなるんじゃない。」

わしはゼクト、フィリウス・ゼクトじゃ」

「まあ、ナギならやりかねませんでした、

私はアルビレオ・イマ、アルと呼んでください」

「そつだな、

私は青山詠春だ」

三人ともナギにはすっかり呆れた様子だったが、どうやら俺を歓迎
してくれたようだ

というわけで、紅き翼の仲間になりました。

第二話 紅き翼（後書き）

はい、フィアンマが仲間になりました
名前は思いつかなかったのでフィアンマにしました
すいません

次回、あのバグキャラが登場です
それでは、また次回

第三話 襲来筋肉ダルマ！！

第三話 襲来筋肉ダルマ！！

俺が紅き翼に入ってから二週間。

特にこれといったことはなかったが、ゼクトから魔法、気の使い方を習っていた

やっぱ手札は多いほうがいいよね！

聖なる右を使ったらすぐに終わるけど

その合間に、俺は常に霊装の知識を確認していた
いろんな知識があった

これなら攻撃や防御、回復には事欠かないだろう

さらには、このローブの使い方まで入ってた

まあ、使えなきゃ意味ないしね

ナギはというと

「なあ！あの腕なんなんだよ、教えるよ」

てな感じでうざったく聞いてくる

そりゃ、あんなもの見たら気になるよねえ

などと他人事みたいに聞き流す

聖なる腕は一度使ったから発動の仕方も大体わかった
デフォルトもいじれるらしい

なので、自立防衛で攻撃を相殺できるようにしておいた
どうやら、魔法、物理は全く関係なく防げるようだ

確認も済んだし、この腕について話しとくかなあ

「と、いうわけで、質問があつたら聞いてくれ」

「何が、『と、いうわけで』なんじゃ？」

俺は華麗にスルーし、

「はい、じゃ、ナギ、質問は？」

「お前が使つてた、あの気持ち悪い腕みたいなのはなんだ？」

「あれは『聖なる右』つー強大な術式、つつか力そのものだ」

「『聖なる右』とはなんですか？」

アルもこれには興味をもつたらしい

「『聖なる右』つてのは、『右方の天使』である神の如き者ミカエルの力の
ことだ。

どんな邪法だろうが悪法だろうが、問答無用で叩き潰し、悪魔の王
を地獄の底へ縛り付け、1000年の安息を保障した右方の力。
それら奇跡の象徴たるミカエルの『右手』を元にした名だ。」

「あの時、軍はかなりの数だった、どうやって全滅させたんだ？」
詠春も気になったのか、質問している

「あの時も言ったが、腕を振っただけだ。

ただ、この右腕は「倒すべき敵や試練や困難」のレベルに合わせて、自動的に最適な出力を行う性質がある。

だから、俺が倒したい敵がいれば思った通りの結果を出すために適切に行使できる。」

「……バグ（だな）（ですね）（じゃな）……」

三人からバグの認定を受けた、別にうれしくもなんともないけど

「結局、どうということなんだ？」

バカが一人いました

懇切丁寧に説明してやったのに、ウィキに乗せてもいいくらいだったのに。

とまあ、冗談はここまでにして

「簡単に言えば、ただ右手を振ればそれだけで勝ってしまうっていうことだ。

ハイ、他に質問は？」

「あなたの持つてるそれはなんですか？」

アルが俺の霊装を指差している

「こいつは俺の魔術の知識が詰まったものだ」

「魔術？魔法ではないのですか？」

「ああ、おれはこいつは魔法とは呼ばねえ。

万人に使えるものじゃねえしな」

「どういふことですか？」

「俺以外の奴がこれを使えば、毒がまわって死ぬからな」

「毒、ですか？そんな危険そうに見えませんが」

「これに入ってる知識そのものが俺達にとって毒なんだ
ちなみに俺は『聖なる右』で毒をカットしてるからな。
そうでなければ、俺も扱えん」

「なるほど、そういうことですか」

「おい準備が出来たぞ、さっさと食おう」
詠春が呼んでる
どうやら鍋らしい

……鍋？

つてことはあれか、あのバグキャラがくるのか、なら邪魔される前
にさっさと食おう

「んっふっふっ、こいつが日本の鍋料理って奴か、
じゃ、早速肉を〜」

「あ、ナギ、おま、何肉を先に入れてんだよ！」

「トカゲの肉でもうまいかのう？」

「いいじゃねえか、うまいもんから先ですよ」

「バツ、バカ、火の通る時間差というものがあってだな……」

こんな会話してる間に俺は勝手に食ってる。うん、うまい

「フフ、知っていますよ詠春、日本ではあなたのような者を鍋將軍…と呼びならわすそうですね」

「ナベ・シヨーゲン!？」

「つ、強そうじゃな」

「奉行だ、バカ共」

俺はつぶやくが誰も聞いていないらしい

「わかったよ詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「すべて任す、好きにするがいい」

「ん〜、うれしくないなー（奉行じゃないのか？）」

詠春は苦笑いしている

〜数分後〜

「うめえなこれ、オスティアの姫子ちゃんにも食わせてやりたいぜ」

「姫子ちゃん？」

おそらくアスナのことだろうが一応聞く

「オスティアの姫巫女のことです」

「ふーん」

興味がなさそうに反応した後またパクパク食べ始める

「まあ、戦が終われば、彼女を自由にする機会もつかめるかも…です」

「その戦だが…どうも不自然に思えてならん」

「何が？」

「何もかもだよ、お前が言いだしたんだろうが鳥頭」

その時、何か風を切る音が聞こえて

鍋が吹き飛ばされた

ナギ、アル、ゼクト、俺は

パシッ　パシパシッ

ヒョイッ　ヒョイヒョイッ

バシッ　バシバシッ

パパパパパッ

と飛んだ鍋から肉をとっていた、空中でキャッチとかマジ何者…まあ、俺もなんだけど、聖人の身体能力マジパネエもちろん俺は野採までしっかりキープした。

「お食事中失礼」　おれは傭兵剣士のジャック・ラカン！」

「そう思っなら来んなよ、筋肉ダルマが」

「なんじゃ、あのバカは？」

「帝国のつてわけじゃなさそうだな」
俺たちは肉をパクつきながらしゃべってるから緊張感ゼロ

「おい、えいしゅ…」

鍋かぶってた

や、比喻とかじゃなくてフツーに頭に鍋かぶってた

「食べ物を粗末にするやつは…」

スパン

筋肉ダルマの持ってた剣が切れた

切る!!」

ギギャツ バカッ スバン

「おお、詠春の攻撃を凌いでるよ…」

「やりますね。あの男ちよつと前に南で話題になった剣闘士ですよ」

「ふーん、面白そうだな、あいつ」

と、言いつつまた鍋を準備し始める俺

だって食い足りねえし、しょうがないよね？

「あ、詠春がやられた」

ナギがそうつぶやくので奴らのほうを見る

ラカンが取りだした人造精霊らしきもの（服装はニーソックスと指

ホントお色気に弱いんだなあいつって。

「どうする？」

「おめえら手出すなよ」

「もちろんですよ」

「バカの相手はバカが一番じゃ」

「鍋ならまた用意しといてやるよ」

未だ鍋に意識が向いている俺

そのあと、俺、ゼクト、アルでまた鍋を食べた後、やることもないので、

ロープを操る練習を始めた

霊装から使い方を引き出し、記憶する

そして、精神を集中しイメージする

ということをやって寝るとしよう

（13時間後）

おいおい、辺りの地形変わってねえか？

だがまあ終わったみたいだし、ナギを回収してとっととずらかると
しようか

くその後く

いつの間にかラカンが仲間になってた
びっくりしたよ

だってホントにいつ入ったかわかんなかったし

「ようファイアンマ、お前強いんだって？
俺と一回勝負しねえか？」

ふむ、このバグキャラの力を確かめるにはちょうどいいか

「ああ、いいぞ」

「よっしゃ、じゃあ、行くぜ！オラア！！」

『千の顔を持つ英雄』で大量に剣を出した後、それを投げってくる

それを俺は顔色一つ変えずに聖なる右で消し飛ばす
最適な出力を出すつつつても俺の意志によるからな

原作は完成したもののすぐにやられてたが、ここまで圧倒的とは思

わなかった

消し飛ばした余波で突風が起こる

「うおっ！！どうなってんだその腕！」

「後で教えてやるよ、じゃ、とっととやられる！」
俺は右腕を振るう

「気合防御！！」

ドゴオオオオオオン！！

爆音が響く

「クツ、なん・・・だよ・それ・・・」
バタツ

…さすがに気絶したか
つか、気絶させようと思って振るったのにここまで力が出るとは
すげーなラカン

その他四人は口をぽかんと開けている
まあ、地形軽く変わってるもんな、当然か

ラカンを回復させながら思う

次はグレート・ブリッジか？と

第三話 襲来筋肉ダルマ!! (後書き)

ハイ、バグキャラ登場です
ファイアンマチートすぎますね

とりあえず、今回説明したようにやっていますと思います

次回はグレートブリッジです
では、また次回

第四話 グレートブリッジ作戦とウエスペルタティアの王女

第四話 グレートブリッジ作戦とウエスペルタティアの王女

はいどーもー、俺でーす。

ちよつと不機嫌です。敬語使うほどに。なぜかというと…

数日前にまた帝国とやりあったんです

その時、聖なる右の力を思いっきり振るったら味方にまで被害が及びまして。

上の人に自重しろと怒られました

その上前線から外されるから戦う機会がなくてつまらない

半分俺のせい、もう半分は紅き翼の全員のせいということで、ナギやジャックは俺にキれるから

聖なる右で軽くあしらってます

今現在、アルギユレーの辺境に追いやられている次第です

暇なので魔法や気の扱いの練習をする

実際俺が使えるのって火系統だけだったんだよね

他の系統も使えないことはないけど、一般的な威力が出ればいいところ

火系統は魔法の射手でナギの白き雷を打ち破り、ゼクトに呆れられた。

「バグにも程があるじゃろう」

って言われちまったぜ

気に関しては身体能力を跳ね上げて使ってる

元々聖人の身体能力って冗談じゃないぐらいに高いから気を使ったり
らすげえことになった

俺の目的は魔力のコントロールだけでも達成できてたけどね

ローブを使うときに魔力こめると防御力があがんのよ

それこそ、雷の暴風とか防げた。

ローブは焼け焦げてどうしようかと思ってたなら、次の日なぜか完全
に直ってた

ゼオン達はマントは特殊なブローチがあったから直ったって言うて
たし、

特殊な術式でもかけてあんのかな

とりあえず、ローブを自由自在に操る練習と霊装から知識を取り出
し吟味するっていうのが、俺の今の楽しみだね

グレートブリッジのときはいやでも駆り出されんだし、今のうちに
いろいろやっとかねーとな

〈数日後〉

お呼びがかかった
グレートブリッジの奪還戦だ

「行くぞてめえら、グレートブリッジを封鎖せよ!!」

「何いってんだフィアンマ…今回は封鎖じゃなくて奪還だ」
詠春が呆れたように言う

「わかってるよ、こついうのはノリが大事なんだ」

「そんなもんかのう…」
ゼクトも呆れている

とにかく今から戦闘だテンションが半端じゃない

「ジャック、準備はいいか！」

「おうよ、いつでもいいぜ！」

「ナギは！」

「俺もだ!つてか、俺がリーダーなんだ。俺に仕切らせる!!」
俺は無視して

「よっしゃあそんじゃいくぜ!」
と、意気込んでいた

結果だけ言おうか、
勝ったよ、うん、楽勝

ただ、また怒られてます、俺

原作でフィアンマが使ってた30〜40kmある巨大な剣、使ってみただよ

すごかった、巨神兵とか艦隊（空と海両方）を一刀両断してるからね
ただ調子に乗りすぎて橋まで切っちゃったんだよ

と、言うわけで、ただ今一人で修復作業中です

あ、この作戦が終わった後から、ナギは味方から『千の呪文の男』、敵から『連合の赤毛の悪魔』といわれるようになった

俺もあつたよ、そういう厨二的な呼び名

『魔の腕を持つ男』とか『魔神』とかいろいろ、中には『でかすぎる剣を使う男』なんてのもあつたな

俺の聖なる右は天使の力であって悪魔の力じゃないんだが、魔神に関しては何も言えない、インデックスは実質「魔神」そのものかそれに近い存在だ。

まあ、この世界と禁書の世界で魔神の定義が一緒かは分かんないけど。

また、シルビア曰く「普通の魔力だけで魔神の力を行使する者は真正銘の怪物」らしく

俺の魔力そのものは一般人より少し多いくらいだからなあ、それを使う俺が魔神や怪物と呼ばれてもおかしくは無い、か

まあ、どうでもいいけど。

こんなこと考えてる間に修復終わったしね

いやー、マジで便利だわインデックスの知識。

こんなもん直す術式まであるとは思わなかった。

〈また数日後〉

ガトウとタカミチが仲間になった

模擬戦をやって居合拳を初見で破ったら、ガトウがえらく落ち込んでた

タカミチが一時期親の敵でも見るような眼で見えてきたが、何度か模擬戦して

俺がどれだけ規格外かわかったらフツーに接してきた。

俺そこまで規格外かなあ、感知に関しては相当鍛えたよ。相手を発見するために。

感卦法は何度か練習したらできるようになった
元々コントロールに関してはそうとう鍛えてたからね、俺、ロープ
のために

そして、ガトウとタカミチが『完全なる世界』を発見した
とうとう明るみに出てきたな、あいつら。

で、今はそのガトウに呼ばれて本国首都に来ている。

なんでも協力者に会って欲しいからだそうだ。

「で？ 協力者って誰よ？」

質問すると実にいいタイミングで一人の男が近づいてきた。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。」

ならなんで出てきたんだよ

「主賓はあちらのお方だ」

登場したのは、ウエスペルタティア王国アリカ王女。

やっぱり本物はきれいだね、美人だ

ジャックは『気安く話かけるな、下衆が』って言われてたし

ナギは見とれてたし、アリカ姫はナギと話すと雰囲気は柔らかくなる。

俺は思う

リア充よ、滅べ、と

それはともかく、アリカ姫は自ら調停役となり、戦争を終わらせようとしたが、力から及ばず俺たちに助けを求めたわけだ

なのでオレ達は『完全なる世界』コスモエンテレケイアについて独自に内偵を開始した。オレは原作のおかげで何となく知ってたけど確信はなかったから何も言わなかった。

ナギとラカンとは肉体労働専門過ぎるから適当に遊ばせといた。俺も肉体労働派なんだが、相手の頭から情報抜き出せるからね

俺は下部組織の連中を捕まえて頭の中にある情報を覗くつー趣味の悪いことやってた
これが一番効率いいからな

あんま意味なかったけど。やっぱりこの辺に関しては徹底してるよね、あいつら

詠春、アル、ゼクト、タカミチは調査にでた。

ガトウとオレは集められた情報の整理をすることが多かった。

ナギはアリカ姫と一緒にいることが多かった。叩かれたり、荷物持ちしたり、叩かれたり、荷物持ちしたり、荷物持ちしたり、パシリか？

数回公園デートっばいこともしてた。

まあ、いい気分転換になるだろうと思っただけでおいたが

ジャックは原作通りプールで遊んでた

オレとガトウは部屋の一角で、集めてきたファイルの整理・確認をしている。

「おいガトウこれ見てみる。」

そんな中でオレは重要な情報を見つけた。

「な！まさか・・・こんな・・・」

ガチャ

「よおどうしたフィアンマ、ガトウ そんな深刻な顔してよお」

オレらが唸っているとラカンがプールから帰ってきた。

実際唸ってるのはガトウだけだが、俺はもう知ってたからどうとも

思わないし

「ああ、ラカン 実は遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが…」

「ヤバいのか？」

「これがどうにも信じがたい内容でな 情報のソースは確かなんだが…」

「ただこのファイル通りだと奴らの行動も納得できる部分があるんだよ。」

「もっとはつきり言えやお前ら」

「言ってもお前は興味無い話だよ。」

多分「めんどくせえ」とか「あほらしい」とか言つ気がする。

「ま、これについてはみんなを集めてから会議かな」

「今はこっちのほう^が重要だ この大物も奴らと繋がりがあ^るかもしれん」

「なっ！こいつは今の執政官^{コンスル}じゃねーか！メガロメセンブリアのナンバー2まで奴らの手先なのか!？」

「あれ、知^って^んのかジャック？」

「バカにすんな、さすがにこれくらいの大物は知^ってる」

まあ、国のナンバー2だしね

「確証はまだ無いから外で喋るなよ」

ズズン！！

「なんだっ！！」

ジャックが驚いている

おそらくナギとアリカが襲われたのだろう

まあ大丈夫だろうしほおっておこう

さて、この後のこと考えねえとな

第四話 グレートブリッジ作戦とウエスペルタティアの王女（後書き）

はい、今回はここで終わりです
中途半端に終わってすみません

次回、じゃじゃ馬姫の登場です
それでは、また次回

第五話 英雄から犯罪者へ

第五話 英雄から犯罪者へ

はいども、俺です。

今現在詠春がナギに説教してます

「貴様は一昼夜アリカ王女を連れまわして、その拳句襲ってきた敵の本拠地を潰してきたのか！！」

なんのために秘密裏に調査してると思ってる！

大体、王女様に怪我でもあったらどうするつもりだ！！」

「でも、姫さんもノリノリだったぜー？」

「そんなわけが・

「詠春さーん！！ さっきあの怖い冷血お姫様が、今 廊下で僕に向かってにっこり…」

確かに笑いましたよね、ゼクトさん！！」

「うむ、驚いたのじゃ」

「な？」

詠春め、何も言えなくなったら

「それに…ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

その後、ナギはアリカと何か話していたが、両頬に紅葉マークを付けていたので
俺とジャックが大爆笑してた。

さて、マクギルの爺さんに会いに行かなくちゃな

はい、今現在マクギルのところに来てます

あ、俺はタカミチ達と一緒にだよ

マクギルに会いに行ったのは、ナギ、ジャック、ガトウ、詠春だ
詠春は俺の代わりに行かせた。

「なぜ行かなかったのですか？」

「ん？ま、話すだけなら別に俺はいらねえだろ」

「それもそうですね」

「とつとと帰ってこねえかな、あいつら」

ソファで寝転がってくつろぎながらそう呟く

ドオオン！

しばらくくつろいでると、いきなり何かが発したような音がした。

「な、何事ですか!？」

タカミチが驚いている

「落ちつけよ、タカミチ、こういう予測できない事が起こっても、頭はクールに考える」

焦ってもいい案は出ない」

「そ、それもそうですね」

アーウェルンクス達とドンパチやり始めたな

俺は念のために霊装を準備しながら逃げる算段を付ける

しばらくすると騎士たちが乗り込んでくる

「動くな!! 貴様らにはマクギル議員暗殺の容疑がかかっている!

」!

しかし、俺達は気にせず

「アル、どう思っつ?」

「おそらく、完全なる世界の誰かにはめられたのでは?」

「現状ではそれが一番可能性があるな、マクギルの爺さんは完全にこちら側だったはずだし」

「ええ、ナギ達にも何かあったと考えるべきでしょう」

「お主らずいぶんと余裕じゃのう」

「落ち着いて話してないで、これ何とかしてください!!--」

タカミチめ、落ち着けて言ってるのに
俺がいる時点でこっちの勝ちが決まったようなものなんだがな、それ
にこの程度じゃ霊装も『右腕』もいらぬ

「しょうがねえな」

俺はソファから立ち上がる

「う、動くなと言ってる!!」

「声が上がってるぜ？まあ、英雄と呼ばれる奴らを相手にしたら
しょうがないとも思うが…」

この場合は命取りだ」

俺はポケットに手を突っ込み

倉庫の中から閃光弾を取り出し、足元に落とす。

バシユ!!

閃光弾が光ると同時に俺は動く

アル達をロープでつかんで、窓を割って外へ出る。ここ三階だけど。

下は地面だが問題なく着地し、アル達を伸ばしたロープの上に乗せ、
ダッシュで逃げる。

「ナギ達とは後で合流しよう、まずはこのまま町の外へ出る。」

「ええ、それがいいでしょう」

アルはまだ目が見えていないのか、目が泳いでいる

「師匠達は大丈夫でしょうか…」

「心配済んな、あいつらは達人クラスだ、そんじょそこらの奴らに

「やあ負けねえよ」

「そ、それもそうですね」

「それにしても、ナギ達め、ずいぶんとしっかり罠にかかったようじゃのう」

「大方、マクギルにでも化けてたか、マクギルを操ったんだらう」

「そうじゃな…ところでお主、なんで目が見えておるんじゃ？」

「自分で使つといて自分が食らうようなへまはしねーよ。

つか、念のためにいろんな武器入れといてよかつたぜ」

さて、これから合流して、この後の策を考えねえと。

〈合流後〉

「全員無事のようにだな」

「ああ、俺達も問題ない、だが姫さんがやべえはずだ。助けに行こう」

「わかってる、そう言つと思つて準備しといたんだ」

「えらく行動が早いな、どうしたんだフィアンマ？」

「何、奴らにはめられて英雄から犯罪者になったんだ、奴らに返しをしないとな」

実際は連合に従う必要性がなくなって楽になったーとか思ってるけど、

「そうか、じゃあすぐにでも助けに行こう」

「よし、者ども、出陣じゃー」

「だからお前が仕切るなつての！」

いつまでたつてもシリアスにならねえなこれ

では、作者の文章力が皆無なので少々飛ばさせていただいて

俺たちは姫様達を救出した後、隠れ家へと向かった

「なんだ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か、どんな所かと思えば掘立小屋ではないか」

「俺達逃亡者に何期待してんだ、このジャリはよ」

「奇遇だなジャック、俺もちよつどそう思ってたところだ」

「なんだ貴様ら、無礼であろう！」

「へっへ〜ん、生憎へラスの皇賊には借りはあっても貸しは無いんでね」

「俺は特に無いな、軍艦や鬼神兵を潰してはいたけど」

「何い、貴様ら、何者だ！」

「俺は無敵の傭兵、ジャック・ラカン様だ」

「自分で無敵って言うなよ…俺はフィアンマだ」

「何？貴様のようなモヤシがああ魔神のはず無かろう！嘘を尽くでない！」

「モヤっ…なあジャック、俺そんなに細いか？」

「普通じゃねえの？それより俺はお前のその細腕のどこに俺と同じくらいの腕力があるのかが知りたい」

ああ、こないだ腕相撲やった時のことか、いいところまでいったんだけどなあ。結局負けたけど。

閑話休題

「ま、他人からどう思われようが俺は関係ないし、好きなように思っただけだよ」

それだけ言っただけのほうに意識を向ける

「じゃが……主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」
お、ちょうどいいところじゃん、てかジャック、無敵と聞いて自分を指差すな

「世界全てが敵 良いではないか。こちらの兵はたったの八人。
だが最強の八人じゃ」
むしろ俺一人で世界滅ぼせるけどね

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり、剣となれ」

「やれやれ。相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

ここでナギが跪いてアリカ王女がナギの肩に剣を当てる。

「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

名シーンキタコレ

輝いて見えるぜ、ナギ。

第五話 英雄から犯罪者へ（後書き）

はい、終わりました

やっぱり文才無いですね、すみません
意見があればどしどし言ってください

次回は番外編を書こうと思います

では、また次回

番外編その一 紅き翼最強合戦勃発（前書き）

一万PVありがとうございます

これからもがんばっていきたいと思います。

それでは番外編です、どうぞ

番外編その一 紅き翼最強合戦勃発

番外編その一 紅き翼最強合戦勃発

ある暇な日

突然だった、ある日、みんながのんびり過ごしていると、テオドラが急に

「結局、最強集団というのが、誰が一番強いんじゃない？」「なんて言い出すから

地雷を踏んだ

と、紅き翼の数名は思った。

「やっぱり俺だろう」

ジャックはすぐに立候補する

「いや、俺に決まってるんだろ」

ナギはすぐさま反論する

そして、ナギとジャックがにらみあっている間、他の奴ら全員が俺を見ていた

俺は、岩場に寝そべって空を眺めながら話を聞いていた

が、俺が反応しないと

「あれ、フィアンマさん、最強合戦に加わらないんですか？」

タカミチは不思議そうに聞く

俺はだるそうにしながら

「俺はもうその二人を倒したことがあるからな、別にいい」と答えた

「……何っ！あの二人より強いのか（ですか）！？」「」「」
王女ふたりとガトウ師弟が驚いた顔でこっちを見る

「ああ、そうでしたね、あなた方は見た事ありませんでしたっけ」
アルはゆったりした口調で話す

「ああ、知らなかった。で、どうやったんだ？

あの二人を倒すなんてよっぼどすごいことをしたんだろう」
「またもだるそうに顔を向けて

「いいや、ちよろつと右腕を振ってやっただけさ」と話す

「そんなことは無いでしょう、そういえば僕等、フィアンマさんの異名の元の『魔の腕』を見てませんよね？」
タカミチは興味津津に聞いてくる

「ああ、俺も見てないな」

「「妾達もじゃ」「」

「あれは『魔の腕』じゃなくて正式名称は『聖なる右』っつーんだが…」
めんどくせえ、アル、説明よろしく」
そう言っつてまた空を見上げる

「いえいえ、やはり使っている本人が話すべきでしょう」
アルめ、クスクス笑いながらこっちを見てやがる

「しょうがねえな」
そう言つて体を起こし、聖なる右を発動させる

「こいつはな、正式名称を『聖なる右』と言つて、『倒すべき敵や試練や困難』のレベルに合わせて、自動的に最適な出力を行う性質がある。

更に、莫大な出力と様々な力を持つ腕自体が、最適な力を自動で発揮するから、

俺には通常勝つために必要であるはずの、破壊力・速度・硬度・知能・筋力・間合い・人数・得物等が必要ない。」
と、説明するが、今一ピンとこないらしく

「結局どういうことですか？」
なんて聞き返してくる

「簡単にいえばただ右手を振ればそれだけで勝ってしまうつてことだ。

例えば、「触れれば終わる」から破壊力はいらなし、「振れば当たる」から速度はいらなし。

戦闘において万能と呼べる能力。

それがこの『聖なる右』だ」
俺がそう締めくくると、

「……正にバグ（じゃな）（だな）（ですね）」「……はい、またもや公式バグ認定されました」
別にどうでもいいんだけどね

「では、使わなかったらどうなのじゃ？」
テオドラが又聞く、そういうことというと……

「よし、フィアンマ、俺と勝負しろ！」
ほら、やっぱりこうなる
そして二人同時に叫ぶな、うるせえ

「ここでやるわけにはいかんから、妾の別荘でやるつ
テオドラマめ、こういうときは準備が早い

俺はナギ達に引っ張られて別荘に入った

面倒だから二人同時に相手をすることにした

〈SIDE 三人称〉

フィアンマが霊装を構える

それと同じようにナギとラカンも構える

詠春が開始の合図を出す

それと同時にナギは魔法、ジャックは剣を投げて攻撃してくる

霊装があわく赤色に光る

轟！！と音と共に爆風が吹き、

フィアンマは炎よりも血に近い赤色の翼を出す

二人の攻撃を翼で薙ぎ払いながら、同時に

「第三十五章第三十八節『硫黄の雨は大地を焼く』 即時発動」
オレンジ色の灼熱する物体が降り注ぐ

一つ二つではない

空から五十以上の矢が、ナギとラカンに降り注ぐ

対する二人は瞬動で矢を避け続ける

フィアンマはそれを先読みし、伸長した血の翼で二人を吹き飛ばす
ナギは魔法で、ラカンは剣でそれぞれ防ぐが、止めきれずに吹き飛ばされる

「ハッ！上等だ、行くぜナギイ！！」

ラカンは剣を投げる

「おうよ！！魔法の射手 雷の101矢！！」

ナギは魔法を使う

だがフィアンマは不敵に笑い続け、

『右へ歪曲』と呟く

すると突然魔法の射手が曲がり、ラカンの剣を弾く形で落とす

「何っ！？どういうことだ、ナギ！！」

「俺が聞きてえよ！！」

二人が喧嘩する。

そしてほんの一瞬だけ隙ができる

フィアンマはそれを見逃さなかった

直ぐに

「第二十九章第三十三節『ペクスチャルヴァの深紅石』 即時発動」
と、容赦なく攻撃をたたみこむ

ビキビキビキッ！！

「グッ、ガアアアアアア！！！！」

足先から脛、膝などに激痛が這い上がってくる

フィアンマは動けなくなったところを血の翼で攻撃し、二人の意識を奪う

意識が無くなっていることを確認して血の翼を解除し、回復魔術を使って、二人を治療する

観戦していた他のメンバーは呆然としていた

くSIDE 俺く

はい俺です

ナギとラカンが目覚めた後から俺に対して質問の雨あられです

というわけでQ&Aをやりたいと思います。

「じゃ、最初の質問、どうぞ」

「あんな魔法があるのか？というかそもそもあれは魔法なのか？
これはアリカ

「あれは魔術っつーんだ、魔法とは違う理論できていて、本来は
『才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術』
だ」

「『才能のない人間』とは？
これは詠春

「例えるならタカミチのように生まれつき詠唱ができない体質の奴
だな」

本来は『原石』に対しての『魔術師』のことだが、まあ間違っちゃ
いないと思う

「なら、僕もその魔術が使えるんですか？！」
タカミチがすげえ食いついてきた

「理論上は魔力を生成することができれば可能のはずだし、正規の
手順を踏めば素人でも使える、一部例外もあるが」

「あなたは依然、その『霊装』から魔術の知識を引き出して使用する、
と言っていました、毒があるから一般人には不可能なのは
？」

これはアル

「こいつに入ってるのは『原典』^{オリジン}の知識だからな、『聖なる右』で毒をカットしている俺以外は基本的には扱えない。だが、仮に口頭で説明し、それを理解できるなら魔術は使用できるだろう」

「口頭で伝える必要性はあるのですか？」
またアルだ、この話題に食いつくな

「基本的に伝えて残すためには、本に書くなどをするが、著者や地脈の魔力を使い、本そのものが小型の魔法陣と化しているため破壊や干渉を受け付けない、なんて面倒なことになるからな。

俺が書けば否応なしに『原典』レベルになるし、原典は自らのページを魔法陣に変えて半永久的に活動し続ける。しかも見ればほぼ100%廃人確定、こんな物騒なもん残しとけるわけねえだろ」

「確かにそうですね」
納得してくれた、頭が回る奴は説明が一回で済むから楽だ。

「俺の魔法の射手を曲げたのはどうやったんだ？」
これはナギ

「あれは『強制詠唱』^{スベルインターセプト}っていつてな、『ノタリコン』という暗号を用いて術式を操る敵の頭に割り込みを掛け、暴走や発動のキャンセルなどの誤作動を起こさせるといって『魔力を必要としない魔術』だ。
原理としては、順番に数を数えている奴のそばで出鱈目な数を言って混乱させるような物だよ。

ま、使うには相手が使おうとしている魔法を解析し、理解してなき

やだめだが」

魔法に関しては俺とナギは同じもの使ってるしな、解析の必要性もなかった。

「『ノタリコン』ってなんだ？」

またナギだ、あれがそんなに気になるのか。

「『ノタリコン』ってのは、文や単語の連なりの頭文字を取って新しい単語を作ったり、

単語からもとの文や単語の連なりを復元することだ」

「あの赤色の翼は？」

これはラカン

「あれに関してはよくわからん、十字教をベースにした魔術だっ
ことくらいしかわからなかった」

「それで使えるのがすごいな」

これはガトウ、そんなに褒めるなよ、照れるだろ

「足りない知識は霊装で補ってるからな、何とかなってるし、
そもそも術式があれば魔力流せりゃ素人でもできる」

「ふーん、そういうもんか」

ガトウは納得したようだ

「これで終わり？」

「ああ、大体聞きたいことは聞けたから、もういいぞ」

「そーかい、じゃ、俺は疲れたから寝る」

紅き翼は今日も平和だ。

番外編その一 紅き翼最強合戦勃発（後書き）

はい、と、言うわけで書いてみました

ファイアンマの聖なる右なしの戦闘

チートすぎますね、ありえませんが

読み返すと説明ばっかでした、すみません

なんか誤ってばかりな気がします

次回、最終決戦です

ではまた次回

第六話 THE 最終決戦（前書き）

質問があったので答えておきます

フィアンマの年齢は十七、八くらいだと思っておいってください

第六話 THE 最終決戦

第六話 THE 最終決戦

はい、俺です

現状を説明しようか、

俺達は武装マフィアや武装商人、私服を肥やしている役人なんかを潰しながら『完全なる世界』の足取りを追った。

映画なら三部作。単行本なら十四巻分ぐらいはいく大活躍だ（ラカ
ン談）。

そして死闘を繰り広げた末、遂に奴らの本拠地、世界最古の都。王都オステイア、空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』にまで追い詰めた。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

こんな会話を聞きながら俺は思っていた

……これホントに俺一人でも勝てるかもしれんなあ、と

正直に言えば、『聖なる右』で『墓守り人の宮殿』をアスナもろとも消し飛ばすのがいちばん簡単だと思う。

原作がおかしなことになるのでやらないけど。

「な、ナギ殿！ 帝国、連合アリアドネー混合部隊 準備完了しました！」

お、若いころのアリアドネー総長、セラスちゃんじゃないか

「おう！あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達の本丸に突入できる。色々と頼んだぜ？」

「ハッ！そ、それであの…… ナギ殿」

「ん？」

「さ、サインをお願いできませんか！」

「おお？ ああ、いいぜ。それくらい」

原作読んでても思ったことだが、

いいのかそれで

飯にも今から最終決戦だぞ、と思ったがどうせ勝つだろうし、いいやと思つてほつといた。

そしてたつた今ガトウから連絡が入った。

連合・帝国の正規軍の説得は間に合わないらしい。

「既にタイムリミットだ」

「ええ。彼らはもう始めています……」世界を無に帰す儀式』を。
世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼らの手にあるのです」

「ああ。よおしつ、野郎ども。行くぜっ!」
そう言っつて俺達は飛び出していく

そして入口近くに来て異変に気付いた。

聖なる右が不安定なのだ。

使うたびに空中分解しかかる

明らかにおかしい状況、だが確かめる暇は無かった。

そして六人の人間が現れる

いや六人は人間ではなかった

それを一目で看破して、考える。

そして、そいつらの相手は俺がすることにし、ナギ達を先に行かせた

六体を観察する

全員が爵位級を圧倒的に超える魔力を持っている

「お前が、『魔の腕』の持ち主か？」
一体の悪魔が俺に問う

「いいや、こいつは『聖なる右』だ、天使の術式だから、『魔の腕』
では無いよ」

「そうか、天使の術式か。それはミカエルの物をもとにした術式か？」

それを聞いて俺は確信する

「ああ、かつてルシファーを切り伏せた剣をも扱えるものだ」

「そうか、ならばその腕はもはや使い物にはならなくしてやるう、それを聞いたとたん、『聖なる右』が空中分解した。

「……何をした？」

俺は冷静に聞く

「ほう、冷静なのだ、てっきりそれだけに頼っていたものだと思っていたが」

悪魔は笑っていた

「あらゆる可能性とは起こりえるものだ、『光を掲げる者』^{ルシファー}よ」

「ふん、もう見破ったのか、つまらないな」

「種明かしをしてほしいね、ま、大方大昔にミカエルに負けた時の経験つてところだろうが」

それを言った途端、悪魔の一体が飛び出してきた

〈SIDE 三人称〉

フィアンマは霊装を使って悪魔殺しの術式を展開させる。

そして『倉庫』から数千、数万もの武器をロープの外側から出し、

悪魔殺しの術式を刻み込ませ、悪魔を貫いた。
悪魔は還ることなくそこで絶命する

時間にしてほんの数秒

武器をすべて回収し、五体に減った悪魔たちを見る

「すごいな、あの一瞬で倒すとは、我々も本気を出さざるを得ない
だろう」

そう言っつて悪魔は全身に魔力をこめる

「舐めるなよ、『聖なる右』が無くとも、お前らを倒すことなど造
作もないことだ」

フィアンマは不敵に笑う

それが気に障ったのか、ルシファー以外の四体の悪魔が襲いかかる

フィアンマはあわてることなく、轟！！と血色の翼を展開する

だがその翼を振るうことなく、バン！！と弾けさせる

血飛沫ちしぶきのように舞う赤い光が悪魔たちを襲う

一つや二つではなく、

数十もの攻撃が同時に、だ。

悪魔たちはそれを避けきれずに吹き飛ば

「ほう、やはりこのレベルの悪魔では必殺とまではいかない、か」
フィアンマは笑いながら次の行動へ移る

フィアンマは吹き飛ばした悪魔の内一体に狙いをつけ、術式を展開した

「第十七章第三十三節 豊穰神の剣を再現、即時実行」
ブオン！！と三つの白い光が勢いよく飛んで行き、悪魔を切り殺す
だが、悪魔殺しの術式を組み込まなかったため、切られた悪魔は還
っていく

体制を立て直した三体の悪魔はそれぞれ手に武器を持ち、襲いかかる
ファイアンマはそれに対して顔色一つ変えずに術式を使う

「第二十二章第一節命名『神よ、何故私を見捨てたのですか』術式
準備完了、即時実行」

ファイアンマの顔を起点に巨大な魔法陣が宙に浮かび、赤黒い光線が
放たれる

その光は悪魔をたやすく食いちぎり、そのまま還す

襲いかかるのをやめ、後ろへ下がった二体の悪魔を見据える。

赤い翼を出現させ、三本の『豊穰神の剣』を周囲に侍らせ、瞳の中
に不気味に魔法陣を輝かせながら、ファイアンマは告げる

「この程度か、悪魔共」

悪魔たちは逆上しない、今までの攻撃で明らかにファイアンマの方が
強いと判断できたからだ
だから悪魔たちは構える、ファイアンマがどんな行動を起こそうと対
処できるように。

だが、無駄だった

二百メートル程の距離を一瞬で詰め、一体は豊穰神の剣で切られ、
一体は赤い翼で挟まれて引き裂かれ還される。

魔神は告げる

「さて、後はお前だけだが、どうする？」

悪魔は答える

「お前と戦うのは楽しそうだからな、存分に戦わせて貰おう」
魔神と悪魔は構える

戦いの前に二人は告げる

悪魔は言う

「驕るなよ、人間風情が」

魔神は言う

「頭に乗るなよ、悪魔風情が」

魔神と悪魔は同時に動く

悪魔は拳を、魔神は翼を振るう

二人の攻撃は拮抗し、二人とも吹き飛ばされる

魔神は思う

（あれと拮抗するとか、マジで化け物かよアイツ）

悪魔は笑う

（ほう、俺の拳と同等か、やはりあの人間は面白い）

悪魔は剣を取り出す、全てが黒く塗りつぶされたように真っ黒な大
剣を

そして振るう

悪魔は豊穰神の剣とまともに打ち合い、赤い翼は拳で弾き、赤黒い光線は見て避ける

二人は拮抗していた

悪魔は全力だった

だが魔神はまだ余力があった

魔神は霊装で術式を構築する

ゴッ！！ドバツ！！と立て続けに太いビームのようなものが発せられた。

悪魔は剣でそれを弾くが、豊穰神の剣にあさく攻撃を入れられるバチッ！！と魔神の額当たりで火花が散り、放射状に衝撃が走る悪魔は体制を崩し、赤黒い光に左腕を吹き飛ばされる

戦況は傾いた

魔神は赤い翼で悪魔を叩きつぶし、豊穰神の剣を悪魔に突き刺す
決着はついた

悪魔は全身に切り傷や打撲があったが、魔神はほぼ無傷だった。

「むかつくじゃないか、俺と戦って傷が無いとは」

「いいや、怪我をしない様に立ち回って戦っただけだよ」

「フフ、やはりお前は面白いな、ミカエルの術式を使っていなければ、よい酒飲み仲間になれそうだ」

「そうかい、生憎と俺はあの腕をなくすつもりはない。さて、あれを元に戻してもらいたいね。」

それと聞いておくが他にあれを使える奴がいるのか？」

「心配するな、俺が還れば自然と戻るだろう。」

あれは俺が長い年月をかけて作り出したのだ、其処ら辺の人間においそれと使えるようなものじゃあない」

「そうか、それはよかった。」

じゃあな、悪魔よ」

「ああ、さらばだ、魔神よ」

そう言ってフィアンマはルシファーを剣で刺し、還す

〈戦闘後 SIDE 俺〉

ルシファーとの戦闘が終わって休んでいると突然《墓守り人の宮殿》が崩壊を始めた。

《墓守り人の宮殿》の中心から巨大な光球が発生していく。

するとメガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦と帝国軍北方艦隊が間に合い、光球を押さえ込む事に成功した。

そしてこの瞬間、実質的に世界は救われたのだらうと他人事のように

に思っていた。

第六話 THE 最終決戦（後書き）

ハイ、今回はこれで終わりです

フィアンマの強さがインフレ化してきました

今後の戦闘では俺TUEEEEEな展開になると思いますが
よろしく願います

さて、次回は終わった後のことです

それではまた次回

第七話 式典をサボる、そして始まる崩壊

第七話 式典をサボる、そして始まる崩壊

はいども、いつも通り俺です

戦闘が終わってナギ達が見た後、「なんで無傷なんだよ!!」
つていきなり叫んだくらいで、
後は、まあ原作通りだった

ゼクトは帰ってこなかった

分かってたけどね、原作でもあんなってたし。

そして、俺とアルは式典をサボった

今は酒場でジャック、アル、詠春と飲んでいる
その後、ナギが来てジャックと傷をド突き合っている

つか、死にかけたのに傷をド突き合つとか、バカにもほどがあんだろ

それを見ているとこっちをむいて話し出した

「なんで受勲式出なかつたんだよ!? フィアンマ!」

「めんどいからな、受勲式つてもものに興味もないし」

「お前らしいと言えばお前らしいが、テオドラがちょっと落ち込んでたぞ」

なんでだよ、フラグを立てた覚えはねえぞ

「そうかい」

そう言っただけ俺は酒を飲む

「お前もだぜ、アル、なんでだ!？」

「私、上がり症なもので」

「嘘つけーッ!!」

などと話していた

「そう言えば、あなたが戦ったあの悪魔たちはどうだったのですか？
無傷だったみたいですし、大したことなかったのですか？」

「そうだけファイアンマ、あいつら魔力量とか殺気とか半端じゃなかったぜ？」

「それを無傷で倒しているのもあり得ないのだがな」

「相手はルシファアとその他の悪魔だ」

それを言ったら全員が絶句した

「ルシファアを無傷って……お前どうなってんの？」
そう言われても困るのだが

「つーか、まともにあんなのと戦闘できるか。」

「撃食らったら死ぬわ、普通」

「それはそうですが、聖なる右を使ったのですか？あれなら確かに無傷でも領けますが」

「うんにゃ、今回は封じられて聖なる右は使えなかった」

「それで無傷……バグにも程があるでしょう……」

「まともに戦うかよ、あんなのと

相対してソツコーで悪魔封じの術式張ったわ、

じゃなきゃ無傷はありえねえ」

そう、実は悪魔封じの術式を張って、悪魔共の力を少しばかり殺^そいでおいたのだ。

「そうですね、それでも十分すごいですよ」
其処まで言われると照れる

さて、時間は少しばかり飛ぶが、今現在俺は空中の島の下に上昇装置を設置している

原作でフィアンマがベツレヘムの星を浮遊させたときに使っていた奴だ

即席で作ったものだから強度が足りず、数十分程度しか使えないからあまり期待はできないが、ある程度は持つはずだ

「よし……と、これで最後だな」

俺はすべてを付け終わると、タイミングを計ったように島々が崩落を始めた

俺はすぐに術式を起動させ、島々を浮遊させる
安定したのを確認した後、アリカに連絡を取った

「よう、アリカ女王さま。

救出準備はできてるかい？」

「フィアンマ！！お主、何をしている！？」

「何って、そりゃ人助けさ。

落下している島々を一時的にだが浮遊させている、今のうちに早く
住民を逃がすんだな」

「やめろ！いくらお主でも、そんな無茶をすればどうなるか…」

「無茶？バカ言うなよ、俺は俺にしかできないことをやってるだけだ
それが無茶かどうかは俺が決める」

「しかし…」

「グダグダ言うんじゃないよ。助けたいなら助ける、助けたくない
なら見捨てる

俺がどうなるうとお前の知ったことではないし、お前がどうなるう
と俺の知ったことじゃないだろうが」

「……感謝する」

「礼はいい、お前はやりたいことやるんだな」
それだけ言っただけで通信を切る

さて、あいつはどれだけ助けられるかな

第七話 式典をサボる、そして始まる崩壊（後書き）

はい、今回はちょっと短めです

ちよっと後付けしました、フィアンマがありえないくらいチートだったので。

次はアリカ女王の救出です

それでは、また次回

第八話 アリカ女王を救出、そして生まれるバカップル

第八話 アリカ女王を救出、そして生まれるバカップル

どうも、俺でーす

あの後のことを話しておこうと思う

結局、被害は一%以下に収まった

原作では三%程度だったらしいし、まあ多少いい方向には行ったんだろう

そして現在、アリカはメガロメセンブリアのクソジジイ共の手によって幽閉されている

俺は崩壊の後世界を回っていた、が、まあその話は後々するとして

俺は今、魔法世界にて、ガトウと電話中

『で、お前は どうする？アリカ女王の救出』

「行かないわけにはいかんだろう、ナギがようやく決めただ、俺も手伝ってやるさ。

だが…… 明後日だぞ、処刑日」

『いや、だってお前全然連絡つかないしさ、足取りも追えなかったし、どうやって連絡しろと？』

この通信だって、お前が魔法世界マジックに来てるって情報があつたからか
くれたんだ

連絡してほしいけりゃ、自分の居場所くらい教えておいてくれよ』

「そりゃ悪かったな、こっちもいろいろ忙しかったんだ

ま、方向さえ分かれば俺に距離なんてのは意味を成さない、すぐにも追いつくよ」

『分かった、変装用の鎧なんかはどうする？こっちで用意しておくが』

「いらん、見える距離にいれば直ぐにでも介入できるからな、それに俺はナギの方を手伝う」

『いいのか？あそこは魔力も気も使えないぞ』

「問題ない。俺の右腕に常識は通用しねえ」
そして電話を切る

俺はハッ、とする

あれは冷蔵庫（垣根提督）のセリフじゃん、と

まあどうでもいいか、直ぐにでも処刑場へ向かわなきゃな

俺は処刑場の方向を確認した後、聖なる右の力で数千キロを一瞬で移動したりしていた

そして処刑の日

今まさにアリカが飛び降りていた

それを確認して俺も直ぐに谷へと向かう

ナギはアリカをお姫様だっこして走っていた

「ナギ、無事か」

「フィンマ！ああ、大丈夫だ。

お前これなんとかできるか？走って逃げるのもけっこーきついんだよ」

「ふん、任せておけ。この程度なら直ぐにかたずけてやる」

そう言っただ俺は右腕を振るう

魔力も気も使えないって言ってたけど、聖なる右の出力は魔力だけじゃないみたいだからなあ

神の力でも使っただのかな、神上になっただけだし、あり得るけど

一撃で近くにいた魔獣を消し飛ばす

「さて、お掃除タイムだな」

そう言っただ一気に攻撃を始める

掃除はあっという間に終わった

まあ元々この腕の前には数そろえたところで無駄なんだけども

終わった後ナギとアリカを見ると、二人だけの桃色空間を作り出していた

うざかったのでジャック達の方を手伝いに行つて、気持ちよく戦艦を一刀両断していた

ナギはアリカを救えて浮かれまくっていた

あまりにうざかったので一回聖なる右で吹き飛ばしてやろうかとも考えたが、やめた

アリカが、あの時民を救うことを手伝ったことに対してお礼を言うてきたからだ

お礼言われて悪い気はしないよね

俺が救えたのはほんの二%程度だけだ。

その後、ナギが約束だからと京都に観光に行った

どうにも前々からナギが姫子ちゃんと一緒に連れてってやるってアリカと約束してたらしい

新婚旅行だろうに、俺達はついていかないほうがよくないか？
だがそんなことは気にせず、結局全員で京都に旅行に行った

と、言うわけで京都なう
いやー、転生前に行ったことあるけど、歴史のある建物って魔術的な意味を持つ物もあるんだねーとか考えてる

あ、服装はジーパンに赤いTシャツと黒のパーカーとフツートの奴だよ
さすがにこんなところじゃローブは着ない
アルは着てるけど

そういえば、ローブは空間から出し入れできるらしい
ずっと着たままだったので分からなかったが。

そして、

「ここが清水寺だ」

とは詠春の説明。すっかり観光モードになって『お前の地元だろ。
案内しろよ』みたいなことになって案内役をやらされている。

ドンマイ詠春

ちなみにこいつら相当周りから浮いてる気がするが、認識障害で何

とかしてる

そりゃ外国人がこんだけ集まって騒ぐと、普通は目立つよねー

ナギとジャックは清水寺から飛び降りようとしている

それを必死に止めようとしている詠春

横で笑っているアル

……平和だなー、と思う

ほんの数年前まで戦争してた奴らとは思えない

「ねえ、フィアンマ」

そんなことを考えていると、アスナが話しかけてきた
俺、なんか懐かれちゃったらしい

「ん？どうした、アスナ」

「おなか減った、何か食べたい」

「そっか、じゃあ近くの甘味所にも行くか？」

コクンと頷くアスナ、でも俺甘味所なんて知らないしな

「おーい詠春、この近くに甘味所ってあるー？」

「ああ、あるが、どうしたんだ？」

「んー、アスナが腹減ったってさ。晩飯までまだ時間あるだろ？甘
いものでも食べようと思ってな」

「そっか、なら……」

と丁寧に道を教えてくれる詠春、こついつとき地元民に知り合いがいるといいよねー

と、言うわけで甘味所なう

アスナとタカミチ（無理やり引っ張ってきた）と一緒に餡蜜食べてる

「おいしいですね、これ」

「ああ、詠春いいところ知ってるよな。

うまいか？アスナ」

「うん、甘くておいしい」

「そりゃよかった、後で詠春に礼を言わなきゃな」

そう言っただけまた一口食べる

うん、うまい

時間は少し飛んで、現在夜

こいつらマジで騒ぎすぎだろ、飲みすぎだ。

詠春にお前も同じと言われたが、気にしない方向で。

でも料理はスゲーうまかった
酒に合うものも沢山あったし

あまりに騒ぐので、縁側で月を眺めながら日本酒を飲んでいた
酒と適当に持ってきたつまみを食べていると、アスナが来て俺の隣
に座った

「どうした？もう晩飯食べ終わったか？」

「うん、おいしかった。

でもナギ達があんまりうるさいから出てきた」

「そうか、かなり騒いでるからな、あいつら」

そう言っつて酒を飲む

「……ねえフィアンマ、ナギ達もそれ飲んでるけど、おいしいの？」

「うん？…まあ、大人の味って奴だ。

アスナにはまだ早いな」

「そういうものなの？」

「ああ、そういうものだ」

そう言っつて月を眺める

本当にきれいな満月だと思う

それを眺めていると、バタバタと騒がしくなってきた、詠春が

「1600年間封印されてたりヨウメンスクナノカミという大鬼神
が復活したんだ！！」

とか言ったので

「ナギとジャックに任せれば？」

といったら、

「あいつら今酔い潰れてて戦闘できないんだよ、だから手伝ってくれ！」

マジかよ

つか、この短時間で酔い潰れるとか、弱いのか、飲みすぎたのか

それとも、意外と長い時間俺は一人で飲んでたのか

ま、その辺はいいや

アルはたぶん面倒事を俺に押しつける気だろうが。

湖なう

というわけでスクナを見に来たが、聖なる右で攻撃したら、一撃で悶絶しやがった

意外とへボかったな、大鬼神

まあ1600年も封印してたんだし、封印した術者は優秀だったんだらう

封印しに来た術者たちがあんぐりと口を開けているが、そんなにおかしなことしたかなあ、俺

原作でエヴァの活躍シーンを残すためにわざわざ封印させてるのに

本気でしたら塵に帰るよ？大鬼神

俺は面倒事を終えた後、疲れたので寝た

第八話 アリカ女王を救出、そして生まれるバカツプル（後書き）

はい、アリカ姫救出から京都編までです
楽しんでいただけたでしょうか

次回はあの少女の登場です
ではまた次回

第九話 『ホルス』への手がかり（前書き）

魔術についてですが一応伝えることができれば可能ということにしています

宗教防壁がどんなものか分からないので。

ルーン魔術なんかはやり方説明できればできそうですがね

第九話 『ホルス』への手がかり

第九話 『ホルス』への手がかり

ども、俺です

昨日の夜、大鬼神を封印したんだが、その際紅き翼の他の奴が酔い潰れていたらしく

今現在ほとんどの奴が二日酔いで寝てる

「飲みすぎだ、バカ共」

「私としては、なぜあなたが『二日酔い組』^{あっち}に入っていないのかが不思議なんです…」

「飲んだやつで俺以外で唯一無事なアルが言う」

「俺はそんなに度の強いやつ飲んでないからな」

「でも、これじゃ今日は観光できませんね」

「飲んでいないタカミチとアスナは無事だった」

「本当だぜ、ナギとアリカの新婚旅行なのに、主役が二日酔いじゃあな」

「面目ないぜ…」

「妾もじゃ…」

二人とも頭が痛そうだ

「しょうが無いな、其処ら辺散歩して適当に時間潰すか？」

「僕、師匠に修行つけてもらおう約束してたんですが…」

「あれじゃどの道修行は無理だろ、つか旅行に来てなのに修行とかすんなよ」

「それはそうなんですが…」

「ふむ、せっかくだし、俺が修行見てやるっか？」

「え、いいんですか？」

「感卦法だけだがな、俺居合拳はできないし」と、言うわけで

山の中にやってきました
暇だから、とアスナもついてきた

「よし、じゃ、始める」

「はい！左手に魔力、右手に気：合成！」
合成しようとして弾ける

「最初から合成させようと思うな、時間はあるから少しずつやれ。まずは気と魔力を同じくらいにするんだ。アスナ、やってみ」

「うん」

と言ってできる辺りがすごいよね

「ああやるんだ、分かったか」

「はい、…なんで自分でやらないんですか？」

「ん？アスナができてるのにお前ができないって悔しいだろ、お前が。

だからもっと集中しろ」

「そういうものですか、…左手に魔力、右手に気」

「よし、一旦そこで止める、自分の感覚で、これくらいで同じかなってところまでやれ。」

微調整は後でいい」

てな感じで、時間はあつという間に過ぎ、最後に居合拳を見ることになった

「では、ハアツ！！」

タカミチの居合拳が連続して放たれる

俺はそれを聖なる右で防ぎながら、出力を確かめる

「はあ、はあ…どうですか？」

「うん、まあ、これだけできてりゃ上等だろう。」

居合拳の練習は欠かすなよ、お前はそれ一筋だからな、いろんな魔法覚えようとするやつより、よほど強くなる」

「？ どういうことですか？」

「要は一本道で一流の域に入るか、いろんな道を通って一流の域に

入るかの違いだよ。

詰まるところ、お前はそれしかできないから、それを突き詰めれば最も短時間で一流になれる

だが、他の奴はなまじいろんな才能がある分、いろんな道を通るから時間がかかる。

いろんな道を通っても早く一流になれるやつもいるが、そんなのはほんの一部だ。」

「そういうものですか…」

「ああ、だから、毎日しっかり修行してれば、一流になれる日が来るのもそう遠くは無い」

「わかりました、がんばります!!」

タカミチは笑顔で頷く

後日、俺はみんなと別れて世界を回ることにした

出る前にアスナに「もう行っちゃうの…」とか言われて決心揺らぎかけたけど、俺はやりたいたいことがあるからな

断じて俺はロリコンでは無い

余談だが、ガトウが修行をつけようとしたら、タカミチの気合いの入り方が半端じゃなかったらしい

ガトウに「何言ったんだ?」とか聞かれたけど

気合いがあるのはいいいことだろ、とか言っでごまかした。

俺はみんなと別れた後、『法の書』の解析のためにいろんな国を回った

この世界にもアレイスタークローリーという魔術師は実在したらしく俺は今、そいつの痕跡をたどっているんな国を回っている

この世界の『法の書』はただの本だったが、多少なり手がかりがあった

エジプトなどにも『ホルス』への手がかりは探しに行ったが、大した成果は無かった

やはり『エイワス』なんかに関しては、情報が少なすぎるな

そんな中、イギリスの森の中で傷だらけのエヴァを発見した

追われているらしく、俺のことも敵だと思って攻撃仕掛けたが、

「誰だお前は！！」

とか追つてた魔法使いが言ってくれたので、誤解を解く必要性が無くなった

「邪魔をするなら容赦はしないぞ！」

とか言ってきたので

「喧嘩を売るなら相手を選べ、俺とお前じゃ格が違いすぎる」

と言ったら切れて、千の雷使おうとしたので、

『暴発せよ』

てな感じで強制詠唱で暴発させ、自滅させた

へボいな、あいつら

「なぜ助けた？」

「ん？君にちょっと聞きたいことがあるんだよ」

「私が誰だかわかっているのか？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだろ？
真祖の吸血鬼の」

「知ってて助けたのか？」

「当然、聞きたいことがあるからな。

答えてくれるなら、その『不死殺し』で付けられた傷を直してやるが？」

「……何が聞きたい？」

「アレイスタークロウリーという男についてだ
何か知っていることはあるか？」

「…傷を治してくれるなら話してやろう」

「交渉は成立だな」

俺はそれだけ言うと、聖なる右の能力の十字的超常現象の一つで呪いを解く

聖なる右マジ便利

呪いを解いたら勝手に治った。吸血鬼の回復力マジパネエ
エヴァが驚いて聞く

「なんだその気持ち悪いのは！？」

「気持ち悪いって…これは『聖なる右』と言って〜
面倒なので説明をスキップ

「なに！？まさかお前、あの『魔神』か！？」

「今更だな、まあそう呼ばれてはいるけど」

「なぜ私を助けた」

「だから聞きたいことがあるって言ってんだろ。」

「アレクスターという男について、もしくは『エイワス』について知っていることを話せ」

「『エイワス』というものは知らないが、アレクスターという男には心当たりがある」

「そいつは魔法使いか？」

「ああ、だが、あの男は自分のことを『魔術師』だと言っていた魔法も私たちが使っているものとも違っていた。

…だが、あの男は既に死んでいるぞ、今更あいつについて調べてどうするんだ」

「俺には目指すべき場所があるのさ。」

『ホルス』という時代の力へ」

「そういえば、奴も『ホルス』がどうのこうのと言っていたな」

「何！？よし、詳しく聞かせてくれ」

「ああ、構わないが…」

「それと、しばらく一緒に旅してもらおう
情報をすべて集め、それをまとめて『法の書』を解析しなければな
らないからな」

「なんで私がそんなことに付き合わなければならんのだ!？」

「安心しろ、生活に不自由はさせん。

追手が来たら潰してやるし、少しの間だけだ、我慢してくれ」

「……しょうがない、情報をすべて教えればよいのだろうか？」

「ああ、感謝する」

さて、アレイスターについての情報が手に入った

俺は必ず『ホルス』へとたどり着いてみせる

第九話 『ホルス』への手がかり（後書き）

はい、というわけで

『ホルス』への情報を手に入れました

これ以上強くなってどうするって気もしますが

次回は説明多めになると思います

ぶっちゃけまだ何も考えてません

ではまた次回

第十話 頂点の領域への道

第十話 頂点の領域への道

ハイ俺です。

今俺は、エヴァと共に旅をしている

エヴァはすごい

なぜかと言えば、エヴァがアレイスターの友人らしいからだ

これには俺もかなり驚いた

会っている可能性はあるだろう、くらいの気持ちだったのだが、どうやら魔術も見せてもらっているらしく

俺が『ホルス』の時代へたどり着く可能性はあるだろう

更に驚いたのは、なぜかエヴァがアレイスターの『ブラスタイピングロッド衝撃の杖』を持っていたのだ

なんでも、アレイスター自身から渡されたらしく、使い方が分からなくて困っていたらしい

エヴァの奴、これを渡してくれるほどアイツと仲が良かったのか？

てか、アレイスターよ、こういうのは普通秘匿する物じゃないのか？

まあ、俺はこれのおかげで『ホルス』についてかなり進展したのだが。

原作であいつ自身が『力の質や量ではなく、使い方の問題に過ぎない』と言っていたから、
質や量に関しては別に何の問題も無いのだろう

使い方も、奴が使っていたであろうこの衝撃の杖をエヴァから譲り受け、解析している

そういえば、この間夢に神が出てきたんだ
神については、プロローグに出てきた、俺を殺してくれた奴ね
では、回想をどうぞ

（回想）

俺は全てが真っ白な空間にいた

「……知らない「それはもういいです」…神様、あんた突っ込みの才能あるよ」

振り向きながら言う

十六歳くらいの女の子がいた

「そんな才能はいりません、それより、大事な情報を持ってきたんです」

「何？大事な情報って」

「転生者です」

その一言で理解した

俺という前例がある以上、可能性はあった

「…何を要求していたんだ？」

「『^{ゲイト・オラ・バヒロン}王の財産』、禁書の世界の超能力全て、幻想殺し（on / of
f 可能）、

ナギの数十倍の魔力、ラカンの数十倍の気、超人的身体能力、『直
視の魔眼』です」

なるほど、チート街道まっしぐらだな

「…ずいぶんと沢山あるんだな、俺のときは三つだったのに」

「私はそんなに甘やかさないんです」

「…さいですか。…でも、なんでわざわざ教えてくれたんだ？」

「私より下位の神が送った転生者に、私の送った転生者が負けるっ
て、なんか嫌じゃないですか」

「あんた見た目に似合わず負けず嫌いだな…！」

「見た目は変えられるので気にしません…！」

それと、時間軸がずれているので、彼がくるのはもう少し後になり
ます。

はつきり言ってしまうえば、ネギの弟です」

「そいつはまた、ずいぶんとテンプレな展開だな。

まあいいや、それより、聞きたいことがある」

「なんですか？」

「俺の右腕、『神上』になったことは、神に並ぶ者、または神
を超える者になったってことだ。

つまり、あんたと同列、もしくはそれ以上ってことにならないか？」

「ずいぶん今更な質問ですね。それはですね、神の世界にも序列つてもものがあるんです。」

そして、私はその中でも最上位の神なので、あなた方のいう『神上』にするには私より一つ下のランクに位置づけなければよいのです。結局、どの程度の力を与えるかは私次第ですし」

「神を超えた存在であるはずなのに、神に力を与えられ、ランクは最上位の一つ下、か。」

なんとも皮肉られてるな

まあ、それはいい。

アレイスタークロウリーに会わせてくれないか？」

「アレイスタークロウリーですか？」

そっぴいばあなた、ずいぶんとその人にこだわってましたよね」

「見ていたのか？」

「そりゃあ、気にはなりますよ。」

既に故人ですが、魂との会話を可能としておきましょう」

「ありがとうございます、神様

あんたやっぱり最高だぜ」

「ずいぶん調子がいいように聞こえますが…では、会話を終えれば現実の意識が戻るようにしておきます」

そう言っつて神様は消えて、アレイスターと名乗る男と会話した

く回想終わりく

会話のシーンが無いのは、はっきり言えば『ホルス』という時代の核ちからともいえる情報』とも言えることを話していて、作者がそれを知らないからだ。

禁書の原作でもまだ明らかになってないしね

だが、アレイスター本人と話せたことで、『ホルス』と『エイワス』
についての情報が手に入った
そして、アレイスター奴を介すことで『エイワス』そのものとも会話ができた

シークレットチーフとの『窓口』としての役割を果たしたアレイスターの情報

聖書や神学では説明のできない天使からの情報

そして『オシリス』の時代ちからから『ホルス』の時代ちからへの移り変わり

ピース欠片はそろった

俺はこれから禁書原作にいたアレイスターと同じ領域へとたどり着く

奴が数十年でたどり着いたなら、俺は数年でたどり着いてやる

0と1だけでは表せない領域へ、次元の違う領域へと

第十話 頂点の領域への道（後書き）

はい、今回は新しい転生者がくるといふ情報と、フィアンマが頂点の領域へたどり着く過程です
短めです

気に入らないのなら文句を言ってもらって構いません

転生者は、このままじゃフィアンマと戦う奴がいなくなると思ったからです

ネギまのキャラじゃフィアンマの相手にすらならない気がするので

次回、新しい転生者とフィアンマのその後の話です
では、また次回

第十一話 新しい転生者、あと適当な話(前書き)

そういえば、生徒会の水際が発売していることに今日気付いた

第十一話 新しい転生者、あと適当な話

第十一話 新しい転生者、あと適当な話

ども、俺でーす

さて、早速だが、前言撤回をさせてもらう

さすがに数年は無理だわ

最低でも二十年〜三十年くらいかかる

ということ、以前ノ（大戦とアリカ救出の間）盗賊などを潰しまくっていた時、金目の物を奪い取ってたんだが、一緒に『別荘』も手に入れてたんだよね

俺が手に入れた奴は、最高で一時間を七十二時間にできるんだけど、もうチヨイ何とかできないかなって、魔術の知識もフル活用して魔改造したら、

一時間が百六十八時間、平たく言えば一週間まで伸びた
其処そこはいいんだよ、結果が出たって喜べるよ

ただ、魔改造しすぎてこれ以上時間に関していじくろうものなら、おかしな魔術が発生しそうなんだよ

ほら、禁書の原作にあった『エンゼルフォール御使墮し』、あれを思い浮かべていた
だくと分かりやすい。

つまりは、あんな感じでどんな魔術が発生するか分かんなくなっちゃったってこと。

まだ発動はしてないけどな

おまけに魔法と掛け合わせたものだから、余計にわけわかんなくなっちゃって、『別荘』内でおかしな魔術が発生しそうなんだ

だけど、捨てるわけにもいかないんだよなあ

捨ておいて第三者が拾って時間軸いじくっておかしな魔術発動して誰かが行方不明になったーとか、頭がおかしくなったーとか。そんなことになったらめんどくさくてしょうがない

ちなみにエヴァにこれ見せたら

「お前のバグ具合についてはもう何も言わん……」

と、いうコメントと、呆れて何も言えなくなった表情を頂きました

俺もやり過ぎた感はあるけどね、後悔はしていない

んで、エヴァと別れた後／（神と会話して一週間後に別れた）、魔法世界に行き、

適当な遺跡に誰も入れない様に魔術を仕掛け、その遺跡内に別荘を配置し、別荘内に引きこもって研究を開始した

計算の結果、この別荘内にいたら、一日こもるだけで五カ月ちよいという結果になった

これを一年に換算すると、およそ百七十年程となった

ぶっちゃけ、現実世界に換算すると、一年足らずで『ホルス』の領域へ踏み込み、頂点の領域にもたどり着いちゃった。

てな感じになっちゃったわけで、その上、霊装に入っていた知識を頼りに修行した結果、あの黒いローブを自由自在に操り、なおかつ瞬間移動まで会得しちゃったわけで

「やること無くなった…」

というのが今の状況である

でも年取ってないあたり、不老って便利、とか思ってたりする

その後

とりあえず、盗賊とか賞金首を潰しまくって金目の物を奪い取ってたら、貯金のゼロのけたが十個ほどになった。

がんばったなあ、俺

そして、ホルスの力を確かめるために、紛争地域で戦ってる奴らに對して使いまくって虐殺したり、

難民なんかは俺がどうにかするのは面倒だから、適当な施設見つけて金持たせて放り込んで

その結果、立派な魔法使いと呼ばれるようになりました

俺は俺の欲でしか動いてないはずなのに、なんでこうなるのかな

上条みたく、行動した結果として、それらの行動が他人から勝手に善と評価されているに過ぎないとおもうんだよなあ。

まあ、どうでもいいけど

ていうか、もう原作の二年前じゃん、どうしようか。

…そっぴや、俺以外の新しい転生者がいたんだっけ、能力がアレだったから記憶にすら残ってなかったけど

〈SIDE 新しい転生者〉

どうも、はじめまして

俺の名前はシキ・スプリングフィールドです

今、俺はメルディアナ魔法学校で、双子の兄のネギ・スプリングフィールドと一緒に勉強してます

ちなみに俺が神様からもらった能力は、『ゲイト・オブ・バビロン王の財産』、禁書の世界の超能力全て、幻想殺し（on, off可能）、ナギの数十倍の魔力、ラカンの数十倍の気、超人的身体能力、『直視の魔眼』です

四年前に悪魔が村を襲った時、俺は何もできなかった
悪魔の一撃で気絶し、瓦礫に隠されてて奇跡的に助かった

そして、俺は能力を隠してみんながいなくてここで修行している
つまらないかもしれないが、これが最良だと思っている

呪いは解けなかった、『ルトルブレイカー破戒すべき全ての符』ならいけるかもしれないが、今の俺じゃ力が足りない

ネギは父親からもらったと言っていた杖を俺に渡そうとしたが、俺は断った。だってそうじゃないと原作変わりそうだし。

何故俺に渡そうとしたかといえば、自分だけ父親に会ったのはずる
いと思っただから、この杖だけでも、と思っただけらしい

いい兄だよ、ネギは。

原作ではこのハーレム野郎が、とか思ってたけど、見なおした

そういえば、俺のほかに転生者がいるらしい

俺をこの世界に送った神は何も言っていなかったけど、魔法世界の大战で、父さんと一緒に活躍していたらしい

俺は原作にはいなかった人間がいたから転生者だと分かった

見た目は禁書のフィアンマそのままで、魔の腕を使うと言っていたし、聖なる右も使えるのだろう

今は立派な魔法使いとして行動しているようだが、十中八九麻帆良には来ると思っている

さて、俺の目的は世界を救ってハーレムを作ってやることだ

今のうちにしっかり修行しておかなきゃな

〈SIDE フィアンマ〉

俺はハーレムを作る

とか、どっかの生徒会の副会長みたいなこと言ってる奴なら、仲良くなれそうだなあ。

そもそも仲良くする気もないけど

どちらにせよ、俺はもう一人の転生者と戦う

幻想殺しを持つてるなら、戦うしかないだろう

俺の基本方針は原作沿いだ

余計なこととしてイレギュラーが起きて、おかしなことになると、折角の原作知識が役立たずになる

だから、できるだけ原作メンバーには干渉したくない、が

それでも千雨はこっち側に引きずり込みたい

あのネット関連の力は役に立つだろうし。

何より、俺のネタの突っ込み役として頑張ってくれそうだ

戦力は別に必要ないからなあ

そもそも俺がいれば十分だし、必要とあれば『数を数えるといった基本的な概念が崩れている現象』でも起こせばいいわけだし、数には困らない

エヴァはこっち側に引きずり込みたいけど。

茶々丸の飯が食ってみたいし

チャチャゼロとは飲み仲間になったし

…エヴァ自身のいいところじゃねえな

まあ、貴重な情報と衝撃の杖を渡してくれたことを考慮して、呪い位なら解いてやるのかな

後は名シーンのスクナを倒すところをビデオに撮らせて貰おう

「よし、そうと決まれば麻帆良へ向かおう」

間違えた

「そうだ、麻帆良に行こう」

……やっぱり突っ込み役がほしいな

第十一話 新しい転生者、あと適当な話（後書き）

はい、というわけで新しい転生者の紹介とフィアンマのあの後の話でした

短いです、その上会話文がない

作者の力量不足です

ギャグを混ぜて行きたいと思っています

完全シリアスとかおもっ苦しい雰囲気書くの苦手なんです

意見がある方はどんどん書いちゃってください

参考にさせていただきますので

次回、転生者は出ません（たぶん）、そしてフィアンマが麻帆良に侵入します

では、また次回

第十二話 麻帆良へ侵入

第十二話 麻帆良へ侵入

どうも、俺です

麻帆良へ行こうと決めてから、俺の行動を監視していた元老院のクソジジイ共の部下を皆殺しにした
ついでに監視術式も完全に把握して逆算し、元をたどれるようになった

監視用の施設も完全に潰した

警告もしておいたから、

これであのクソジジイ共は俺に対して打つ手がないはずだ
いい気味だな

原作変わるから、今すぐ元老院全員を皆殺しつてわけにもいかない
からな

原作関係なければジジイ共は今頃地獄の底だろうに。

さて、そろそろ麻帆良へ行きますか

今は季節の変わり目

温かい風がだんだんと肌寒くなっている

要は秋から冬になりかけてるってこと

そんなことは俺にはあまり関係のないことだけど

さて、俺は今、麻帆良へ侵入しようとしている
ちなみに夜

俺は黒いローブを着て、フードまでかぶり、仮面（一護の完全虚
化の時の奴、がんばって作った）をかぶっている
ちなみに仮面には認識阻害（めっちゃ強力な奴）をかけている
傍から見たら完全に怪しい人だ

だが俺は気にしない
スネークの如く侵入しよう

マフユ ア…

間違えた、メタ ギアソリッドのように華麗に侵入しよう

段ボールを使って侵入するかな

大佐役がないのが残念だ

と、割と真剣に考え始めてから思った

…どうでもいいか、と

では、気を取り直して、いざ侵入だ！

そしてわざと結界に引っかかって侵入してますよ、とアピールする
一応この戦力確認が目的だしね

そして今、目の前には戦闘態勢となっている刹那と真名を見つけた
というが見つかった

他にもいるはずだが、まだ到着していないらしい

と、思考していたら

「何者だ!？」

と殺気バリバリで話しかけてきた

この程度の殺気なら別になんでもないんだけどね

「貴様に名乗る名などない！」

という反射的にネタに走った返答をして刀を取り出す

魔力で身体能力の底上げをして構える

つーことで、実力を確かめてみたいと思います

聖なる右を使わないのは、俺だとばれる可能性があるから

や、別にばれても問題は無いけど、気分的な問題で、実力を十全に

出せるかが問題だ

英雄って聞くだけで緊張して実力発揮できないことってあるからね

そんなことを考えていると、

「ふざけるな！」

と、飛びかかってきたが、遅いね、うん

軽くひらりと避けて刀を振るう

あ、ちゃんと対応できるくらいの速さで振ったよ

怪我させるのはまずいだろうし

キーン！キーン！と何度も刃を打ち合い、ときどき真名が足とか腕とか狙って撃ってくるけど、気にすることなく避ける

アイツ引き金を引く一瞬だけ殺気こめるから避けづらい

それとも、殺す気はないけど癖で引き金引くと殺気が込められるのかな

あんまり関係ないけど

刹那はまだ余裕で戦っている俺に対して、

「斬岩剣！！！」

と、神明流奥義を使ってくる

俺はそれをよけながら

「実力はこんなもんか？」

と言ったら、地雷に触れたらしく

「百列桜花斬！！！」

と本気で殺しにかかってきた

でも軽く避けてる俺

刹那って結構簡単に挑発に乗るよね

ちよつと距離をとつたら、背後から誰かが攻撃してきた
ひらりと避けて姿をみる

刀子さんか、確かに実力は刹那以上、だが甘い

「奇襲程度でどうにかなると思っっているのなら、それは大間違いだ」

「分かっていますよ、あなたは結構な手だれのようすし、
この程度で倒せるとは思っていません」

また背後から攻撃してきた、今度はガングロフィーニ（うる覚え）だ
「無駄だと言っているのに……」

振り向いた瞬間に二人に挟まれての攻撃を防ぐと、どこからか居合
拳が飛んできた

タカミチも甘いな、殺気が込められてるから、不可視の攻撃でも軌
道が読める

「なるほど、奇襲は囷か
だが、それでもまだ甘い」

俺はローブを伸ばして居合拳を防ぎ、二人を弾き飛ばす

二人は驚いた顔をしている

まあ、ただのローブだと思っうよな

そうこうしているとタカミチと脱げ女（高音）と佐倉も到着した
人数的には分が悪いけど、実質的な戦力じゃひっくり返るところか
全然追いついてない

「君は何者だい？」

流石に冷静だな、タカミチの奴
あいつにだけネタばらしするか

そう思つて周りの奴を適当にあしらつてタカミチと近距離で向き合つ

軽く面をずらして

(俺だよ、タカミチ。ずいぶんと老けたな)
と、念話で話しかける

「え…まさか、ファイア…」

(おっと、まだ正体はばらすな、つまらないからな)
そしてまた仮面をかぶる

(…何しに来たんですか?)

(ちょっとした余興さ、学園長になら話してもいいが、他の奴はだ
めだ)

ゆっくり話してるような感じだけど、実際はこれ全部戦闘しながら
だし、

他の奴から攻撃をされたり、攻撃したりしてるからね

(何か考えでもあるんですか?)

(いや、別にそういうのは無いけど。

まあそうだな、戦力確認、ということにしておこつ)

しておこつていうか、それが目的だけど

（そうですか：分かりました。
後でちゃんと話してくださいよ）

（わかってるよ。今回はちょっとしたサプライズだ
潔く引かせて貰うさ。

また今度来るがな）

俺はそれだけ言って縮地で結界の外へ出る

五百メートルほどだが、この位なら全然問題ない

さて、サプライズも終わったし、どうしようか

あ、そういえば今夜泊まるどこでしょう

…はしゃぎ過ぎて忘れてた

エヴァンどこにでも行って泊めてもらおう

〈SIDE タカミチ〉

僕は今、学園長室にいる

達、というのは、僕のほかにガンドルフィーニ先生や刀子先生、龍
宮君や桜咲君などの魔法先生や魔法生徒も居るからだ

学園長にあの後の報告をしている

「それで、逃がしてしまったのかの？」

この後頭部の長い人が麻帆良学園学園長だ

「はい、恥ずかしながら、我々全員で戦っても、あの男は余裕があ

るようでした」

ガンドルフィーニ先生が報告する

「それはそれは、なんとも面倒な敵じゃのう」
学園長はひげをなでながら言う

「それで、何かわかったかの？」

「何かしらの事を聞き出そうとしたのですが、大したことは分かりませんでした」

僕は苦笑しながら答える

「ふむ、また来る可能性もあるし、一応警備を強化しといたほうがいいかのう」

「そうですね、念のためにはしておいた方がいいでしょう。
今回は戦力確認のようですし」

「それは信用できるのかの？」

「おそらくは」

「……タカミチ君がそういうなら、そうなのかもしれないのう
しかし、戦力確認か、関西かのう？」

「かもしれません。」

「一応、対策は練っておいた方がよいかと」

「ふむ、面倒じゃのう。」

よし、対策を考えておく。

今日はもう遅いし、これで解散にしようかの」

学園長は時計を確認しながらそう言っている

全員が出て行ったのを確認して、学園長に話しかける

「学園長、今回の侵入者ですが…」

「む？まだ何かあったのかな？」

「まあ、そうですね。」

とりあえず、学園長以外には話すな、といわれていますので

「ほう、それで？」

「実は、今回の侵入者

紅き翼のフィアンマさんなんです」

「フォツ！？あの『魔神』と呼ばれている男の？」

「はい、そのフィアンマさんですね」

「それで、その『魔神』は今回、何をしに来たのかの？」

「なんでも、今回はサプライズ、だそうです。」

戦力確認というのも、『と、いうことしておく』と言っていましたし

「ふむ、とすると、彼は何が目的だったかわからないと？」

「ええ、あの人の考えることは昔から分かりませんでしたし、今回のことも、意味があったのか無かったのかさえ分かりません」

「難儀な人物じゃのう」

「まあ、仕方ありませんよ。

あの人はいつも人が考え付かないような行動をする人ですから」

「…危険はないようじゃし、ほっとけば会いに来るかのう」

「そうですね、また後日来る、と言っていましたから」

「その時にまた話をさせてもらおうとするかのう。

これで全部かの？」

「あ、それと、このことは学園長以外には話すな、と言われたので、其処はよろしくお願いします」

「それでは、失礼します」

「そういつて、部屋を出る」

「まったく、フィアンマさんも何を考えてるんだか」

「あの人の事は本当に何も分からない」

「使う魔法も、あの右腕も、考え方も、行動も、」

「何一つとして分からない」

「まあ、今度来た時に教えてもらおう」

〜SIDE フィアンマ〜

俺は今、エヴァのログハウスの中にいる

あの後直ぐに瞬間移動で麻帆良内に入り、エヴァの家を搜索した
原作の知識を頼りに搜索した結果、意外と直ぐ見つかった

そして起きてきた茶々丸に入れてもらった
ついでに自己紹介もした

いや、茶々丸はロボだし、寝てたかは分からないけど
そして、エヴァを起こしてもらった

そうしていると、エヴァが眠そうに眼をこすりながら二階から降り
てきた

「お前吸血鬼だろうに、なんでそんなに眠そうなの？」

「吸血鬼だからって、別に寝覚めがいいわけじゃない」

「そうか、悪いな、こんな夜遅くに」

「そう思っなら来るなよ。」

で、何の用だ？」
やっぱり不機嫌だな

当然か、こんな夜遅くに家に来てるわけだしな

その上、眠いのか、呪いの事やここに俺がいるということまで頭が
回っていないようだ

「ああ、俺今日泊るとこ無いんだわ。
だから泊めてくんない？」

「お前金ならえらくたくさん持ってたじゃないか」

「ちょっとした事に夢中になり過ぎて、ホテル取るのを忘れてたんだよ。」

で、折角麻帆良まで来たんだから、エヴァの家に泊めてもらおうと思っただよ」

「ずいぶんと間抜けな理由だな、ソファでよければ貸すが？」

「マジでか、正直追い出されんじやないかと、内心冷や汗だらだらだったんだよ」

俺は笑いながら言う

「そうかい、じゃあ、私は寝る」

眠そうに目をこすり、ふらふらとした足取りで二階へ上っていく

「茶々丸も悪かったな」

「いえ、私はガノノイドですから。

睡眠は別に必要ありませんし」

「そうか、でもまあありがとうな」

「いえ、それでは」

それだけ言っただ茶々丸も部屋へ戻っていった

時刻はすでに深夜二時を回っていた

正直、ネタをやるだけの元気もない

昼間とさっきの戦闘でテンションあげまくってたからかな

俺はソファに横になり、眠かったのでさっさと寝た

寝る直前に

(明日は日曜か、昼過ぎまで寝よう)
と心に決めて寝た

第十二話 麻帆良へ侵入（後書き）

はい、今回は麻帆良への侵入でした
正直メタルギアのネタがやりたいだけだったり

次回、まだ何も考えてませんが
とりあえず千雨に魔法をばらすエピソードを考えてます

ではまた次回

第十三話 居候兼二トト（前書き）

タイトルが思い浮かばない

フィアンマの服装は戦闘時以外は普通の私服です

第十三話 居候兼二一ト

第十三話 居候兼二一ト

くSIDE エヴァく

眠い

私は今、ひつじょくに眠い

今の時刻はさつき確認したらまだ九時だった

もう一度寝ようとまどろみながら思考する

全くあのバカめ、真夜中にいきなり押しかけてきて、泊めてくれな
ど。

あいつはいつも計画性がないからな

目の前の事が終わるまで次の事が見えていない

まったく、なぜ私がフィアンマ如きに夜中に起こされなくちゃなら
ないんだ

……フィアンマ？

私はそこまで思考して思った

何故フィアンマがここにきているのだ？

奴は言っていた

「ちょっとした事に夢中になり過ぎて、ホテル取るのを忘れてたんだよ」と

ちょっとした事ってなんだ？

しかも、

「折角麻帆良まで来たんだから、エヴァの家に泊めてもらおうと思つてな」と言っていた

ということは、あいつは私がここにいることを知っていたのか？

ナギの奴が話したのだろうか

……あ

ナギの事を思考して思い出した

あいつは呪いを解きに来たのではないか？

其処まで思考したら眠気が吹っ飛んだ

直ぐに起きて一階へ降り、ソファで寝ているフィアンマを見つける

ソファで気持ちよさそうに寝ている

なんだか無性にイラツと来たので、とりあえず茶々丸に台所からフライパンを持ってこさせ、

とりあえずフライパンをフィアンマの顔面に叩きつける

「あべしっ！！」

と言つてフィアンマは跳ね起きる

鼻血が出ているが私は気にしない

「さて、なんで貴様がここにいるのか教えてもらおうか」
そう言っつて、フィアンマをにらみつける

〈SIDE フィアンマ〉

俺は気持ちよく寝ていた

ソファの上だが、ふかふかで気持ち良かったからぐっすり寝れた

だが、それがいきなり破られた

顔をいきなり何かでたたかれたのだ

反射的に

「あべしっ!!」

と、ネタに走ってしまったが、ここは世紀末じゃない

鼻血が出ているのを抑えながらエヴァをみる

なぜかフライパンを持つてる

おそらくあれで叩いたのだろう

てか、聖人の体じゃなかったら鼻の骨折れてたんじゃないか？

叩いた本人は気にする様子もなく

「さて、なんで貴様がここにいるのか教えてもらおうか」
と言っつていた

「なんでっつて、それについては昨日…時間的には今日か…まあいい

や、夜中に来てから許可は取っただろう？
なんで今更言われなきゃならないんだ」
しかもフライパンで叩き起こすとか

そもそもなんで俺にこういう攻撃が効くんだ？
聖なる右が防ぐはずなのに

1、ギャグ補正　あり得るがちょっと置いとく
2、殺気がないから　あり得る、というかこっちがまだ現実味がある

つーかギャグ補正で最強の防御壁破られたらまずいだろ

殺気がないなら聖なる右で吹き飛ばすのもどうかと思うが。
あつたらまず俺が気付くし

「貴様は私の呪いを解く為に来たのか？」

「へ？呪い？何の？」
と、まずはとぼける

「十三年程前にサウザンドマスターが私にかけた呪いだ。知らなかったのか？」

原作まであと一年半くらいかあ

「それは知らん、俺がエヴァの居場所を知ったのは独自の情報網からだ」

原作知識という情報網からね

「そうか…アイツ、三年たったら呪いを解きに来てと言っていたんだがな。」

八年前に死んだという情報が入って絶望していたところだよ」

「そりゃ残念だったな。

だが、ナギは死んでないぞ？ ジャックのアーティファクトは生きてたし」

これは魔法世界で実際に確かめたことだ

「何！？ だが、確かに公式記録では八年前に死んだことに…」

「死亡偽装つっ一手があるだろ。

俺達は監視されてたからな、自由に動き回るには、死亡偽装が一番楽なんだ」

「監視だと？ お前も監視されているのか？」

「いや、俺を監視してた奴らはここ半年で皆殺しにした。

術式も把握してるからまた使えば直ぐ分るし、

他の方法で監視しようものなら次はメガロメセンブリアを更地にしたりするって元老院にメッセージを送つていた」

「……めちゃくちゃだな、おまえ。

それで良く指名手配されなかったな、ホントに」

エヴァが呆れている

監視されてたんだし、土地の一つや二つ更地にしてもいいだろうに

個人的にあいつらが嫌いつてもあるけどね

「元々公式には存在しない組織を使っていたみたいだからな。だが、証拠はばっちり残ってた。

元老院のクソジジイ共が監視を命令してやらせてたっていう証拠がな」

「それを使えば、失脚させることもできるんじゃないか？」

「無駄だな、証拠を提出したところで世の中に広まる前に握りつぶされるのがオチだ」

「そうか……話がずれている！私の呪いの事だったはずだ！」

「ずらしたのはお前だろ、俺はちゃんと返答していただろうが」
「一般的にこういうことを逆切れというんだ」

「いいから答えろ、私の呪いは解けるのか？」
顔を近づけてくる

「解けんじゃね？」

「なぜ疑問形なんだ！！」
更に顔を近づけてくる

「だって面倒だしさ」
呪い自体は解いたことあるけど、ナギのアレはバカみたいに魔力こめてやがるからな

「面倒だし、じゃない！解けるのなら今すぐ解け！！」
もはや、顔が目の前にある

「落ち着け、キティ。
顔が近い、少しは離れろ」

「その名で呼ぶな!!」
そう言っつてちよつと離れる

「あとでちゃんと解いてやる。
だから我慢しろ」
そう言っつて頭をなでる

「む、そうか、ならいい。
絶対に忘れるなよ!!」
顔を赤くしながらまた二階へ上つて行った

……また寝る気なのか? あいつ

その後、鼻血を魔術で適当に直し、町へ行った
学園都市というだけあつて、いろんなものがある

原作を見てても思ったが、禁書程ではないにせよ、ここも十分異常
な技術力があるよね
超がいるからつていうのもあるんだろうけど

適当に街をぶらついていると、腹が減つたのでファーストフード店
でハンバーガーを買い
公園のベンチで食べた

朝飯は結局食べてないからな。うん、これうまいと、適当なことを考えていると、どこかから声がした

「おい、何とか言えよ、ぶつかってきたんだからさあ。誤るとかねえのかよ？」

その方向を見ると、女の子が三人の不良に絡まれていた

目障りだから片付けるか

そう思っただけ歩き出す

「はい、其処まで」

「ああ？なんだあ兄ちゃん、正義の味方気取りかあ？」

「目障りだ、消えろ」

そう言っただけ投げて気絶させる

「はあ？何すんだこの野郎！」

残った二人が殴りかかってくるが軽く避けてまた投げ飛ばし、気絶させる

「大丈夫か？」

そう言っただけ女の子の方を見る

「あ、はい。」

ありがとうございます

ワオ、原作キャラの千雨ちゃんだった

あれ、何してんのこの子？

不良に絡まれるような失敗する子だったかな？

「あの、名前は…」

「ん？ああ、俺はフィアンマって言うんだ」

「本当にありがとうございました」
それだけ言ってどっかに言った

そのあと、また適当に歩き回り
エヴァの家に戻った

次の日

エヴァが学校にいった
俺は暇なので寝る

ニートのような生活だが、金はあるので問題ない
放課後になったらぬらりひよんのところへ行こうかね

そして今、一人の女子中学生から不審者扱いされている

「あんだ、本当に不審者じゃないの？」
赤い髪をツインテールにしたオッドアイの女の子
簡単にいえばアスナちゃん

感情豊かになっ たなあ

「本当だって、学園長に用があるんだけど」

「学園長に？」

昔の記憶がないから、俺に懐いてた頃が懐かしいな

「そう、学園長さんに」

「……あれ、フィアンマさん？」

丁度よく千雨ちゃんが通る

「ん？昨日の子、ここの中学校に通ってたの？」

「ええ、まあ。後、あたしは長谷川千雨です。

何しに来てるんですか？」

「あれ、千雨ちゃん知り合い？」

「まあな、悪い人じゃないから大丈夫だ」

「そう？じゃあ、あたし帰るから、じゃあね！」

そついうとアスナちゃんは走って行った

「で、何しに来てるんですか？」

「用があるのは学園長さんだけど、学園長室を知らないからエヴァを待ってるところなんだよ」

「ふーん、あたしが案内しましょうか？」

「いいの？正直待つのがめんどかったからさ、ありがたい」

「いや、この間のお礼ですよ」

「後、敬語はいらないよ。」

「フツーに話してくれていい」

「そうか？じゃあ、こっちだ」

「とまあ案内してもらっている間、適当に世間話をした

「ここの生徒っておかしいんだよな。」

みんな『麻帆良だから』で納得するんだもん」

「ふうん、常識に疎いのかねえ」

「学園結界があると魔法使いも魔法を使うことに少しずつためらいが無くなっていくだろうからなあ」

「かもな、おかげでこっちがおかしいなんて思われたこともあるし」

「そりゃ大変だったな、愚痴ならいつでも聞いてやるよ。」

「俺はエヴァの家に居候してるし、いつでも連絡してくれ」

「……居候？」

「まあね、エヴァとは昔からの知り合いで、俺はこっちに来てからまだ日が浅いんだよ」

「だからまだ住むところも決まってないしってことで居候してる」

「へえ、そうなんだ。」

「じゃあ今度お邪魔させて貰おうかな」

「じゃあ、携帯の番号教えとこう」
と言って、携帯の番号やメールアドレスを交換する

そして学園長室前について

「ありがとう、千雨ちゃん。

助かったよ」

「いや、気にしなくていいよ。

それじゃ、また」

と言って帰る

俺は学園長室にノックしてドアを開ける

「失礼しま〜……………」

中に学園長めだりひびょうんが居る事を確認した後、ドアを閉めた

直ぐにロープを取り出し、着てから瞬間移動で中へ入る

「フオツ!? ちょよ、ちょっと待つんじゃ!」

ドアを閉めたのを見て、慌てて立ち上がるうとした学園長を後ろから止める

「…いつの間に後ろに回ったのかの?」

「瞬間移動だ、とりあえずタカミチ呼んでくれる?」

そう言って学園長の前へ回り、来客用のソファに座る

ちなみに今の行動に意味は無い。

遊びたかっただけ

タカミチは直ぐに来た
大方念話でも使って呼んだんだろう

「フィアンマさん、お久しぶりです」

「おう、ってか一昨日も会っただろ」

「挨拶なんてできる状況じゃなかったじゃないですか」
タカミチは苦笑している

まあ、戦闘中にあいさつする奴はいないだろう

「それはいい、とりあえず今日は麻帆良に留まることにしたっつー
ことを報告に来た」

「ふむ、警備員として雇ってくれ、ということかのかの？」

「いや、金はあるし、雇ってくれなくてもいい。
報告に来ただけだし

一昨日来た時も誰にも怪我させて無かっただろ」

「それはそうじゃが…」

「別に働かないってわけじゃない、連絡してくれりゃ動いてやるよ。
金は取るけどな」

「そうか、一応戦力としては数えて良いかのう」

「動くときは一昨日の格好だぞ」

「マジですか？」

タカミチが呆れながら聞く

「どつという恰好じゃ？」

「こつという恰好」

フードをかぶり、仮面をしている

「めちゃくちゃ怪しいのう」

「いいだろ、別に」

ローブと仮面を直しながら言う

「それと、一昨日戦って思ったけど、ここの魔法先生や魔法生徒って其処まで強くないよな」

「あなたの基準で見られても困るんですが……」

「いやいや、人生何が起こるか分からないもんだぜ。

完全に人手不足だな」

「分かっておるなら戦力に数えさせてほしいんじゃが……」

「俺は、出るだけで相手の人数に関係なく勝ったようなもんだぜ。

他の魔法先生や魔法生徒を出さないなら夜の警備に出ててやるよ」

「君一人で大丈夫かの？」

「舐めるなよ、その気になれば星ひとつ破壊することだってできるんだ」

その言葉に学園長は冷や汗を流す

「わ、分かった。」

君に連絡するときはそうする」

「そうか、じゃあな」

「ちょっとまつんじゃ、お前さん、どこに住むつもりかの？」

「ああ、俺はエヴァの家にいるから、それと、お前ら以外の奴にこのことは話さないこと。
いいな？」

「ああ、構わんが。何故じゃ？」

「英雄だなんだって言われるのが嫌なだけさ」
それだけ言つとローブを取り出し、着てから、瞬間移動でエヴァの家まで行く

さて、千雨ちゃんはどうかやってこつち側に引きずり込もうか
突っ込み役が早くほしいなあ

エヴァは弄られキャラだしな

とりあえず、帰ってから考えることにしよう

第十三話 居候兼二トト（後書き）

はい、千雨と接触しました

性格がちよつと変わっている気もしますが、気にしないで頂けると
ありがたいです

次回こそは千雨に魔法をばらす…と、思います
では、また次回

第十四話 魔法がバレる、というかバラす（前書き）

感想は常時募集中です

どンドン書いてください

第十四話 魔法がバレる、というかバラす

第十四話 魔法がバレる、というかバラす

どもー、俺ですー

俺は相変わらずニートのような生活をしている
パソコンを購入してゲームや動画を楽しんだりね

偶に外に出て適当にぶらつくつと、必ずと言っていいほどの確率で広域指導員に捕まる

あれかな、肉体年齢が若いからかな

「君、学校は？」
つて必ず聞かれるもん

はっきり言えばうざい

実際の年齢つてもう俺三十超えてんのもよ
この世界に来たのが十六、七くらいで、もう二十年近く経ってるわけだしね

精神は肉体に引っ張られるとはよく言ったもんだ

正にその通りだよ、俺の精神年齢は正に高校生くらいだ

そんなわけで、家主（エヴァ）に家賃は払ってるが、実質ニートのような生活をしていた

『別荘』で修行とかでもいいけど、一時間が一週間になるってかな

り面倒だ

時間の感覚ずれるからね

エヴァのは使わせて貰えない

エヴァ曰く「お前に貸すと魔改造されそう」とのこと

俺ってそんなイメージついてたんだ、と思う

反省はしないけど

そんな感じで日常を過ごしている

休日になり、千雨ちゃんが遊びに来たいということだ、

エヴァを連れてカフェにいる

ちなみに茶々丸はいない

何か用事があるらしい

ホントに遊びに来るとは思わなかったけど、俺にとってはいいチャンス

こっち側に引きずり込もうと、いろいろ考えてる

俺は今巨大なパフェを食べている

「ホントにあたしもパフェ頼んでいいのか？」

「遠慮はしないでいいぞ長谷川、こいつ何故か金はやたらと持っているからな」

実際そうだが、お前が言うなよ

「そうか？じゃあ…
すいませーん、これ下さい！」

と、頼んでいる横で、

「一つ聞くが、まさかお前こつこつということが目的での学園に来たんじやないだろうな」

エヴァが隣から小声で話しかける

俺が女子中学生と友達になるために麻帆良^{マホウ}に来ているか？だと

「まさか、俺の目的は別の事だ。

…まだかなり先の事だけだ」

実際の目的はネギの弟である転生者だ
あいつとの殺し合いを俺は望んでいる

殺した後の事後処理も考えないといけないしなあ
早めに考えなくちゃ

と、大分物騒な方に思考が傾きかけた時

「そういえば、長谷川はなんでフィアンの携帯の番号を知っていたんだ？」

「なんでって、それはこの間交換したからで…」

「だから、なんで交換するような間柄になったんだ？」

「それは…」

面倒なので説明をスキップ

…と、言つわけだ」

「不良に絡まれたところを助けてもらったって、どこのギャルゲイだよ」

とエヴァは言っているが

「しょうがないだろ、ちょっとよそ見してたらぶつかっちゃったんだ」

と千雨は反論する

「フィアンマがそういうことするのは珍しいんだがな」

「あいつらが目障りだったんだよ
うるさかったしな」

パフェを食べながら言う

これは甘くてうまい、いい店を見つけたな

「ふーん…」

と駄弁っていると

Trrrrr、とエヴァの携帯が鳴りだした

エヴァは外に出て会話している

少しして戻ってくると、

「おい、フィアンマ、ジジイが呼んでるからちょっと行ってくる」

そう言つてエヴァは学園長シツインのところへ行った

ちよつと沈黙があつて

「そついえば、ここの生徒はおかしいつて言つてたよね？」
千雨ちゃんに話を振る

「ああ、『麻帆良だから』で済ませられるようなことじゃないのに、
それですませるんだ」

エヴァも居ないし、丁度いいかな

認識障害の術式を展開させ、更に一定距離まで近づかないと音を遮
断する術式を重ね掛けする

「原因を知りたい？」

「…知つてるのか？」

聞きたそつに顔を近づける

「魔法さ」

千雨ちゃんはキョトンとしている

「魔法？そんな非現実的な事があるわけないだろ！」

ちよつと声を荒げて反論する

千雨ちゃんはしまった、という顔をして周りを見るが、誰一人とし
てこつちを見てはいない

「おかしい、か？」

俺は言う

「普通なら、ここで『何だ?』とこっちを見ようとする野次馬が居てもおかしくない。

だが、こっちを見るとどこか会話が聞こえていない様にふるまっている

この状況は明らかにおかしい。

だが、『魔法』はそれを可能にしているんだよ

ここにいる人間の誰にも、さっきの会話は聞こえていない」

千雨ちゃんはジッとこっちを見ている

「…そんなはずないだろ、なんかの間違いだ」

「いいや、間違いじゃないよ。

ご要望とあらば、他の魔法を使ってあげるけど?」

「……本当に魔法なんて非現実的なものがあるのか?」

千雨ちゃんはちょっと頭を抱えて考えている

「ああ、本当だよ。さて、説明しようか

君の違和感というのは、この学園に張られている学園結界のせいだ」
パフェを食べながら話す

「学園結界?そんなもんがあるのか?」

「あるよ。

こいつは強力な認識阻害の結界でね、千雨ちゃんと他人との常識の違いの原因でもある」

「?どういうことだ?」

まあ、直ぐ理解しろって言われても無理だよな

「要は、この結界が有るから、千雨ちゃんの常識と他人との常識にズレが生じているのさ」

このパフェちよつとでか過ぎ、まだ食べ終わらねえ

「…じゃあ、アレか？」

この学園に居る限り、あたしは周りとは常識がずれているという事か？」

「そうだよ。」

千雨ちゃんの場合は体質だろうし、そんな所そこの魔法使いにはどうしようもない

そんな君に二つの選択肢をあげよう

一つ目、魔法の事をすべて忘れて今まで通り暮らす

この場合、俺が君の体質を何とかしよう」

体質の問題だけど、俺の魔術は精神いじくることも可能だし、何とかなるだろ

「二つ目、全てを知った上で魔法側こっちに関わる

この場合も、俺が魔法を教えてアフターケアまでしよう

質問はある？」

「ここには、あんた以外にも魔法使いは居るのか？」

「ああ、いるよ

それも結構な数が居る」

マジかよ…、とまた頭を抱えてる

「だけど、記憶を消して普通の生活に戻って、あたしに身の危険は無いのか？」

やっぱり其処は気になるよね

「ケースバイケースだな、ただ、千雨ちゃんは認識障害や人払いの魔法が効かないから、巻き込まれる可能性は必然的に上がる
まあ、それは俺が何とかするけど、結局巻き込まれたらどうしようもない」

「……なら、たどる道は一つだろ。」

二つ目を選ぶ

あたしに身を守るための魔法を教えてください」

「後悔はしないかい？」

「全てを忘れて普通の生活に戻っても危険があるなら、全てを知った上で危険に備えるべきだろ」

うん、ちゃんと考えてくれたようで、俺はうれしい

無理やりこっちに引きずり込んでもしようがないしね

「そうか、じゃあ俺が君に魔法を教えよう」

実際に教えるのは魔術のほうだけど

そしてパフェを食べ終わってカフェから出る
もう四時か

「それで、いつから教えようか？」

「あたしは帰宅部だし、学校終わったら行ってもいいけど」

「そうだな、よし、じゃあ放課後、エヴァの家に来てくれ

其処で魔法を教えよう」

「え？エヴァンジェリンは一般人だろ、なら其処はだめじゃ……」

「あ、忘れてたけど、エヴァも魔法使いだよ」

また千雨ちゃんが「マジか……」と呟いている
今日は驚いてばかりだな

さて、俺は考える事が増えた

千雨ちゃんにどんな魔法を教えるか

ネギの弟を殺した後の事後処理

…一つが二つに増えただけか、たいした問題じゃないな

そして夜

晩飯を食べた後、テレビを見ながらエヴァが聞く

「そういえば、私がジジイのところに行った後、何を話したんだ？」

それに対してだるそうに答える

「ん〜？ああ、魔法の事をばらした」

「……は？ばらしたのか？何で、其処まであいつが気にいったのか

「？」
「すげえ形相で迫ってくる」

「いや、あの子認識阻害が効かないんだよ
で、不憫だから俺が教えてあげて、選ばせた」

「で、どうだったんだ？」

「魔法を学ぶってさ、知らないまま危険にさらされるより、知って
危険に対処するらしい」

「ほう、で、お前が魔法を教えるのか？」

「まあな、だが、魔法ではなく魔術を教えるつもりだ」

「何？魔術をか？だが、昔教えるのは難しいって言ってたじゃない
か」

「大丈夫だ、方法は幾らかあるし」

「へえ、私も見物させて貰うとしよう」
「見物するのかよ」

さて、どんな魔術を教えようかな
てかこの世界の奴に魔術は…使えるだろうな

この世界にも魔術はあるし、知識や技能も問題ない
アレイスター関連でかなり調べ上げたからな

さて……突っ込みゲットだぜ!!

第十四話 魔法がバレる、というかバラす（後書き）

はい、千雨に魔法がバレた、というかばらしました

毎回即興で考えてるのでおかしなところがあれば教えてください

次回、夜間警備に駆り出されたりします（たぶん）

では、また次回

第十五話 教えるのって意外と難儀

第十五話 教えるのって意外と難儀

「でも、俺です」

「今俺は俺の別荘の中に居る」

「千雨ちゃんとエヴァもね」

「別荘に関しての事はすでに教えてある」

「そして修行中はエヴァは黙ってるように念を押ししておいた」

「それでは授業開始と行きますか」

「で、実際にはどんな魔法を覚えてくれるんだ？」

「千雨ちゃん、やっぱり気になるみたいだね」

「俺が教えるのは魔法じゃなくて魔術だ」

「魔術？魔法と何が違うんだ？」

「明確に違いを言え、と言われれば、まず最初に定義の違いかな」

「定義？どう違うんだ？」

「まず魔法。魔法は誰でも使えるわけじゃない。」

それこそ生まれつき詠唱ができないとか、魔力が足りなくて一部の魔法が使えなかったりする。要は『才能がいる技術』だ」

「本来の魔術ってのは、『才能の必要無い技術』だ。詠唱ができないなら術式で補えばいい、魔力が足りなくても使える技術もある。

『偶発的に起きる奇跡的な現象を必然的に起こす事』ってのが魔術だ」

「…で、あたしは才能がないから魔術を習うのか？
アレ？何か怒ってる？

「そういうことじゃない。
法則を使う＝学問でもあり、しっかりルールを守らないと使用する事ができない。

逆に言うと正規の手順を踏めば素人でも使える
だから、才能云々で悩むよりさっさと魔術を覚えようってわけだ。
まあ、どっちを習うにしても時間はかかるわけだし
そもそも俺は魔法はあまり得意じゃないから教えにくいってだけなんだけど」

「最後本音混じってたよなあー！」

「其処は流してくれ。んで、
誰でも使える割に一般に普及していないのは、社会への影響等を考
えてのことではなく、

単純に敵対する魔術師に対し情報を秘匿する必要があるからだ。つ
まり軍事機密のようなものでね。

まあ、今は敵対する魔術師自体が少なくなってるけど

どうせならポピュラーなのよりレアなのがいいだろ？」

「いや、その辺は割とどうでもいいが…

最初に言った『本来の魔術』ってどういうことだよ」

「ああ、さつきも言ったが、魔術は才能無き者のための技術だ。

だが、俺が使ってる魔術はちよいと厄介でね

この霊装から知識を取り出し、使用するわけだが

この知識には毒がある。それこそ一人簡単に廃人にするような毒がな」

「それをあたしに教えるつもりか？
危なくないか？」

「大丈夫だよ、直に千雨ちゃんに知識を流すわけじゃないし。

俺というフィルターを通して学ぶから。俺は毒が効かない特殊な人間だからね。

まあ、魔術の基本的な事に関する本は世界中探せば有ったし、まずはそっち読んでもらうから」

「ふーん、分かった」

「じゃあ、まずは理論的な事からだ」

俺はどさつと本を置く

千雨ちゃんは軽く顔が引きつっている

「……これ…全部か？」

広辞苑レベルの厚さの本が十冊ほど

これでも最低限に絞ったんだが

「ああ、全部だ。時間はあるからな
それと、この指輪を付けて置くように
これ付けとけば別荘内でも年取らないから」

「…分かった、読めばいいんだろ…」
溜息でも付きそうな感じだった

「体を動かしたいと思ったら、魔力を使つての練習でもするから。
普通に体動かすよりいいと思うよ
ついでに修行できるしね」

「つまりは理論を覚える事と理論を使つた応用を並行で進めるって
ことか」

「正解、頭に入れても使えなきゃ意味がないからね。
逃げに徹するなら身体能力を上げる技術を向上させるとして損は無
あくまで身を守るためだし
身体能力を上げるだけでもいい気がするけど

でもまあ、魔術を教えといて損は無いかな
戦闘しないと限らないわけだし

千雨ちゃんは建物の中に本を持って入って行った

「お前は長谷川にどんな魔術を教えるつもりなんだ？」

「そおだなあ……」『一本足の家の人食いばあさん』でも…いや、あ

れはちよつと面倒だしな

ルーン魔術でもいいけど、どうせだし『黄金練成（アルスⅡマグナ）

』でも教えようかな

いや、あれは錬金術の類だったか

だが何にせよ、時間がかかり過ぎるなあ」

「…何だ、その変な名前の魔術は」

「後で教えてやるよ。」

とりあえずは千雨ちゃんに理論を覚えさせてからだ」

「私にも魔術は使えるのか？」

「使えるけど

え、使いたいの？」

「使ってみたくはあるな

お前が使っているんだ、興味はある」

「ふーん、時間があつたら教えてやるよ」

「それと、長谷川とは仮契約しないのか？」

「…するつもりはない、かな

頭の中からすっかり消えてたけど」

「…貴様らしいな」

「後で教えておくとするよ」

俺はそれだけ言って、千雨ちゃんに教える魔術の模索を始めた

結局仮契約の事は直ぐに頭の中から消え去った

そんなこんなで一時間（外の時間で）で別荘から出た

次の日

俺はアルを探しに行った

いろいろ考えててすっかり忘れてたけどね

図書館島の地下を探知して探す

反応が在ったあたりに瞬間移動すると

ドラゴンが居た

ワイバーンだよね

潰すのは簡単だけど、どうしようか

『^{セイント}聖ジョージの聖域』からの『^{ドラゴン}竜王の吐息^{ブレス}』を使ってみようか

こいつが伝説級の力を持つてるとは思えないけど、

伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同意の『竜王の吐息』に耐えられるかな

……やめとこう、へたすりゃ図書館島が吹き飛ぶ

と、いうわけで

ドラゴンを聖なる右で一撃で黙らせた後、アルと会った

だが、あのロリコンとの会話は不毛なだけなので割愛させていただく

いつも通りの日常を過ごし、いつも通り修行に明け暮れる日々

時間があるから

という事でゆっくり学ばせたところ

別荘内で三年くらいで大体終わった

別荘の外の時間ではざっと二ヶ月半くらい

一日一時間を一週間にしたからね

週末はまだ時間がとれたし

別荘内

俺が用意した特殊な神殿内にて

「そんなわけで、千雨ちゃんに本格的な魔術を教えようと思う
もう魔力のコントロールとか、ほとんど基礎は出来上がってるし」

「本格的な魔術つて、何を教えてくれるんだ？」
結構興味津津だね

「『黄金練成（アルス＝マグナ）』つて言う魔術の劣化版
正確には『黄金練成（アルス＝マグナ）』は錬金術の類なんだけど
ね。

これは世界の全てを呪文と化し、それを詠唱完了することで行使可
能となる錬金術の到達点で、
神や悪魔を含む『世界の全て』を己の手足として使役する事ができ
る。

世界の完全なるシミュレーションを頭の中に構築することで、
逆に頭の中で思い描いたものを現実に引っ張り出す魔術。

だがまあ俺がやるのは『擬似・黄金練成』とでも呼んでくれ

『黄金練成』と『言霊』を組み合わせたもので、言葉の通りに現実
を歪められる魔術だ

流石に世界の全てとかやってると半端じゃないくらいめんどくさく
なったから、

少しばかり削らせてもらった

唱えきるには数十年単位の時間が必要だが、今回は魔力を満たした
特殊な神殿と術式を用意して、俺が二十人ばかり用意して詠唱する
これで唱えれば一日かからないくらいでできる

既に成功してるからな」

「…説明が長い

後、成功したって誰が実験台になったんだ？」

「要は『黄金練成』は頭の中で、『擬似・黄金練成』は言葉で現実

を歪めるんだ

実験台は俺だよ。

ぶっつけ本番でやるわけがないだろ
大事な弟子なんだし」

「ってことは、あんたはもうその魔術が使えるのか？」

「まあね、こつやるんだ『銃』」

そついうと手のひらにハンドガンが現れた

「ある程度は融通がきくから、銃って言ってもマシンガンとかシヨ
ットガンとかいろいろあるからね」

「へえ、すごいな」

「じゃ、早速詠唱を始めよう」

それだけ言って準備をして、詠唱を始めた

さて、詠唱が終われば千雨ちゃんも晴れて魔術師か

第十五話 教えるのって意外と難儀（後書き）

はい、千雨が魔術師になりました

どんな魔術を使えるようになるか結構悩みました

次回、ついに刹那たちに正体がばれる、と思います

感想は常時募集中です

では、また次回

第十六話 実戦経験は大事

第十六話 実戦経験は大事

どーも、俺です

詠唱が終わったなら千雨ちゃんが

「疲れたー！」

つてばったり倒れちゃったので寝せてる

俺はネギの弟をどうするか考えてる

戦闘して、俺が負ける事はまずない

聖なる右を使ってる上にホルスの領域まで踏み込んだんだ

まともな戦闘で負ける事は無い

殺した後、行方不明って事で済ませてやるうかとも思っが、ばれる

と面倒だから周りの記憶から消してやるうと思う

どうやるかはまだ秘密だ

術式も準備しないとな

「終わったのか？」

エヴァが来た

相当暇してたんだろっな

「おかしな魔術を作ったものだな、お前も。

『擬似・黄金練成』だったか

あんなでたらめな魔術、使えるだけで其処ら辺の奴よりよほど強いんじゃないか？」

「まあな、レベルで言えば相当上位のはずだ」

「で、結局、仮契約の事は話したのか？」

「……………」

「やっべー、記憶のあなたに飛んで行ってた」

「忘れてたんだな」

「ああ、すっかり忘れてた」

「だが、あれが使える以上もついらないんじゃないか？」

「そうだろうな、其処らの奴にはもう負けんだろう」

「ところで、どうだ、私と仮契約してみないか？」

「理由は？」

「お前が気に入ってるんだ、私の従者になれ」

「残念、俺は誰かの従者になる気は無い」

「お前が従者になるのなら仮契約してもいいが？」

「ならいい、お前の従者などまっぴらごめんだ」

「それより、いつになったら呪いを解くんだ？」

「そうかい、呪いはお前が二年にでもなったらな
なんかの節目がいいだろ」

十数年も待つてたんだし、それくらい待てるだろ？」

「本当だな、絶対だぞ」

「ああ、分かってるって」

そんな事を話してる内に千雨ちゃんが起きてきた

「…詠唱は終わったけど、あれで成功なのか？」

千雨ちゃんは眠そうに眼をこすっている

「疑問に思うなら使ってみな。」

魔力をちゃんと使えれば大概の事は出来るから」

「分かった、『銃』」

そういうと、手にモシン・ナガンが…

何でモシン・ナガンが出てくるの？

「へえ、すごいなコレ」

そりゃまあ錬金術の最高到達点の劣化版だし

すごいのは当たり前だと思っけど

「消すときはまた同じように『消える』って言えばいいよ」

「ふーん、『消える』」

そういうと手にあった銃が消えた

「これからはそれを使いこなせるようにする訓練だ」

「分かった、とりあえず今日は帰る。もうそろそろ時間だろ」

「ああ、じゃあ今日はここまで。帰ろうか」

そう言っ外へ出た

それからある程度使いこなせるようになった頃を見計らって

「よし、それじゃそろそろ実践訓練とでも行こうか」

「実践訓練？何するんだ？」

「別荘の外で鬼と戦ってもらおう」

「は？鬼？そんなものまでいるのか？」

「吸血鬼が居るんだ、鬼が居ても不思議じゃないだろう」

「…そりゃそうだ。だけど、危険はないのか？」

「安心してくれ、俺がちゃんと見張っておくから」

「ならいいや、あんたの強さはあるくないからな」

最近千雨ちゃんにまでチート無限のバグキャラといわれるようになった

大分自重はしてるんだけどなあ

そんなわけで

「丁度よくジジイから連絡があった、今からでも手伝ってほしいと
のことだ」

「今からかよ、もう十二時過ぎてるぞ」

不機嫌極まりない声だったが、俺だってこの時間に起こされてるのだ

まあ、明日は日曜だし、大丈夫だろう

「しょうがないだろう

これを逃せば次に来るのは何日後か分からないのだし」

「…ハア、しょうがない。

直ぐに準備して行くから」

「ああ、後、世界樹広場前は通るなよ
面倒な事になるから」

それだけ言っただけで電話を切った

〈SIDE 刹那〉

まずい

私は今、とてもまずい状況にある

鬼の数が異常で、学園長からいったん引き揚げるように言われた

今までも何度か引き上げるように言われた事がある

その時に何故かと疑問に思っている

「ちょっとしたプロを雇ったの

他の人が居るとやりずらいとのことだから、こうして一旦全員引き揚げさせておるのじゃ」

と、説明された

他の先生たちは仕事が楽になったと言っている人もいれば、

信用できるか怪しいと言っている先生達も居た

私個人としてはお嬢様を守ればそれで良いのだが

それはともかく、今回も引き上げるように言われて引き上げようとしていたところ

何らかの呪符によって気配を察知できなかった鬼が多数居て戦闘になった

ペアの龍宮に連絡する暇もない
数が多すぎる

気も尽きかけ、本気でまずいと思い始めたころ

「おい、これはどういふことだ。

いくらなんでも多すぎやしないか？」
と、声が聞こえた

例の学園長が雇ったプロだろうか
そう思っって振りかえる

其処に居たのは同じクラスの長谷川さんだった

彼女は関係者ではないはず
そう思っって一瞬隙を見せてしまった

「ガハッ！」
鬼の一撃を何とか防いだものの、体がうまく動かない

長谷川さんは今のでこちらに気付いたようで、
「…桜咲？あれ？お前も魔法使いだっただの？」
と言っっている

私は何とか声を振り絞っって話す
「…逃げて……ください、…ここは、危険です」
そういうが

「分かってるさ、あたしだっって好きでここに居る訳じゃない」
そう言っって鬼のほうを向く

「なんや、今度は嬢ちゃんが相手かい？」

「そっだ、っつか鬼っって関西弁を話すのか？」

「その辺はまあいろいろやな」

「ふーん、ま、ある程度ダメージ与えれば還るんだろ？」

「そつやな、契約で来ているに過ぎんからの」

「それだけ分かれれば十分だ」銃

そついうと長谷川さんの手にハンドガンのようなものが現れた

「『弾丸は魔弾、効力は鬼を一撃で還す、および絶対命中、弾数は魔力が続く限り』」

何か詠唱のようなものを唱えている

その銃を鬼に向ける

「じゃあな」

それだけ言つて鬼に銃を撃つ

当たった鬼が還っていく

信じられなかった

唯一一般人だと思っていたクラスメイトが、ここまで強いなんて

全部片付けたあと、

「これで全部かな、『消える』」

そついうと手に持っていた銃が消えた

こちらを向いて歩いてくる長谷川さんの後ろに鬼が居た

おそらくさっきの鬼と同じように呪符で気配を隠していたのだろう

「危ない!!」

私は叫ぶが、同時に間に合わない、と思った

長谷川さんは後ろを振り向いた

既にこん棒は振りおろされている、当たる寸前だった

其処で鬼が吹き飛ばされた

「危ない危ない、危うく怪我させるところだった

っ！か、一応戦場だけ、気を抜くのは感心しないな」

そう言っ出てきたのは黒いローブを着た、いつかの侵入者だった

「んなのんきに言ってんじゃねえよ、ビビったぞ!!」

長谷川さんはグーでローブの男を殴っていた

「イタツ、ちょ、ごめんってば」

…何だか私が忘れられているような感じだった

長谷川さんと親しげに話しているあたり、悪い人ではないのだろう

「あの〜」

ローブの人はこちらを向く

「…何でいるわけ？」

長谷川さんに聞いていた

「あたしが知るか。」

ここに来た時鬼に襲われてたんだよ」

「ふ〜ん、後でジジイにいつとかねえとな

さて、嬢ちゃん、鬼はすでに全部還した。もう帰っても大丈夫だぜでもその前に怪我を治してからな」

ローブの男はそう言って近づき、

「『治れ』」

それだけ言うと怪我が徐々に治っていった

「…あの、あなたは侵入者ではないのですか？」

「ん？…ああ、一回侵入した事はあるな。

だがまあ、お前が思ってるような事は考えてないよ

俺はこの戦力を確認したうえで学園長に雇われてんだし」

「あの時の戦闘は戦力確認だったのですか？」

「そういうことだな、何か他に質問は？」

「あなたの名前を教えてくださいませんか？」

私の名前は桜咲刹那です」

「俺の名前はノイ……」

「テイツ！！」

長谷川さんに回し蹴りを入れられていた

「痛っ！ひどくねえ？」

膝を蹴られて飛び跳ねている

「ネタに走んな、走るくらいなら名乗るな」

「分かったよ、名乗らない」

「どんだけネタに走りたんだよ…」
うんざりしたような声を出す

「刹那ちゃん、千雨ちゃんの事は誰にも話さないでくれるかな？
あまり魔法先生とかと関わらせたくないからさ」

「ええ、分かりました。…結局、名前は教えてもらえるんですか？」

「感謝する、だが返事はノーだ。縁があればまた会えるさ」

結局名前も教えてもらえずにどこかへ消えた

ローブが伸びて長谷川さんごと自分を包むといきなり消えたのだ

とにかく私は一旦戻り、学園長に報告する

学園長は冷や汗を流していたが、なぜだろうか

〈SIDE ファインマ〉

一昨日の夜、千雨ちゃんを寮に送った後、家に帰って寝た
自分家みたいに扱ってるけど、実際は居候なんだよね

昼になって思い出した、ジジイに報酬を要求しに行かなきゃな、と
携帯で連絡してもいいけど、都合が悪くなると切るからな、あのジ
ジイ

そんなわけで学園長室前なう

ノックをして返事を聞く前に入る
中には刹那ちゃんが居た

「あれ、お邪魔だったかな？つーか授業中じゃないのか？」

「今は昼休みじゃよ、それで、なんの用じゃ？」

「いや、人が居るなら後で構わない
出直してくる」

「まあ、いいじゃろ。」

会ったんじゃし、彼女に位正体あかしても」

「え、どういう事ですか？学園長」

「…ジジイ、余程その後頭部を切り落とされたいようだな」

「フオツ！？ま、待つんじゃ、会ったんならばらしても…」

「俺の格好を忘れたか？声はともかく、顔はばれて無かったんだよ」

「……あっ！！」

忘れてやがったなこの野郎

「…えっと、昨日の人ですか？」

刹那ちゃんが恐る恐る聞いてくる

しょうがない、ばらすしかないなあ

「そう、昨日の人だよ」

そう言って仮面とロープを取り出す

「あの、昨日はありがとうございました」

「いや、いいよ、助けたのは…っとこれは秘密だった」
最後のほうは誰にも聞こえないくらいの小声で言った

危うく自分で千雨ちゃんの事をばらすところだった

「そうだジジイ、昨日の件、ちゃんと振り込んでよ」

「分かった。それと、これを機に正式に働いてみんかのう」

「遠慮する、そもそもてめえの所為でばれてんじゃねえか」

これ以上ふざけた事を言うならマジで後頭部を切り落としてやるう
かな、と割と本気で思い始めたら、
身の危険でも感じたのか

「分かった、この事はこれ以上言わない」
と、大人しく引き下がった

帰ろうと思ったら

「あの、名前を教えてくださいませんか？」
刹那ちゃんが聞いてきた
そっぴえば教えて無かったっけ

「俺はフィアンマだよ、刹那ちゃん」

「ちゃん付けはやめてください。
フィアンマさん、私に剣を教えてください」

「いいよ、でも俺剣を使つての戦闘とかあんまり得意じゃないから、近接戦闘の特訓になるけどね」

「意外じゃのう、お主がここまで面倒をみるとは」

「どうせ損するわけでも無いからな、暇つぶしにはなるだろうし」

「あれだけ強いのに得意じゃないってどういう事ですか…」
刹那はちよつと遠い目をしている

まあ、経験つつーか、剣術なら詠春と模擬戦して大体わかつてるし

「じゃあ、週末にでもエヴァの家に来てくれ
俺はエヴァの家に居候してるから」

「分かりました」

そう刹那が言ったのを確認した後、学園長室を出た
そのまま学校を出て考え続ける

こつち側に入る奴が増えた

ま、刹那を育てるのも面白いかもしれんな

でも原作通り進むか心配になってきたな

…考えても仕方がない、か

第十六話 実戦経験は大事（後書き）

はい、刹那にも正体がばれました

仮契約はさせるつもりですが、まだ考えてません

感想はいつでも募集中です

では、また次回

第十七話 長谷川千雨の日常

第十七話 長谷川千雨の日常

SIDE 千雨

どうも、長谷川千雨だ

今回はあたしの視点でお送りするらしい

そんなわけであたしの日常生活を書こうと思う

平日は学校に行き、終わったらエヴァの家でフィアンマの別荘に入り修行

時間になり次第帰宅

こういった生活をしている

休日の午前中は大体宿題やネットをしている

宿題も大変だが、No.1ネットアイドルを保つのも大変なのだ

とまあ、こんな感じで午前中は至福の時だ

なんせ、趣味に対して思いっきり打ち込めるからな
宿題は直ぐ終わるし

午後は、フィアンマの別荘で魔術の練習をしている
フィアンマの所為で常識の日常は崩れ去ったが、これはこれでなかな
な充実している
魔法（正確には魔術だが）が使えるってなかなか楽しかったりする
からな

できるなら巻き込まれたくは無かったが

そして、最近になってフィアンマに新しい弟子ができた
あたしの妹弟子になる

といってもあたしはそういう事はあまり気にしないが

そんなわけでちょっと修行風景を見ていただく

「ハッ！ヤアッ！」

「まだまだ甘い、コンパクトに攻撃をしる
隙が大きすぎる」

とまあこんな感じで桜咲とフィアンマが戦闘している

なぜこうなっているかは回想を見ていただく

〈回想〉

今日は土曜日で、私は昼前からここに魔術の修行をしに来ている
そして、外の時間で二時になったくらいの時に、「今日から刹那も
一緒に修行するから」とか急に言いだすから、びっくりした
既に連れてきてたし

学園長の所為で正体がばれたらしい
なんで弟子にしたか聞くと

「暇つぶし」
なんて答えやがった

「長谷川さんはフィアンマさんに魔法を習っているんですか？」

「ああ、まあな。

ただ、あたしが習ってるのは魔法じゃなくて魔術だ」

「魔術？」

桜咲も知らないらしい

魔術って実はスゲーマイナー過ぎる技術なんじゃないだろうか

「魔術ってのは…」（以下略

…ってことだ、まあ全部あの人の受け売りだが」
そう言っつてフィアンマの方を見る

フィアンマはエヴァと話しているようだ

「へえ、フィアンマさんって魔法以外のいろんな事教えてるんですね」

「いや、魔法はあまり得意じゃないから、らしいけどな」

「…そうですね」

なんか若干「またか…」みたいな視線をフィアンマに送っている前にも似たような事言われたのか？

こっちに来たフィアンマが桜咲と何か話している

「千雨ちゃん、じゃあ始めようか」

「あれ、桜咲の方はいいのか？」

「うん？ああ、大丈夫だよ。ちゃんとあっちも見てるから
そう言っつていつもと別の練習場へ行く」

たぶんあたしの詠唱のときにやったように存在の分裂（？）でも使うのだろう

「よし、じゃ、今回は魔力の運用を効率良くする修行だ。
魔力のコントローラがちゃんとできてればすぐできる」

そんな感じでいつも通り『擬似・黄金練成』の練習をした

〈回想終わり〉

あたしは休憩中に暇になったので桜咲の修行を見に来た
フィアンマは来ていない

「相変わらずのでたらめさだな、フィアンマの奴」
エヴァンジェリンが隣で呟いている

「ああ、あたしもそう思う。」

あそこまで近距離戦できるなら魔術とかいらんんじゃないか？」
そう思わざるを得ないほどにすごかった

だってあいつ銃弾を撃たれた後に避けたりするし

スゲー早い斬撃を簡単に避けたりするし

人間としているいろはみ出てる気がする

出る杭は打たれるというが、あいつは撃つてもはじき返しそうだし
私としては、今更あいつが人間じゃないといってもすんなり信じら
れる

でも、エヴァンジェリンの事をさらっと話す辺り、フィアンマ自身
は紛れもない人間なのだろう
別に吸血鬼だと言っても驚かないが

あたしは人間かどうかを議論してる辺り、余程人間という枠から外れた奴だな。と思う

エヴァンジェリンもすごい魔法使いで、一度戦ってみたいというから相手をしたらボロ負けだった

すごく強いのに、それでもエヴァンジェリン曰く

「フィアンマに勝てる奴はまず人間じゃない、神だと言っても驚かないだろうな」

と言わせるから、フィアンマは本気で戦ったらものすごく強いのだろう

実際に本気で戦ってもらう必要もないが

そんな事を考えているうちに桜咲の修行が終わったらしい

「長谷川さんも修行は終わったのですか？」

桜咲が汗を拭きながら話しかけてくる

「あたしは今休憩中だ、魔術の修行は肉体より精神が疲れやすいらしいからな」

「そうですね。」

ところで、フィアンマさんにはつきっきりで修行を見て貰っていたのですが、

長谷川さんの修行は大丈夫だったのですか？」

「ああ、あたしのところにも居たしな」

「え？どういう事ですか？」

桜咲が混乱している

いや、あたしも最初はわけわかんなくなっただけど

とりあえずフィアンマに常識は通用しないってことは良く分かった

「それについては本人から聞いてくれ」

あたしは未だにあれの事が良く分からん

そんな感じで今日の修行は終わった

これが普段の日常だ

正直、今までのような悩みが無くなったのは良かった

ここが異常だという事は良く分かったからな

その点ではフィアンマに感謝している

だが、偶に戦闘経験の為、とか言って連れ出すのはやめてほしいが

〜とある日〜

今日はいつもとちょっと違った日常だ
いつも通り学校を終え、フィアンマの修行を終えて、寮に帰って寝
ようとしていた時だ

フィアンマから連絡があった

今度は侵入者の撃退らしい

今回もフィアンマは一緒に来るらしい

ただ、「今回も傍観、危なくなったら助ける」とのことだ

桜咲は来ない

鬼の撃退で手がいっぱいだから、ということでフィアンマに依頼が
来たからだ

そんなわけで、図書館島近くで侵入者と相対してるわけだが

「お嬢さん、俺はむやみに攻撃はしない主義なんだ。
手を出さないなら見逃してやるが？」

こんな感じで高圧的に話すから、あたしは直ぐにでも潰してやりた
いところだが

「…なんでそんなに銃持ってたんだよ」

そう、手にも服の中にも大量の銃を持っていた

あたしも銃を出せるし、飛び道具に対しても何とか防げる術を持っ
てる

だが、瞬動なんかで高速で移動する上に魔法と銃を混ぜて使うからやりづらいことこの上ない

はつきり言えば魔法使いタイプのあたしに近接戦闘は向いてない

「俺は乱射魔って奴さ、それが気に入ってんのよ。

だから俺の戦闘にも銃を使ってる

で、退く気は有るのかい？」

それに答える前に何故かフィアンマが出てきた

なんで出てきた

傍観じゃなかったのか

あたし的には助かるからいいけど

「乱射魔ねえ、その程度で乱射魔気取られちゃたまらねえな」

どうやら乱射魔という言葉に反応したらしい

「ああ！？だったら試してみるか！？」

そう言って侵入者は銃を構えて撃つ

フィアンマは素手でそれを逸らす

「残念だったなあ、銃弾つてのはマツハ三で真横からはたけば逸らすのは簡単なんだよ」

いや、言うほど簡単な事でも無いと思うが…

「はあ！？嘘だろ！？そんな筈がねえ！！」

侵入者は銃弾を素手で逸らしたことでかなりパニックってるようだ

何度も撃つが全く当たらない

瞬動で移動して撃つがそれも逸らさせる

あたしはちゃんと周りに防壁を張ってるから当たらない

「『動くな』」

フィアンマの一言で侵入者は動きを止める

そして小さく弾、弾、弾と呟いている

「だから言っただろうが

その程度の火力で乱射魔気取られちゃたまらねえよ」

弾、弾、弾、と呟くたびにフィアンマの周りに銃弾が形成されていく

「乱射魔トリガーハッターが聞いてあきれるぜ！！」

その言葉を境に形成された銃弾が一気に侵入者に飛んで行く

「弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾」

弾弾弾弾

弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾」

弾弾弾

弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾」

弾弾弾」

ものすごい数の銃弾が侵入者に襲いかかる

…あれが真性の乱射魔か

桜新町の某言霊使いの言葉を盛大にリスペクトしてたけど

アレはあたしもできるだろうけど、喉が痛くなりそうだ

弾膜の音がうるさ過ぎて侵入者の悲鳴も聞こえない

ご愁傷さまだな

てか、これ受けて侵入者生きてんのか？

どうやら銃弾の威力はちゃんと押さえてたらしく、気絶だけで済んだ
アレは確実にトラウマだろうな

銃、銃弾、魔法媒体は全てフィアンマが回収していた
何に使うのかは知らない

最後にフィアンマが

「これ、修行に使ってみようかな」

とか呟いてたが、これが空耳で有る事を願いたい

侵入者を引き渡した後、あたしはフィアンマに寮の前まで送っても
らった

毎回思うけど、あのロープは瞬間移動や防御ができるから便利そうだ
あたしも欲しい

これが、あたしの日常だ

これからも同じように過ごせるとは思わない。日常なんて変わるも
のだ

「このころ、あつちの口を遊ばせてく

第十七話 長谷川千雨の日常（後書き）

はい、千雨の日常という形で書きました

次はちょっと時間を飛ばすつもりです

感想は常時募集中です

では、また次回

第十八話 唯の通過点

第十八話 唯の通過点

はい、俺でーす

時間は飛びに飛んで、まずは千雨ちゃん達が進級しました

その時、約束通りエヴァの呪いを解いたが、

「お前が何をたくらんでるかこの目で見てやる」と言われた

とりあえず卒業までは麻帆良に残るってことらしい

俺は別に何もたくらんで無いけどね

強いて言うなら殺人計画練ってるけど

呪いを解いたのは聖なる右ではなく『抱朴子』を使って解いてみた
この世界の呪いも解けるんだね、感心したよ

最近聖なる右の出番が無くなってきた

まあ、目立つし、そもそも聖なる右を使わなきゃならないような敵
が居る訳でもないし
問題は特にない

そういえば最近ウチのメンバーがインフレを起こしてきた

千雨ちゃんは『擬似・黄金練成』をかなり使いこなせるようになり、この学校の魔法先生レベルなら倒せると思う。タカミチは無理だと思うが、って位にまでレベルアップしてた

刹那は刹那で神明流はともかく、実質的な戦闘能力だったら刀子と同レベル位だと思う

技術よりも身体の使い方を学ばせた

だって俺神明流の技使えないしさ、剣だって身体能力のスペックでごまかしてるに過ぎないし

技術でいったら俺教えないしね、むしろ俺が教わる方

それとは別件で昼間は世界中回ってる、魔法世界も含めてね。

ちゃんと動くのは夏休み頃になりそうだが、いろいろ準備をしている

そういえば、ネギの弟、シキって言うらしいね

何というネーミングセンス、直視の魔眼を使うからかな

一遍遠くから見たけど、能力はちゃんと使いこなしてたっぽい

いずれは上条のように『倒すべき敵』として引きずり出すつもりだが今は放っておいた

そういえば、どこから情報が漏れたのか超が訪ねてきた

春休み半ばだったかな
回想にまとめたので、そちらをどうぞ

〈回想〉

超に呼びだされて喫茶店にいる俺と超

俺はすっかり認識阻害と音遮断の魔術を展開している

「で、俺に何か用でも？」

どうせ麻帆良の世界樹使った計画の事だろうけど

「うん、実はあなたに手伝って欲しい事があるんだが」

「内容による」

「うむ、実は二年後にある世界樹の大発光のときの魔力を使って、
世界に対して魔法を認知させようと思っ
てい
手伝ってもらえるカナ？」 「却下」

改行がいらなくらいの速さで答えてやった

「…いくらなんでも即答過ぎるヨ」

「他人に使われるのは嫌いなんだ
他人をこき使うのは好きだがな」

「今最低の人間の言葉を聞いた気がするヨ」

「だがまあ、そんな事をしようなんてな。
お前一体何考えてるんだ？」

「聞いて驚くがいいヨ」

私は未来から来た未来人兼火星人ネ」

「アホ、そういうことじゃない。
なんでそう考えたかを聞いてるんだ」

「…反応が寂しいヨ
もうちょっとリアクションが欲しかったネ」

「質問に答える」

「禁則事項ネ」

「じゃあいいや、ここは支払っといてやる」
そう言っつて席を立つ

「…ずいぶんと無関心なんだナ」

「どうせ関係ないしな」

ああ、計画には参加しないが、手出しもしない
別に俺に利が在るわけでもないし」

「……そうか、そういう人だったナ、あなたハ」

「は？まるで会った事あるみたいな口ぶりだな」
どういふ事だ？俺が未来で何かしたのか？

「詳しい事は話せないヨ
ここも禁則事項ネ」

「そうかい、じゃあな」

それだけ言っつて術式を解き、金を払って帰った

く回想終わりく

まあ、こんなこともあつたりしたわけだ

俺が未来で何をしたかは気になるが、まあどうでもいいことだろう

どうせ麻帆良祭で話すだろうし

そんな感じでいつも通り過ごしていき、特にこれといった事件もなく

夏休み前になった

セミは鳴いているが、ひぐらしは鳴かないで欲しいと思うようになった今日この頃

別に何か惨劇が起こるわけでもないけど

さて、もうすぐ待ちに待った夏休み。俺はいつでも休みみたいなものだが

それはともかく、刹那と千雨ちゃんには魔法世界で経験を積みませよ
うと思ってる

それを話したら

「別に戦闘が目的で魔術を習ったわけじゃないんだが…」

「私はお嬢様の護衛もしなければいけないので…」
と言われてしまった

千雨ちゃんには

「命にかかわる事だし、やっぱり経験積みませとくべきだと思ってね」
と言いたい

刹那には

「木乃香ちゃんには龍宮を付けておく
一応面識あるし、金払っておけば仕事はちゃんとしてくれるだろ」
と言っただけ

千雨ちゃんは若干不服そうだったが

たぶんネットライフを満喫したかったんだろう

刹那は「それなら…」と結構簡単に折れたが

そんなわけで、夏休みになったら俺は動く

第十八話 唯の通過点（後書き）

はい、つなぎの話です

短いですが、楽しんでいただけたでしょうか

次回からフィアンマが本格的に動きます

感想は常時募集中

では、また次回

第十九話 動き出す計画

第十九話 動き出す計画

ども、俺です

早速だが、夏休みになった
今は別荘にて会話中だ

宿題は最初の一日目で別荘に入り、全部片付けさせた

「そんなわけで、修行のために魔法世界へ行きたいと思います」

「何がそんなわけなんだよ」

「気にするな。向こうでは俺の知り合いに世話を頼む」

「え？フィアンマさんは来ないんですか？」

「行くよ。行くけど、ずっと一緒にいられるわけでも無いしね。
俺もいろいろ用事があるから」

「それは分かったが、緊急時の連絡なんかはどうするんだ？」

「…どうしようか、いくつか方法が無いわけでもないけど。」

「…うん、仮契約が一番簡単かなあ」
はっきりに言って今偶然思い出したけど

「仮契約？」

「うん。仮契約ってのは魔法使いとの契約によってパートナーとなることだな。」

「パートナーは魔法使いの魔力により身体能力を強化できるとか、アーティファクトって言う魔法具がもらえたり、いろいろ特典が付く」

「そんな便利なものがあるならなんで早く言わなかったんだよ」

「いや、契約方法がキスだしね
他に方法は有るけど、面倒だし」

「キス？マジかよ…」

「……分かった、それで危険の度合いが減るなら、してやるよ」

「……私も、仮契約してもいいですよ」

「いや、二人とも顔真っ赤にしてるとこ悪いけど、キス以外にも方法あるからね？」

「フッフッフ、いいじゃないか、キスくらいしてやれよ」

エヴァが急に話しに加わってきた

「何を面白がってたお前は」

「キスくらいいいじゃないか、ほら、さっさと仮契約してしまえよ」
顔がすげえニヤけてんだけどコイツ

茶々丸もいつの間にか仮契約の魔法陣書いてるし

「それじゃ……」

千雨ちゃんと刹那を順番に魔法陣に入れ、キスする

千雨ちゃんは予想通りネット関連のアーティファクトだった
ていつか見た目は鷹だった

実際には偵察にも使えるらしい、便利なものが出たなあ

刹那は刀だった

具体的に説明するなら見た目は斬刀【鈍】

実際に確認すると、天叢雲剣あまのむすぶきのつゆだった

……神剣じゃん、伝説級の神剣じゃん

夕風いらなくね？

とは思ったが別に好きなようにさせた

二人のカード（コピー含む）に不可視の術式を書き、新世界、旧世界、距離を問わずに念話できるようにした
ここ最近いるんなどころに出かけるついでに中継になる術式をいろんな場所に書きまくったからな

エヴァは付いてこないらしい

「最近発売したゲームをとことんやりこむ」と、ニートのような発言をしていた

一時間程度で準備を終わらせた

龍宮に木乃香の護衛を頼んだら、長期という事もあってぼったくら

れた

四百万とか、まあ別に懐は痛まない。金なら余りまくってるし

そんな感じで準備を整え、魔法世界へ出発した
行先はヘラス帝国の近くだ

瞬間移動で魔法世界へ行った時、千雨ちゃんと刹那がかなり驚いていたが

「…オイ、アレ絶対に人間じゃねえよな？」

周りをきよるきよる見ながら言っている

刹那も初めて来たらしく、珍しそうに周りを見ている

「まあ、その辺は後でちゃんと説明してあげるよ」

そう言っつてテオドラのところへ向かう

そんなわけで宮殿なう

久しぶりにテオに会った

「お久々、元気してたか？テオドラ」

「フィアンマ！！久しぶりどころじゃないぞ！！」

「一体何年会ってないと思うておる！！」

かなりご立腹の様子

「そうだな、最後に会ったのは戦争が終わった直後だったし
十数年は会ってないかな」

「まったく、お主は心配するだけ無駄だとは分かっておるが、もう少し会いに来るとかは無いのか？」

そんな感じで話していると、忘れられていると思ったのか
千雨ちゃんが話しだした

「オイフィアンマ、この人誰だよ」

「ん？このじゃじゃ馬姫は俺達が今いるヘラス帝国の第三王女のテ
オドラだ」

千雨ちゃんと刹那が絶句している

「誰がじゃじゃ馬姫じゃ、公務はちゃんとこなしておる」

「昔はジャックにひつついて回ってたがな」

「む、昔の事は今言わずとも良いじゃろ。
で、そっちの娘達はなんじゃ」

「弟子さ、しばらくここに留まらせるつもりだから、宿とか用意で
きない？」

「お主が弟子とは…珍しいのう
宿は妾が用意しよう、

ところで、これが目的で妾のところに来たのか？」

「まあな、感謝してるよ。

それと、修行をさせたいから、この近くで魔獣とかが居たら狩りに
行かせてやってくれ

それから刹那、千雨ちゃんは魔獣を倒したら鱗とか剥ぎ取っとくよ

「に
結構高値で売れたりするからな」

「わかった、この近くの村を回れば魔獣はいるからな
お主も留まるのか？」

「いや、俺は用事があるから、偶に来るだけだな
用事が終わり次第俺もこっちにくる
それじゃ、よろしく頼む」
それだけ言つと瞬間移動で外へ出た

もう少しだけ時間があるからな

よし、始めるか

そして、俺は新世界、旧世界問わずに世界中に出現した
もう少しで準備が整う

〈SIDE 刹那〉

フィアンマさんは

「いや、俺は用事があるから、偶に来るだけだな。
用事が終わり次第俺もこっちにくる
それじゃ、よろしく頼む」

と言つて瞬間移動でどこかへ行つてしまった

「…相変わらず常識が通用しない奴じゃのう」
王女は溜息でも付きそうな感じだった

「あの、テオドラ王女」

「ん？ああ、宿は直ぐに手配させよう
それと、最近のフィアンマの事を話してくれるとうれしい。
ここ数年フィアンマの動きが全く掴めんかったのな」

「ありがとうございます。」
それと、フィアンマさんとテオドラ王女はどういった関係なんですか？」

「気になるか？」
フフ、妾とフィアンマは魔法世界の大戦以来の仲でな…」
と、王女はペラペラと話し始めた

すると、驚く事にフィアンマさんは戦争を終わらせたあの紅き翼の一員らしい

千雨さんはキョトンとしていたが、私が説明するとかかなり驚いていた
「なんじゃ、知らなかったのか
まあ、あいつの事じゃし、面倒だとかの理由で話して無かったんじやろつが」

その後、部下の人を呼んで何やら話していた

そして、宿へと案内された

必要な物だけを持って町を見回り、情報を集めた結果、魔獣を狩りに行く事になった

今、私達は森に来ている

「依頼内容はグリフィンドラゴンの討伐もしくは撃退ですね
私達は瞬動で移動しながら会話している

「グリフィンドラゴンって…
それ一応龍種なんだろう？」

「そうですね、下等種ではありませんが、一応龍種です」

「私たちだけで大丈夫かよ…」

「大丈夫ですよ、一応撃退できればいいわけですし。
完全な討伐は難しいかもしれませんが、千雨さんの魔術があれば奇襲なども可能なわけですから」

「そうだな、いくら強力な魔獣でも奇襲されればひとたまりもない
…っと、いたぞ。二時の方向だ」

千雨さんのアーティファクトの鷹でグリフォンを発見した

広域探査などができる優れ物らしい

直ぐにそちらの方向を確認して近づく

「ここで一旦様子を見ましよう」

千雨さんにストップをかけ、遠距離から観察する

水場で休んでいるようだ

「さて、どうする？」

発見されない様にしてはいるが、剣じゃここからじゃ奇襲もできないぞ」

「千雨さんは遠距離で何か攻撃法は？」

「銃や大砲だな。ただ、何を使うにせよ、効力や威力を高めようとするれば魔力をかなり使う。

近づいて一発で決められるなら、そっちの方がいい」

「では、何かしらの隠蔽いんぺいをしながら近づかなければ」

「其処は任せろ、『風向き、および光の屈折率を変更』

これで、嗅覚と視覚を潰した」

見るたびに思うが、やはり千雨さんの使う『擬似・黄金練成』というのは便利だと思う

音をたてないようにゆっくり近づく

十分だと判断したところで私のアーティファクト、天叢雲剣を構え、グリフォンを見据える

「では、私が一撃入れた後、其処にねじ込む形で攻撃をお願いします」

「分かった『ドイツ軍製FLAK36 88ミリ砲、銃弾は魔弾、

効力は爆発、魔力注入にて威力上昇』」
そういうと、何やら大砲のようなものが出現した

「あたしはできるだけ魔力を練って威力を高める」

「分かりました、では」

それだけ言っただけで瞬動でグリフオンの目の前に移動する

「神明流奥義 雷鳴剣!!」

気を溜めて首の付け根に攻撃する

攻撃した後、直ぐに其処から離れる

「喰らえオラァー!!」

千雨さんが叫ぶと同時に攻撃が放たれる

ドオオオン!!と爆音がする

一体どれだけ魔力を込めたのだろう

煙が晴れるのを待って一旦離れる

其処には焼け焦げて体が半分近く吹き飛んだグリフオンの姿があった

「…やったみたいだな、しかし、魔力を込めすぎた。

疲れた、少し休んで帰ろう」

そういうと、腰をおろして休み始めた

その後、私達は鱗などの無事なものをはぎ取り、村へ帰った
はぎ取ってる最中に千雨さんが

「はぎ取りとかモンオンかよ…」

と呟いていたが、モンオンとは何だろうか

〈SIDE フィアンマ〉

さて、ネタばらしを含む説明をしよう

俺がここ数カ月動いていたのは新世界、旧世界含む世界中に記憶に
対しての操作をするつもりだ

そのために世界中の霊脈沿いなんかには術式を仕掛け回ってた

必要な知識は霊装から取り出せるから便利だ

術式の規模も数も多いから仕掛けるのに数カ月かかってしまったが、
許容範囲だろう

戦争の後、世界中を回っている時に『蓄え』を作っておいて正解だ
った

ロシアのとある広大な場所に施設を作り出し、とあるものを組み立
てる空間を確保し、組み立てる

簡単に言ってしまうが、その為には無菌室のように作業場を整え、
『蓄え』を切り崩し、構築する必要がある

それは、莫大な時間と費用、人数が必要だった

つまり、本来なら一人では数か月単位でできる事ではない
だが、俺という存在を同時に複数の場所に作れば、術式をしかける
事、とあるものを組み立てる事を並行に進める事が出来る

それでも本来はまだ時間がかかるはずだったが、超が使おうとしていた方法を利用し、それを計算したうえで術式を配置した
計算に多少手間取ったが、それでも時間を相当有効に利用する事が出来た

さて、そんなわけで今、殺す対象であるシキ・スプリングフィールドの目の前にいる
ちなみに森で能力の練習を始めようとしていたところを、無理やり瞬間移動でロシアのとある施設の中に連れてきた

「…あなた、転生者だな？」
おっと、説明の途中で話しかけんなよ

「なぜそう思う？」

「あなたの存在は元々無かったはずだ、世界を救った英雄に本来あなたの名は無いはずだ」

「…まあ、隠す意味も無いしな。俺は転生者だ、だからなんだ？」
「あなたの目的はなんだ。」

俺はハーレムを作りたいと思っているが、あなたはどうなんだ？」

「…ハーレム？ハハッ、マジかよ。
そんなこと考えてたわけか。」

ま、俺の目的は話さない。お前みたいにペラペラ自分の事をしゃべろうとは思わないんでな」

「何？ならなんで俺の前に現れた

あんたは聖なる右を使うんだろうが、俺は直視の魔眼が使えるぞ。

例えお前が神上だったとしても、幻想殺しも持っている俺相手では分が悪いだろう」

「ハア？知ってるよ、そのくらい

そんなのは簡単な話だ、直視の魔眼を使えるなら、切らせなきゃいい。

幻想殺しか、それが俺の不愉快の原因なんだがな

さて、そろそろ時間だ」

そして地面が揺れ始める

〈SIDE 三人称〉

起きた現象を視認することは容易だったかもしれない

だが、それが何を意味していたかを知る者は存在しなかった

確かに魔術師は世界中に存在はしている

魔法とは違う理論であるがゆえに、魔法使いは魔術師はすでに消えたものだと思っていた

いや、存在していた事ですら知る者は少ない

だが、それを継承し、理解していた者は確かにまだ残っていた

しかし、その魔術師ですら、この現象には目を見張るばかりであった

視認はできても、理解が追いつかない

世界中にある魔術的な意味を持つありとあらゆる物が一か所に集められていた

それは柱、鐘、パイプオルガンなどの多種多様な物だった

それが、ロシアの一か所に集められていた

数千、数万、数十万とかき集められた各文化の結晶は一か所に集まると複雑に絡み合い、何かを形作っていた

巨大な建造物の山は、一辺十キロ以上の敷地の中に収まりきれなかった
だが、建物はそれ以上に膨張していた

そして、ゴツッ！という爆音とともにそれは浮遊する

それにシキが気付いた時、すでに宙に浮かんでいるような感覚を味わっていた

しかし、実際にはシキが立っていたロシアの大地そのものが地盤を崩すように持ちあがったのだ。

そしてシキは見て、ただ驚く

飛んでいたのだ、自分や、フィアンマがいるこの場所が

そして、雲を裂き、上空三千メートルを超えてもまだ上昇していた特殊な結界が張られており、一度完成すれば外からは完全に視認は

不可能

要塞上の気温、気圧は地上と同程度に保たれている

そして、フィアンマは言葉を紡ぐ

「さて、歓迎しよう」

ようこそ、俺の城『ベツレヘムの星』へ」

第十九話 動き出す計画（後書き）

はい、中途半端ですみません

シキを出した理由として

- 1、神ともう一度対話させる必要があった
 - 2、フィアンマを使うならベツレヘムの星を出したかった
 - 3、フィアンマのかませ犬の三つがあったからです
- 不快に思っただ方はすいませんでした

次回、ついにフィアンマとシキが戦闘します

感想は常時募集中

では、また次回

第二十話 ただ一方的な虐殺

第二十話 ただ一方的な虐殺

〈SIDE 三人称〉

「さて、歓迎しよう

ようこそ、俺の城『ベツレヘムの星』へ」

フィアンマはそれだけ言っただけでシキを見る

こうしている間にも、ベツレヘムの星は膨張を続けていた

重要なのは、自己膨張するためのサイクルを作ってしまう事
サイクルさえ作ってしまえば、後は補給なしに必要な分だけ拡張で
きる

そして、今の大きさはまだ完全なベツレヘムの星の十分の一にもな
っていない

「…ベツレヘムの星、だと

まさか、俺の右手を狙っているのか？」

フィアンマはそれを聞いて乾いた笑みを浮かべる

「お前の右手？」

そんな物などいらんよ。お前は幻想殺しの意味を分かっていない
お前の持つ右手はただの贗作だよ」

「意味を分かかっていない？
これはただ異能を打ち消すだけじゃないってことは俺だって知ってる
だからなんだってんだよ」

「俺はさ、長い年月をかけて、『新時代』^{ホルス}までたどり着いたんだ。
だから、軽くだが理解できた。

アレイスターの言っていた意味がな
重要なのはその右手じゃない、その右手に押さえつけられてるモノ
が重要なんだ」

シキはフィアンマの言葉に絶句する

「……たどり着いた？『新時代』^{ホルス}へと？
シキはそう呟く

フィアンマは律儀にもその言葉に返答する

「ああ、とはいえ、楽なことでは無かったがな
だが、おかげで聖なる右を更に強くする事が出来た

だから分かる、お前の持つその右手はただの贋作だよ
くだらない、取るに足らない唯の贋作」

「……だったら……だったら、何でこんなことをした？
俺の右手が目的じゃないのなら……
だったら何で『ベツレヘムの星』^{こんなもの}を用意した？
お前の目的はなんだ!？」

「落ち着けよ、みつともない

俺はさ、お前の持つその不出来な右手が嫌いなんだ
なんでだろうな。俺と同じ特異なる右手の力、それを持つお前が
気に食わない

だから殺す。俺の手で、お前を完膚なきまでに叩き潰す」

それはあまりに理不尽な理由だった

だが、元々フィアンマの戦う理由など自分のためではない
むしろそれ以外の事で動く事の方が少ない

「…俺を……殺す？」

俺がこの右手を持つてるといっただけでか？

なら、もし俺が上条のようにこの肉体に『何か』が居たとしたら、
例えお前でも手出しはできないんじゃないか!？」

「そんなものがあるはずがないだろう」

フィアンマは無常に告げる

「お前の右手はon, offを切り替える事が出来る

押さえつけているはずの幻想殺しを切れば、お前の言う『何か』が
飛び出してもおかしくは無い

幻想殺しとは、神聖なる右手が自然に備えてしまった浄化作用だ。

いっようなれば、『何か』を押さえつけている力・存在の副次的な効果
でしかない。

そんな物で俺は倒せんよ

なんなら、その右手を切り落として実験しようか？」

フィアンマのそれは確信していた言葉だった

フィアンマは、これ以上会話は不要とばかりに聖なる右を発動する

シキはそれを見て、直視の魔眼を発動し、『王の財産』から『約束
された勝利の剣』を取り出す

フィアンマは無造作に右腕を振る

しかし、その一撃は当たれば死んでもおかしくない莫大な力

シキは『約束された勝利の剣』を左手に持ち、幻想殺しでその力を
いなくす

それだけでも十分に達人の域に匹敵する

「その出来ない右手を使うな、不愉快だ」

そう言つて、フィアンマはまた右腕を振るう

シキはまた同じようにいなくすとする

だが、豊穰神の剣を再現することで、いなければ死に直結する攻撃を
繰り返す

シキは『約束された勝利の剣』を真名解放し、豊穰神の剣を消し飛
ばす

そのままフィアンマの攻撃を相殺しようとするが、無駄だった

『約束された勝利の剣』の攻撃は一瞬でかき消され、そのまま本体
で受け止めようとするが、数秒で破壊される

シキは『全て遠き理想郷』を使う事で何とか防ぐ
しかし、フィアンマは攻撃の手を休めない

「『硫黄の雨は大地を焼く』即時発動」

五十以上の矢のようなものが一斉にシキに襲い掛かる

『全て遠き理想郷』を使って攻撃を防ぎながら、『王の財産』か
ら『乖離剣工ア』を取り出す
そしてそのまま真名解放する

「『^{エヌマ・エリシユ}天地乖離す開闢の星』！！」
シキは叫びながら攻撃する

だが、ファイアンマはただ無造作に右腕を振るうだけだった
たったそれだけの仕事で、シキの膨大な魔力を込め、

宝物庫の宝具のバックアップで、更なる威力の増加を生み出す『^{エヌマ・エリシユ}天地乖離す開闢の星』を打ち破る

例え対界宝具だろうと、相手を斬るのではなく空間切断をしている
のだとしても関係ない

必要であれば星一つ塵にする程の絶対的な光の爆発が『^{エヌマ・}天地乖離す
^{エリシユ}開闢の星』をいとも簡単に打ち破る

これが世界を救う力とまで比喻されたもの

これが一つの神話の中心たる力とまで比喻された力

『神上』とまで言われる絶対的な力

だがしかし、その力を受けて尚シキは生き残っていた

『^{エヌマ・エリシユ}天地乖離す開闢の星』を打ち破ったとはいえ、相殺されて多少
なり威力が落ちていた

其処に『^{プロークン・ファンタズム}王の財産』から複数の宝具を取り出し、『^{アヴァロン}壊れた幻想』を
使って更に威力を削ぎ、

『^{アヴァロン}全て遠き理想郷』で防ぐ

其処からの戦況は一方的だった

シキは『^{メルト・タウナー}原子崩し』、『^{レールガン}超電磁砲』、『^{ダークマター}未元物質』、『^{アクセラレータ}一方通行』、
削板の『^{原石}』、の能力を使い攻撃した

だが、全て無駄だった
強力な白く輝く光線、雷撃の槍、白い翼による打撃・斬撃・烈風・
衝撃波・光攻撃、ベクトル操作による高電離^{プラスマ}気体による攻撃、
説明のできない力による攻撃など

ありとあらゆる攻撃を真正面から相殺した

「…なんで、何で『^{メンタルアウト}心理掌握』が効かない!!」
シキは激昂する

対するフィアンマは答える

「精神に干渉することが出来る術を持つのは、超能力者だけでは無い
魔術にも、精神干渉やそれに対する防護策位存在するに決まってい
るだろう」

あまりにも当然の事

精神干渉は超能力者の専売特許というわけでは無い

魔術の技術は秘匿するものであり、情報を欲しがる者に対して、そ
ういう技術が発達していてもおかしくは無い

其処からシキは超能力と宝具を組み合わせさせて戦い始める
フィアンマは攻撃をしない
ただ、攻撃を相殺し続けるのみ

直視の魔眼で集中して視る

シキは違和感を覚える

(死の線が異様に薄い…)

荒耶 宗蓮のようにたんじやう仏舍利を埋め込んでいるわけでは無い、だが神上という神聖さが死の線を薄くしている

そして、それが弱点にも成りえた

シキは『エルキドゥ天の鎖』を使ってフィアンマの動きを止める

神上であり、聖人でもあるフィアンマはこの鎖で動きをほぼ完全に止められる

そして『ゲイボルク王の財産』から『ゲイボルク刺し穿つ死刺の槍』を取り出して、フィアンマの死の点を見つけ、其処をつこうとする

フィアンマは『エルキドゥ天の鎖』を壊そうと魔術を使う

それはほぼ同時だった

シキはフィアンマに対して真名解放しての『ゲイボルク突き穿つ死翔の槍』を使おうとする

フィアンマは『エルキドゥ天の鎖』を赤い翼で壊し、右腕を振るった

結果は明らかだった

『ゲイボルク刺し穿つ死刺の槍』は放たれる直前に投げようとした右腕ごと消し飛ばされる

フィアンマが制御して、消し飛んだのは右腕だけだった

シキはそれを『オートリパース肉体再生』で再生させる

シキは思う

（おかしい、あれほどの力なら、最初の一撃で確実に俺を殺せたはず他に何か目的があるのか？）

その時、床に何か術式のようなものが浮かび上がった

シキの予想は当たっていた

実際、フィアンマは力を抑えていた。殺さない様に、しかし、着実に追いつめる形で戦っていた

なぜか、と問われれば、時間稼ぎのためだ

本来の十分の一にもなっていない不完全なベツレヘムの星では、術式を完全な形で成功させる事が出来ない

だから、フィアンマは力を抑え、殺さない様に戦っていた

ベツレヘムの星が完全に完成するまで

術式が完全に構築されるまで

それまで時間を稼ぐ必要があった

だが、もう術式の構築が終わった

時間稼ぎは不要になり、フィアンマは一撃で決めにかかった

フィアンマの何かをつかむような仕草をする。シキは指先を動かす
パントマイムのような動きに何かを知覚した

有るはずの無い物がにじみ出たような感覚。それは確かに現実世界に存在していない

だが、気配や雰囲気といった未分類の情報の所為で、『銀』という色まで付いているように見えた

ファイアンマは、杖の本体ではなく、『プラスチックロッド衝撃の杖』の力のみを呼び出したのだ

左手に持ったその杖を、ゆっくりと振るう

それだけの仕草で、シキの右腕は切り離された
切られた部分から血が吹き出る。

術式の上に飛び散ったその血を媒体に情報を読み取り、その情報のみを消すという事を世界中の生物に対して行う

それがファイアンマの計画

そして、情報を読み取り終るとシキ本人は不必要となった

「じゃあな、転生者。」

結局、お前は最初から最後まで不愉快な存在だった」
それだけ言っと、右腕を振るった

今までのように手加減した一撃では無く、本気で消しにかかった一撃

シキはそれを防ごうと『アヴァロン全て遠き理想郷』、『ロ・アイアス天覆う七つの円環』
を使うが、

聖なる右の圧倒的な一撃で破壊される

超能力で防ごうとするが、

『未元物質』の翼を消し飛ばし、『オフエンスアーマー窒素装甲』を貫通し、『一方通行』を無視する

シキは攻撃を防ぎきれなかった

肉体の原型がかるうじて残っている状態になり、絶命した

フィアンマは絶命したのを確認して死体を消し飛ばした

そして術式を発動し、全世界の生物はシキ・スプリングフィールドに関する記憶をなくした

魔法世界にも擬似的なベツレヘムの星を作成し、それを介することで魔法世界の生物にも影響を与えた

例え麻帆良のように結界に守られていようと、それをすり抜けて影響を与えた

とはいえ、フィアンマの仕掛けたエヴァの家の結界だけはすり抜けられなかったのだが

そして、魔法完全無効化能力者である明日菜も、この術式は通用しなかった

フィアンマはそれを見越していたからこそ、この時期に行動を起こした

一度会ってしまえば、何かしらのイレギュラーが起こる可能性もあったからだ

シキを知らない者は何も影響が出なかった

だが、より多くの事を知っていれば、脳に影響を与えた

といっても、めまいや立ちくらみなどの軽い影響だったのだが

そして、世界中の生物は、記憶を操作された事にすら気付かぬまま、
日常に戻る

第二十話 ただ一方的な虐殺（後書き）

はい、フィアンマのチートターンでした

なんかかなり自己満足のために書いたような気がします

次回は日常パートです

感想は常時募集中

では、また次回

第二十一話 夏休みの終わり

第二十一話 夏休みの終わり

はい、俺でーす

さて、あの子の報告をしようと思う

全世界の生物の記憶をいじくった後、俺はベツレヘムの星の出力をどうしようかと悩んだ

結果、俺の血を混ぜた天使の偶像を『偶像の理論』を用いて『天使の力』^{テレスマ}を宿らせる方法をとることにした

これは姿や役割が似ているもの同士はお互いに影響しあい、性質・状態・能力などとしても似てくると言う魔術理論で、本来なら余程の物でもない限りはオリジナルの0.000000数%程度が限界だ

だが、聖人であり、ミカエルの力を使っている俺の血を混ぜる事で、十数%という破格の力が出せるようにした
おかげで、聖なる右からの力の供給なしで浮遊し続ける事が出来るようになった

『偶像の理論』万歳！！

ちよつと血を抜き過ぎて貧血気味だが

まあ、問題無いだろ。というわけで一日休んでから千雨ちゃんと刹那の状態を見に行くことにした

城の中は割と普通で、進行方向を前とするなら右側だけ他の二倍くらい伸びている

原作では右側にある儀式場で『神の力』^{ガブリエル}を召喚していたが、俺は魔法世界にあるもう一つのベツレヘムの星との門^{ゲート}として使っている

使う機会があるかは分からないがな
だって俺瞬間移動で行き来できるしね

それはともかく、俺は城の一室で休んだ
部屋自体はかなり沢山あった。ベツレヘムの星を構築した時から在ったし、おそらく壊れても直ぐに元に戻るだろう

いちいち直さなくていいって便利だわ
壊す機会があるのかも微妙なところだが

そんなわけでゆっくり休んで過ごした
食料はローブから出して食った

〜次の日〜

ゆっくり休んだので、立ちくらみなども無い

ベツレヘムの星は高度一万メートルを保たせたまま放置することに
した

偶にいろんな物を持ちこんで少しずつ改造していこうと思う

たとえば、電力発電装置とか

太陽光発電とかよさそうだ、邪魔する雲も無いし

人形を置いてここを整備させようか

エヴァにここの一室を貸し付けるとかして作らせよう

とまあ、こんな感じに思考が傾いてきてから今日の目的を思い出した

良く脱線するよね、俺

そんなわけで宿屋なう

「や、がんばってた？」

「フィアンマさん、久しぶりじゃないですか」

良く良く思うとテオドラに預けてから二丁三週間程ほって置いたし、
久しぶりだよな

「一体何してたんだ？」

「まあ、いろいろとね。」

こっちの用事は終わったし、最後に二人の出来具合を見てから今回
の合宿は終わりにしよう」

「分かりました」

「分かった。」

……そう言えば、フィアンマって英雄なのか？」

「ん？何を急に言ってるんだ、千雨ちゃん」

「いや、第三王女に聞いたんだけどさ、フィアンマって二十年前の戦争で活躍した英雄なんだって？」

「そうですね、フィアンマさん。」

そんなこと一度も聞いてませんよ」

「いや、だって話してないしね

二十年前の戦争で活躍したのなんて別に言ってもしょうがなくない？
唯の自慢にしかないよ？」

ジャックなら言いそうな気がするが

「それはそうだが…いや、やっぱりいいや

どうせ『終わった事だ』とか言うにきまつてるからな」

何故分かったし

「まあ、そういう事でいいだろ。」

取り合えず今日は何も予定は無いな？」

「ええ、今日は魔獣退治などの依頼は受けていません」

「なら、早速模擬戦でもしようじゃないか」

二人ともちゃんと修行できてたかな

と、そんなわけで模擬戦を試してみた

めっちゃ強くなってたよ、二人とも

千雨ちゃんとか、思考がめちゃくちゃ早くなってた

相手の動きを予測したうえでの罠や遠距離攻撃なんかをしてくる

魔力の運用効率なんかも上がってたし、これは魔法世界に連れてきたのは正解かな

刹那は刹那で、一撃一撃が鋭くなってた

一撃をより早く打ち込み、相手に隙を見せない様に立ち回る
気の使い方もうまくなってたし、こっちも連れてきて正解だった

そして、これで夏休みの修行は終わりにした

最後の二週間くらい好きに過ごさせたいしね

手に入れたお金は旧世界の通貨に換えてあげた

いきなり大金を手に入れた二人はかなり複雑そうな顔をしていたが

そのあと、テオドラに礼を言って帰ろうとしたが、駄々をこねられたので二日ほど一緒に町を回る事になった

俺はフラグを立てた覚えは無いというのに！！

まあ別にどうでもいいことだが

その状況を二人に見られていたが、えらく冷たい目だった

これは何か埋め合わせでもしなきゃ駄目か…

そんな事があつたが、とにかく麻帆良に帰ってきた

千雨ちゃんはこれからネットライフを満喫すると言つてダッシュで帰つた

刹那は龍宮に礼を言つてから寮に帰ると言つていた

俺は龍宮に報酬を払いに行つた

何も無かつたらしいが、またぼつたくられた

そのあと、帰ろうとしたときに声をかけられた

「フィアンマさん、そういうえば、夏休みの間に起きた不思議な事件を知ってるかい？」

不思議な事件？

「何かあつたのか？」

「なんでも、教会の柱とか、重要文化の鐘がいきなり浮遊して空に消えてつたとか

そういうのが世界中であつたらしくて、魔法先生達がいろいろ動き回つてたよ」

.....

「そうか、分かつた

後は自分で調べてみるよ」

とりあえずエヴァの家に帰ろう

エヴァ家なう

「ただいま」

「お、フィアンマ

なかなか早かったじゃないか」

「まあな、俺の用事も済んだし、予定を切り上げて帰ってきた」

「ククク、お前の用事とはこれか？」

エヴァはそついうと新聞を持ってきた

何々、『消えた建造物、UFO疑惑あり』『世界中で消える建造物』

『消えた重要文化財の行方を追う！』等々

「これ、お前がやったんだろ？」

エヴァは面白くてたまらないといった顔をしていた

……………なぜ分かったし

「なぜ俺だと？」

「何、簡単なことだ。

こんな派手な事をするのはお前ぐらいしかいないからさ」

俺ってそついう認識受けてたわけ

「それで、これほどの事をして、お前は何が目的だったんだ？」

んん、どうしようか

元々エヴァに部屋の一室を貸す約束を取り付けて、人形にベツレヘムの星の整備とかさせようと思ってたし
丁度いいかな

「気になるか？」

なら、連れて行ってやるよ」

そう言っただけで準備させる

「おい、どこにあるんだ？」

エヴァは外に出て暑そうに日傘をさしている

「空を」

「は？」

エヴァは呆けているが、俺は瞬間移動でベツレヘムの星へ跳ぶ

「……なんだ、ここは」

エヴァがフリーズしていた

まあ、六百年生きててもこれは始めてだろうな

「ここは俺の城、ベツレヘムの星さ

特殊な結界が張られてるから、外からは認識は不可能だ

気圧や気温なんかも地上と同じくらいに保ってある」

「おまえ、こんなものを作るためにあんな派手な事をしたのか？」

うわ、めっちゃくちや引かれてるよ

しかし、計画の事は話すわけにはいかんしなあ
仮にもエヴァが惚れた奴の息子を殺したわけだし

「まあな、本当は別の事に使ってるんだが、ついでに自分の城を持ちたいと思って作った」

「別の事？何だそれは」

「魔法世界と門を繋げているのさ」

まあ、俺にはあまり必要の無いものだがな」

「ふうん、…しかし、派手なものを作ったものだ」

「一室貸すから、ここの整備用の人形とか作れない？」

「何？…そうだな、私にはレーベンスシュルト城があるが、ここに部屋を持っておくとか何かと便利そうだしいいだろう、人形を何体か作ってやる
その代わり、私をここに自由に入れるようにしろ」

「いいよ。そのくらいの条件なら簡単だ」

一旦外に出れば俺以外は分からないわけだしね

「ただし、入れるのはお前とお前の従者のみだ」

「ああ、もちろんだ。」

そういえば、桜咲や長谷川にはこれの事は教えんのか？」

「ああ、教えない
どうせ必要なわけでもないだろうしな」
あんまり人数増やし過ぎるのも嫌だし、そもそも必要になる事も無い
いだろ

そんな感じでエヴァは城の中を見に行った

俺はエヴァのために転移術式を開発中

終点となる場所はベツレヘムの星で決まっているが、始点であるエヴァの位置が決まっていないのが問題だ
ペンダントやネックレスなんかは術式を施しておけば、エヴァかその従者と認識できれば転移ができるように術式を組む

インデックスの知識には転移の術式こそ在ったが、それは位置を固定しておかなければならなかった

一応エヴァの家の地下にも術式は用意しておくでしょう

小型にするのには苦労はしなかったが、術式を作るのに苦労した所々に魔法理論を応用したものを使っている

ちなみに製作期間は別荘を使って半日程、つまりは二カ月程度だ
途中でだるくなって別の術式開発したりしたから遅くなった

だがまあ成功したので問題ない

エヴァは大喜びしていた

なんか子供を持つ親の気分、とか呟いたら跳び膝蹴りを喰らったが
そんなわけで、麻帆良の技術をちょこちょこパクっているいろいろやり

だしたら、ベツレヘムの星がテーマパークのようになってしまった
ボウリングや卓球場、ビリヤードに野球場などなど

ラウンド1か!!

しかも大浴場やゲームセンターまで作る始末

ちょっとやり過ぎた感があるな

まあ例によって後悔も反省もしていないが

そういえばエヴァの奴、人形を作りまくってついには食料を自給自
作するとか言い出しやがった

水は大量にあるし、ろ過装置もあるから水は大丈夫だが、食料は調
達しなければいけないと思ったら、

「いちいち調達に行くのが面倒くさい」「どうせ人形がやるから」
との理由で畑や田ができた

なんかベツレヘムの星がだんだんとエヴァの私有地になって行っ
てる気がする

そのうち追い出されたりしないだろうか

まあ追い出そうとしたらベツレヘムの星を落とすだけだが

そんな感じで夏休みの残りの日はベツレヘムの星を改造するために
使ってしまった

そういえば、エヴァが入りきれなくなったから、と言ってゲームや漫画類までここに置き始めた

本格的に引っ越しでもするつもりか、こいつ

まあ、卒業までは麻帆良に留まるんだろうが。

第二十一話 夏休みの終わり（後書き）

はい、ベツレヘムの星がテーマパークになってしまいました
流石に何も無いんじゃないかな、と思って友人にいろいろ聞いて
回ったところ

娯楽施設が多数あったので入れてみました
後悔はしていません

次回、そろそろ原作に突入すると思います
感想は常時募集中
では、また次回

第二十二話 天然のトラブルメーカー来る

第二十二話 天然のトラブルメーカー来る

はーい、俺でーす

さて、夏休みも終わり、それから先は特筆すべきような事は無かった
しいて言えば、ベツレヘムの星が本格的に自給自足できるようにな
り、もうここで生活していいんじゃない？
みたいな感じになった

エヴァ、お前やり過ぎだよ

刹那も千雨ちゃんもレベルでいえば魔法先生とかは圧倒できるだけ
の力を持つてるので、修行の時間を減らした
刹那はちょっと不満そうだったが、千雨ちゃんは「ネットができる
時間が増える！」って喜んでた

刹那、お前はもう月詠より強いと思うぞ
まあ京都で戦うときの、だが

そんなわけで特に事件も無かったので、冬に成り、年を越し、二月

に入って少し経った頃、
俺はジジイに呼びだされた

そんなわけで学園長室なう

「で、何の用だよ」

「うむ、実はナギの息子であるネギ君が、もうすぐこの学校に中等部教育実習生としてくるんじゃないが…」

「俺に何かあった場合の手助けをしろと？」

「そうじゃ、お主のかつての仲間の息子じゃろ。」

お主が適任じゃろって」

「やだね、何で俺がそんなことしなきゃならないんだ」
面倒くさい、そもそも俺はその双子の弟を殺したんだが

誰の記憶にも残って無いだろうけどな
機械類のデータは裏の世界のスゴ腕（自称、でも腕は確かだった）
ハッカーを雇って消去させてたし

「そんな事を言わず、手伝ってやってくれんかのう」

「クドイ、俺は俺のためにしか動かないんだよ」
それだけ言って部屋から出る

呼びだされたのは昼過ぎで、だるいのでのんびり準備してきたから、
もうすぐ夕方になるうとしている

授業が終わったのか、廊下には生徒が出ている

面倒なことになる前に帰ろうとしたら、

「おい、フィアンマ。

お前何しているんだ」

エヴァに話しかけられた

「何って、ジジイに呼びだされたんだよ」

「何かあったのか？」

「いや、ナギの息子がここの教育実習生としてくるから、サポートしてやってくれってさ。

もちろん蹴ったがな」

「そうか、ナギの息子がくるのか…」

「想い人の息子が見れてうれしいか？」

「違うわっ！！…それで、ナギの息子はいつ来るんだ？」

「知らん、もうすぐだって事は聞いたがな」

「ふーん、なら、ちょっとしたサプライズでも用意しておくか？」

そついや、呪いを解いたからネギの血を吸う必要ねえじゃん

桜通りの吸血鬼事件どうすんだろ

「そうだな、帰ってから考えとく」

「私もさっさと帰る。」

居残りをする意味など無いからな」

エヴァはそう言って教室へ戻っていった

そして俺も帰ろうとするが…

すげえ普通に目の前を何か横切った

良く見ると、あれってさよちゃんじゃね？

なんか一人でブツブツ呟いてる

折角なので、ちょっと縁を作って置こうと思って話しかける
そしたら、かなり驚かれた

「私の姿が見えるんですか！？いままでどんな霊媒師にも見えなかつたのに！！」

「まあね、俺はその辺の奴とは出来が違うから」
そついや龍宮と刹那も気付かなかつたんだっけ

俺は霊体とかそついうのは触る事も出来るしなあ
何故かって言われると分からないけど

成仏もせずによく残ってられたなあ

「まあ、偶に話し相手にはなってあげるよ」

「ホ、ホントですかあ〜！」
目に涙を浮かべてる。そんなに嬉しいのかよ

まあ六十年も誰にも気付かれず…って、たしかエヴァはさよちゃんの事知ってたはず
何が変わるってわけでもないけど

「じゃあ、私は夜は近くのコンビニとかに居るんで、偶にでいいですから話してください！」

「分かった、今日はもう帰るよ。
じゃあね」

そう言っただけで帰ることにした

あのまま話してたら、他の生徒におかしな目で見られそうな気がするし

〜数日後〜

突然だが、ネギが来たらしい

朝にジジイから連絡を受けた
俺は動かないって言ってんのに、何故電話したし

どうせ放課後になったらエヴァから聞くだろうしな

そんなわけで放課後

近くのカフェに俺、エヴァ、タカミチが集まった
タカミチは俺が呼んだ

「で、ナギ」の評価はどうなんだ？」

「ナギ」って、フィアンマさん、彼はネギですよ
タカミチは律儀に言い直させようとする

無駄だって分かってる筈なのにな

「で、エヴァ、どう思った？」

「無視ですか」
当然だろう

「そうだな、まず思ったのは…アレ本当にナギの息子か？って思っ
たな」

「それはどういう意味で？」

「天才と呼ばれているから、頭の方は悪くは無いらだろうが、どう
見てもあのバカの子とは思えん。
姿は似てると思うが、中身がまるで正反対だ」

「ふーん、面白くねえな。」

何ならナギみたいな性格の方が面白かったらうに」

「いや、それは困るだろう」

「そうですね、あの性格で授業なんてさせられませんよ」
お前何気に酷いね

だが、それには同感だ。面白いが、教職員は向いていない
トランプしかけてたら、仕掛けた奴をあぶりだして俺ならもつとす
ごいのを仕掛ける、とかいいそんな気がするわ

「しつつかし、十歳のガキに先生やらすたあね。脳味噌イカレてんじ
やねえの」

「メガ口元老院が何か仕掛けたんでしょうか？」

「それは無い、と言い切れないのがあいつ等だからな。

どうせ英雄の息子を自分たちの広告塔にでもするつもりなんだろ」
下らねえな、あんなガキにそんな価値があるとも思えない

だが、英雄の息子ってレツテルを張られてる以上、利用する事なん
ざいいくらでもできるからな

英雄の血縁者ってだけで敵対していた組織から狙われる可能性もあ
るが、

それ以上に利用価値はいくらでもある

「だがま、お前がいる以上はここに手出しするような事も無いだろ
する必要もないし、そもそもお前が居るからここに来させた可能性
も無いわけじゃない」

ネギの友人という立場で、なおかつ実力者でもあるタカミチが居る
以上、他の組織は下手に手出しが出来なくなるわけだし

守って広告塔にしたいあのクソジジイ共には丁度いい場所なんだろう
いざとなれば俺が皆殺しにしてもいいが

…原作終わってからだが。

下手な事は出来ないからな、折角の知識が役に立たなくなる

「そうですね、ですが、とりあえず危険に晒すような事が無いように
にしたいものです」

その行動を読んでるからこそここにあのガキを連れてきたんだろうな
お人よしだな、タカミチめ

「とりあえず、大体分かったし、これでお開きにするのでしょうか」

「「そうだな（ですね）」
と言って帰ることにした

家に帰って少ししたら、千雨ちゃんがちょっとピリピリしながらい
つも通り来た

別荘の中に入った後、

「なんで十歳のガキが先生なんだよ！！」とか「労働基準法違反だ
る！！」とかいうので、とりあえず説明したら収まった

「ふーん、あのガキが英雄の息子ね」

「ああ、そのためには一クラス三十一人の事なんざどうでもいいって事だ

あのガキを利用できれば、その程度の事はどうにでもなるって考えてんのさ」

「ふん、反吐が出る話だな」

「全くだよ」

そうは言っても、俺も自分のためなら他人がどうなるうと知ったことちや無いって考え方だからな

全世界を敵に回しても勝てる自信はあるが

話がずれた。閑話休題

「余計なことしなけりや関わることもしないだろ」

「だけど、あのガキ教室入る時に障壁張ってたぞ」

そっぴやそんなことあったね

秘匿のひの字も知らんガキを連れてくるのもおかしい話だが

ちよつとした事も「英雄の息子だから」で済ませられるような環境だったんだろっな

「…トラブルメーカーだな、近づかない事をお勧めする」

「…ああ、そうだな。あたしもそう思うよ」

それで話を終わりにし、軽く修行をして終わった

第二十二話 天然のトラブルメーカー来る（後書き）

はい、今回は雑談でした

ネギが出ていませんが気にしないでください

次回は桜通りの吸血鬼辺りまで書こうと思っています

感想は常時募集中

では、また次回

第二十三話 疑問とは後から湧いて出る物（前書き）

この小説も好評のようで良かったです

番外編を書こうと思つのですが、こういう話を書いて欲しい、というのが在ったら教えてください
考えてみますので

第二十三話 疑問とは後から湧いて出る物

第二十三話 疑問とは後から湧いて出る物

ども、俺です

さて、ネギが来てからおよそ二カ月程、これまでの事を報告しようと思う

大したことは無かったけどね

どうやったかというと、禁書の原作でシェリーが使ってたあの目玉っぽい物を作ってネギを監視した
どうせやることも無かったからね
ちなみに音も聞こえたよ

まず驚いたのがネギが来て一日目

あのバカ、惚れ薬作りやがった

や、原作知ってるから分かってはいたけど、実際見るとスゲー間抜けに見えるわ

アイツホントに魔法学校卒業できたの？

常識欠如しすぎじゃね？

とまあ、疑問はどんどん湧いて出るが、それはとりあえず置いとく
ちなみに惚れ薬は俺がスナイパーライフルを使って破壊した
作った直後に破壊されるって悲惨だよ

そしてその次の日

ネギが明日菜に連れられ風呂へ行ったらしい

実は術式を解いておくのを忘れて寝ていたため、それに気付いたエヴ
アと刹那にボコられた
スゲー痛かった

刹那め、神明流奥義を人に使うなよ…

エヴアも魔法で攻撃してきたときは流石に防いだ

アレはやばかったね。誤ったのに「うるさいうるさいうるさい！
！」とか言い出すんだもん
本気で殺されそうになった

さて、また次の日

朝っぱらから移動し始めたと思ったら、明日菜の新聞配達を箒で飛
んで配ろうとしやがった

アレは流石にあいた口がふさがらなかったね

だってアイツ認識阻害や人払いの結界張らずに空飛んでんだぜ？

一遍叩き落としてやるうかとも思ったがやめた

今はまだ接触すべきときじゃないし

またまた次の日

高等部の連中に喧嘩売られてた

あのガキ人気があんなー

別にどうだっていい事だが

更に次の日

ドッジボール対決をしていた

特筆すべき点はないが、一言だけいわせて貰おう

ネギ、お前本当に魔法学校主席か？

魔力のコントロール全然できて無かった

むしろ下手じゃね？って部類だと思う

更に数日後

期末試験が迫ってきた

エヴァも今年はちょっとやる気を出している
卒業できるようになったからかな

そしてまたネギ

お前いちばん最初に魔法に頼んな

しっかりと盗聴してるから分かる事だが、期末試験の事聞いた後直ぐに

「たしか、こーゆー時に効く魔法が何かあったよっな……」
とか言つてやがった

大丈夫か？こいつ

あれかな、頭はいいけど行動が間抜けな奴
クラスに一人はいるよね、そーゆー奴

明日菜の方がよっぽどいい事言つてた
詳しくは原作を読んでいただきたい

説明するだけの技量が作者に無いので

そしてその夜

図書館島に侵入した奴らがいた

まー原作通り進んでるといふ事で、いい事だろう

行動は客観的に見ると間抜け以外の何物でも無いが

ちなみに何故かまた刹那にボコられた

今回も何故ボコられたのか分からないので事情を聞く

なんでも、午前中にクラスの連中が野球拳しだしたらしい

そしてまた俺は術式を解かずに昼まで寝ていたのでそれを全部見ていた、ということらしいね

つてか刹那も脱がされてたのかよ

お前ホントに頭大丈夫か？

そして俺も上条張りに「不幸だ〜！！」と叫びたくなった

中学生相手にフラグなんて立ててもしょうがないが

そしてその次の日

授業中のハズ何だが、刹那から念話が来た

昨日の事はもう怒ってないようだ

「どーした、授業中じゃないのか？」

「いえ、ネギ先生が居ないので自習になっています。

それより、お嬢様は大丈夫でしょうか？」

そついやまだ帰ってきてないんだっけ

「大丈夫だろ。それよか刹那、お前ちょっと今日来い。千雨ちゃんも連れてな

用事がある。そんなとき木乃香ちゃんの事も教えてやるから」

「用事ですか？分かりました、ではまた放課後に」

そして放課後

千雨ちゃんを連れて刹那が来た

「それで、用事とは？」

「刹那、お前確かテストの順位下から数えた方が早かったよな」

「え！？何で知ってるんですか！？」

「ネギが持ってたのを見た」
術式を通して、だがな

「…それで、何であたしまで呼ばれてんだ？」

「まあせっかくだし、テストの為の勉強会をしようと思ってね
別荘使えば時間は増えるわけだし」

「そうだな、丁度いいし、あたしも勉強させて貰おう」

「え？私はそれよりお嬢様の事が…」

「ああ、アレ？アレはジジイが用意した勉強合宿だから心配ないよ」

「そ、そうですか…」

「よし、じゃ、勉強しようか刹那」

「え、えっと。できれば遠慮したい…」

「駄目、拒否権なし」

そう言っつて別荘に連れ込む

最近の修行はエヴァの別荘を使つてたからな
俺の別荘を使うのは久しぶりだ

そしてみっちり勉強させて帰した

刹那は帰る時千鳥足だったが、其処までつらかったのか？勉強

ちなみに問題集とか解かせた

中学校レベルなら俺でも教えられるしね

そしてまたまた次の日

とりあえず全員無事に帰ってきたらしい

あの変態も居るから大丈夫だったろうけどな
ロリコン

しかし、またネギだ

アイツ魔法の射手を生徒の目の前で使おうとしやがった
いやしかし、命の危険があると判断したならしょうがないかな
ジジイはまともにビビってたが

更に次の日

そして原作通り学年一位になった
多少なり平均点数が上がってたのは俺が介入した所為か

余計なことしたかな
どうせほっといても一位は取ってたわけだし

最近俺の方針がずれて行ってる気がする

…大筋は原作通りに進めば大丈夫かな
どちらにせよ、刹那と千雨ちゃんに接触してる時点で原作に介入し
てるようなもんだし

とりあえずは原作通りに進めさせる事が目標かな

更に数日後

春休みになった、エヴァは「ゲームが出来る」といい、千雨ちゃん
は「ネットが出来る」という
この二人、大丈夫だろうか

千雨ちゃんがネットアイドルをやっているという事はバレなかった
まあこの程度なら大丈夫だろ

ちなみに木乃香ちゃんがお見合いさせられそうになってるって刹那
に伝えたら

険しい表情して「学園長に会ってきます」って出て行った

アイツ大丈夫か？

本気で百合じゃあるまいな

それはそれで面白そうだが

そして、春休みになった時点である噂を流し始めた
麻帆良って簡単に噂が広まって楽でいいわ

もちろん、桜通りの吸血鬼事件だ

ちなみにジジイにはちゃんと認めさせてる
ジジイも「ネギ君の成長につながりそうじゃからな」といって認めた

軽く吸血して桜通りに寝かせるという事もした

風邪引かない様にそこだけ局地的に気温上げたりしている

もう春だが、まだ夜は肌寒いからな

さてさて、ネギ坊主は気付くかな？

気付いてくれないと困るけど

第二十三話 疑問とは後から湧いて出る物（後書き）

はい、ネギが来てから二か月ほどの事でした
相変わらず進むのが速い速い

介入しないって事はかなり早く進むんですよ

次回、桜通りの吸血鬼事件です

感想は常時募集中

では、また次回

第二十四話 茶番劇

第二十四話 茶番劇

どもー、俺ですー

さて、ネギの奴、わざわざ魔力の残り香まで残しておいたから流石に気付いたらしい
明らかに顔色が変わってたし

といっても、昼間は何もできないだろうけど。

図書館探検部の奴らに噂を流させた
方法はいくらでもあるしね

噂の内容は、満月の夜には寮の桜並木に吸血鬼が出るというもので、これを聞いたときにネギはまた何か考え事をしていた

そして夜

俺、刹那、千雨ちゃんとはある建物の屋上で待機している

そして、エヴァが誰かを襲おうとしているのを双眼鏡で眺めていた

「…暇だなー」

「それより、あたしはこの状況に突っ込んだ方がいいのか？」
まー、魔法や魔術を駆使してやった事が噂の流布だしねえ

「別に問題無いんじゃないか？それより、この計画って実質俺何もやる事無いんだよね」

「計画を立てたのはフィアンマさんじゃないですか」

「そーだけどさ、計画立ててるときは楽しかったんだが。
旅行に行く前の『どこ回るー？』とか、そーいう感覚なんだよね
要は、計画って立ててる時が楽しいよねって話だけど

…あ、来た」

双眼鏡で辺りを見ていた俺は念話でエヴァに指示を出す

(アレは確か宮崎だったな。エヴァ、作戦実行だ)

(わかった、せいぜい楽しませて貰うよ)

エヴァがたまたま通った宮崎を襲おうとしてネギが現れた

会話もしっかり盗聴している

「コラー！ぼ、僕の生徒に一体何をすかーっ！！」
おいおい、アイツ箒でしっかり空飛んでるぞ。

宮崎が気絶しているからいいものを、気付かれるという事に危機感が無いのかねえ

「魔法の射手・戒めの風矢！！」

「もう気付いたか。氷楯」

ネギの捕縛魔法をエヴァが障壁で防ぐ

余波で帽子が飛んで行ってしまったが、別段問題は無い

「ほう。流石はサウザンドマスターの息子というだけのことはあるか」

魔法を使うときの魔力量や使い方から率直に意見を述べる

まあ、あのバカは魔力を込めすぎてるだけなんだが

それは今は関係ないのでとりあえず置いとく

ネギはかなり驚いていた

無理もないな、桜通りの吸血鬼事件の犯人が自分の生徒で、他の生徒を襲ってるわけだし

しかも魔法使い

それに自分の父親を知っているのでは？という疑問
いろんな思いが頭の中で渦巻いているだろう

「吸血鬼VS見習い魔法使いか、売れない映画の題名タイトルみたいだな」
ぼそりと呟く

「実際には唯の茶番劇だけだな」

千雨ちゃんが律儀に返してくれた

それはともかく、続きだ

「何者なんですかあなたは！」

魔法使いなのに、魔法をこんな事に使うなんて」

魔法使いなのに、か

どうやらあのガキは魔法使いはみんな善人だと思ってるらしい

唯の道具を使ってる人間をみんな善人だと言ってるようなものなんだがな

「この世には、良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ぼーや」

エヴァがネギに向かって武装解除の魔法を放つ。

ネギは咄嗟に手を前に突き出し、武装解除を抵抗した。レジスト

しかし、エヴァが魔力を込め過ぎたのかネギの突き出した腕の袖が碎け散った。

そして宮崎の服が破ける

それに対して「ヒュウ〜」と口笛を吹くと、いきなり脳天を何かで叩かれた

また刹那だよ、しかも千雨ちゃん付き

千雨ちゃんが出したのか、二人の手には木刀があった

流石にヤバいのでとりあえず逃げる

逃げながらエヴァの様子を見ているが。

そして乱入者が現れる

「何や、今の音」

「ネギ、どうしたの!？」

それは二回、魔法が衝突する音を聞き付けた近衛木乃香と神楽坂明日菜だった。

一般人である神楽坂明日菜が乱入したことにより、場所を移す為此の場を離れるエヴァ。

それを追って場所を変える俺、そしてそれを追う刹那と千雨ちゃん

(いい加減あきらめろよ! ってか俺が何したよ! !)

叫ぶとネギたちにバレそうだったので念話で話しかける

(お前が宮崎の裸を見ない様にするためだよ! !)

(そうです! ! 唯でさえこの間の事とかもあるんですから! !)

め、メンドクセエ…、瞬間移動しても仮契約カードで場所バレんだよな。 どうしよ

とりあえずダッシュで逃げつつエヴァの様子をみる

「奴のことが知りたいんだろ? 私に勝てたら教えてやるよ」と言いつつ逃がっている

予定通りに進んでいるな

後ろの二人は予定外だが、どうしようもない

後ろの二人を説得しつつ逃げるという事をやって、エヴァの方に目を戻す
いくつかタンコブが出来ているが、気にしない方向で。

空中で戦闘を繰り返していた二人は八階建ての校舎の屋上に降りていた。

何やら会話しているようだが、さっきの追いかけて盗聴用の術式を解除してしまっていたらしく
見えても聞こえない状態になってしまった

そして茶々丸が現れ、魔法を唱えようとしているネギにデコピンをくらわせている

茶々丸は杖を取り上げ、腕を首に回し持ち上げている

「そろそろ潮時かな…」

「そうですね、もうこれ以上はやる意味が無いでしょう」
まだ顔を赤くしているが、刹那が返答する

そして、エヴァがネギの血を飲もうとかがみつくと、明日菜が現れた

「コラー！…この変質者共！…ウチの居候に何やってんのよ
ー！！」
と叫んでエヴァを蹴っていた

明日菜、お前声でか過ぎ。仮にも一国の王女だったのにな

まあ今は全く関係ないが

「はあ！何でエヴァの障壁が破られてんだよ！！」
千雨ちゃんがビツクリしている

そりゃ自分の攻撃がほとんど通らない相手に蹴りをくらわせたらビツクリするか

「アレは魔法無効化能力だな。珍しい能力だよ」
マジックキャンセル

「なぜ明日菜さんがその能力を持っているのでしょうか？」

「さあな、さて、この茶番劇も終わりだ
帰ろうか」

そうやって俺はエヴァに念話をする

(エヴァ、そろそろ退くぞ。今日はこのくらいで十分だ)

(分かった、それと、神楽坂明日菜についても調べておく必要がありそうだぞ)

(分かってる。とりあえず離脱して来い)
そうやって念話を切る

エヴァは屋根から飛び降りて帰ろうとしていた

俺は二人を寮に送り、エヴァの家に帰った

最後にネギを見たら、泣きながら明日菜に抱きついていた
あのガキにはちょっとショックがでかかったらしい

…しかし、ホントにナギの息子が疑うような性格だな

そして、エヴァの家に帰る

「まったく、どうなっているんだ！神楽坂明日菜がこの私に蹴りを
くらわせるなどー!!」

エヴァが激昂状態だった

「落ち着けよ、エヴァ。茶々丸、とりあえずお茶注いでくれる?」

「はい、直ぐに持ってきますので
そう言っただけで台所に行った

茶々丸は直ぐにお茶を持ってきた
俺はそれを飲みながら話す

「明日菜のアレは魔法無効化能力だな。
かなり珍しい能力の保持者らしい」
本当の理由は話す必要は無いだろう

そして次の日

ネギは朝からエヴァを恐れて登校拒否しているようだ

エヴァは学校には行ったがサボっているらしい
俺もやる事が無いのでまた寝る

寝ていると、エヴァから連絡があった

(何だ？なんかあったのか？)

(学園結界を超えた者が居るらしい)

ジジイがついでにお前にも連絡しろと言っていたんでな
ついでかよ、まあ、其処は重要じゃない

(こんな朝っぱらからか。ご苦労なこつた)

(まったくだ、おかげでこちらもいい迷惑だ)

(それで、探し出せばいいのか？)

(いや、搜索自体はすでに行っているらしいが、一応気にかけておく
程度でいいらしい)

…ならなぜ連絡させたし、ジジイよ

(そーかい、じゃあ俺はまた寝るとしよう)

(…お前最近私より酷い状態じゃないか？)

(気に済んな。それじゃ)

そう言っただけで話を切る

そついや監視術式起動させっぱなしだったと思い、確認する

ネギが逆セクハラをされていた

ヤバい、また刹那と千雨ちゃんにボコられる。と思い、直ぐに術式を解除しようとする

突然何かが横切った

ネギの視点なので良く分からないが、一瞬映ったアレはおそらくオコジョだろう

という事は、アルベールとか言うオコジョが侵入してきた訳か

そして術式を解除するが、たぶんもう遅いかなあ

千雨ちゃんにボコられる覚悟をしておかないと

そして夕方

エヴァが帰ってきた

「お帰り。そういや、侵入者の件だが、あれオコジョだぜ」

「ただいま。オコジョ？何のために侵入してきたんだ？」

「ネギの助言をしに来たらしい」

そしてまた術式を使い、ネギを写す

其処にはネギと会話しているオコジヨの姿があった

「なるほど、こいつか」

「助言者と言ってもウェールズで女性の下着を盗んで逃げてきたオコジヨだが」

「ハハハハ、とんだ助言者だな」

「まったくだ、だが、一応気をつけておくことだな
助言者がこんなのも、何が起こるか分からんものだ」

「そうか、それもそうだな
留意しておく」

そして、少しするとまた千雨ちゃんが来た

またボコられての理由説明

学習能力が無いといわれてしまった

あいつにこういうイベントがあると俺が被害を受けるのか、今度から気をつけることにする

それ以上にこういうイベントが無い事を祈る

原作通り進んでるか確かめるための監視なのに、俺がボコられてちや意味が無い

またまた次の日

あの小動物、ネギと宮崎を仮契約させようとしてやがった

俺には何の関係も無い事だが

更に次の日

ネギが明日菜と仮契約したらしい

茶々丸が襲われる事は分かっていたので、取りあえず目立たない様に茶々丸を尾行しているネギたちを尾行する

そしてこの状況だ

「茶々丸さん、僕を襲うのをやめていただけませんか？」

「…申し訳ありません、マスターの命令は絶対ですので」

「仕方ありません
行きます

契約執行10秒、ネギの従者・神楽坂アスナ！」

そしてデコピン合戦をする明日菜と茶々丸。平和的だなお前ら

しかもまただよネギの野郎

認識障害も人払いも張らずに魔法使ってやがる

俺が張るとばれる可能性もあるし、そもそも助ける義理も無いので
ほっておく

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

「光の精霊11柱、集い来りて敵を射て！」

魔法の射手・連弾・光の11矢!!」

魔法の射手が茶々丸に飛んで行く

そしてネギは当たる直前になって魔法の射手を戻す

「わー！」と情けない声を出しているが、こういう場面を見ると
原作通りに進んでいるという事が分かって安心できる

茶々丸が飛んで行くのを確認して、俺もエヴァの家に帰った

そしてさらに次の日

ネギがどっかに飛んで行った

行く場所は分かってるので、どうせ暇だし、と思って出かけること
にする

山奥で長瀬と魚や山菜を採っていた

適当な木の上で気配を消さずに見張る

初めてモノホンの忍者を見たよ、俺

俺はローブから食料を取り出して食っていたので、動かず見張っていた

夜になり、露天風呂に入っていた。

流石にアレだったので帰ったが、また戻ってきた

そしてネギが寝たので、俺も帰ろうとしていると、長瀬が瞬動で近づいてきた

俺は直ぐにローブと仮面をつけて待つ

「何者でござるか？」

「あちゃー、ばれちゃったか」

「何を白々しい事を、わざわざ拙者に分かるように気配を消さなかつたくせに、でござるか？」

「あ、やっぱ分かってた？…そう身構えるなよ、攻撃するつもりなんて無いからさ」

俺の態度も変装か何かのためだと思っただらしく、いつでも攻撃できるように構えている

「…では、何が目的でござるか？」

「んー、目的ね。あのガキの見張り、かな」

「何のためにそんな事をしたのでござるか？」

「そーだな、それは言えない。
とりあえず俺帰るから、あのガキに俺の事を話さないでくれると助かる」

それだけ言っつて瞬間移動で家に帰った

とりあえずは大丈夫、かな

第二十四話 茶番劇（後書き）

はい、一回目の戦闘から長瀬との一日でした

フィアンマには上条と同じ体質でも付いているんじゃないでしょうか

次回、停電です

感想は常時募集中

では、また次回

第二十五話 麻帆良の停電

第二十五話 麻帆良の停電

楓と出会った次の日

エヴァはいつも通り学校へ行った

俺はジジイと電話している

「朝っぱらから何の用だ？」

「うむ、実はお主の正体が他の魔法先生達にバレそうなんじゃが」

「…あれ、まだバレて無かったの？」

エヴァの呪い解いたりしてからもう一年以上経つぜ？」

「それはお主がエヴァの家に強力な結界張った上に、気付かれない様に探ろうとしてもお主さっさと逃げるからじゃろ」

「自分が住んでるところに防御用の結界張るのは当然だろう。」

しかも気付かれない様になって、簡単に感知出来たんだが。大丈夫か？この魔法先生」

「じゃからお主の基準で凶るでない、お主と比べれば誰だってレベルが低く見えるわい」

「そうかい、それで、誰にバレそうなんだ
経緯を教えてください」

「うむ、お主の正体を探っておったのはガンドルフィーニ先生、高
音君、佐倉君などじゃ」

『立派な魔法使い』を指してる連中か、よくもまあこんな事に時
間裂いてる暇があるよな

「それで、彼らは一年前にエヴァンジェリンの呪いが解けた時もわ
しのところに来たんじゃが、

その時はエヴァが少なくとも卒業するまではここでおとなしくする
ことを保障しての事だったんじゃ」

「なるほど、それでエヴァがネギを襲った事で、エヴァへの反発と
呪いを解いた謎の人物に焦点が行った訳か

だが、それについてはあんたの許可を取っただろう」

「そうじゃ、元々エヴァがここに居る事にも反対していた者もある
し、それも相まって『過激派』が大きく膨れ上がったんじゃ

それでもエヴァがネギ君を襲う事はネギ君を成長させるため、と話
したのじゃが」

「魔力が戻っている以上、殺さない保証は無い、か」

「うむ、ここまで面倒な事になっている以上、お主の名前を出した
方が手っ取り早く事が収まるじゃろうて」

「なるほどね、そりゃ確かに面倒だ。」

…いいぜ、どうせもう姿隠しても意味が無い。こっちの用事はもうほとんど終わってるんだ」

元々千雨ちゃんの修行のために俺一人で仕事を請け負っていたわけだし、千雨ちゃんがここまで成長している以上、もう実戦経験のため等の理由で連れ出す意味も無いだろ

「そうか、ありがたい。」

では今夜十時に世界樹前広場へ来てくれ」

「分かった、忘れない様にしよう」

そう言って電話を切る

まったく、面倒なことにならなきゃいいが

夕方になり、エヴァが帰ってきた

なんでも、ネギから果たし状を受け取ったらしい

つくづく俺と会う機会がねえな

別に会う必要もないが

エヴァに朝の件を話すと

「ふん、面倒くさい事になったのは自業自得だろう。」

お前が自分の名前を出せば一年前の時点でこの事は終わっていただろつに」

「もっともだ。だが、千雨ちゃんの修行のためにはあいつ等は丁度良かったからな」

「まあそうだな、あの程度の連中なら修行には持ってこいだろつそれで、いつ行くんだ？」

「十時だ、お前も来る？」

「…そうだな、どうせやることも無い。暇つぶしには丁度いいだろう」

「じゃ、準備しろ。もう十時前だ、そろそろ行くぞ。そうやってロープをはおってエヴァを待つ」

エヴァの準備が出来た時点で瞬間移動で世界樹広場まで移動する

案の定全員が…いや、ジジイとタカミチ以外か…が、驚いていた

「丁度来たようじゃの。」

それでは自己紹介してもらおうかの」

「フィアンマだ、以後よろしく」

「彼はタカミチ君と同じ紅き翼に所属しておった人物じゃ。」

そして、エヴァの呪いを解いた張本人じゃ」

俺を事件の犯人呼ばわりするなつての

まあ、呪いを解いた犯人俺だけど

「あれが『魔の腕』の…」「あまり鍛えているようには見えないが…」「魔力も気も特に多いわけじゃなさそうだぞ…」
などといった声が聞こえる

ホント噂好きだね、こういう連中

「英雄のあなたが何故エヴァンジェリンの呪いを解いたのですか？
ガンドルフイーニが話しかけてくる

「一つ聞くが、お前はエヴァとナギの約束を知っているか？」

「いいえ、知りませんが…それが何か？」

「この約束つてのはな、『三年たったら呪いを解きに来る』という
ものだ。

エヴァはもう十年以上ここに居る、だつたら呪いを解いても問題ないだろう」

「ですが、悪の魔法使いですよ。

これから何か悪事を働かないとも限りません」

ヤバい、エヴァがかなりイライラし始めた
暴れるなよ、頼むから

「それなら大丈夫だ。俺がこいつの面倒みるから。
これなら問題ないだろう」

「…それでも、立派な魔法使いであるあなたなら、封印していた方

が楽でしょう?」

「一つ言っておこう、俺は『立派な魔法使い』じゃ無い」

「何を言ってるんですか。」

前大戦を終わらせ、そのあと紛争地域を回って紛争を止めていたあなたが立派な魔法使いじゃないわけ無いでしょう」

「前大戦を終わらせたのはナギだ、俺はただ敵を皆殺しにしただけさそれに紛争地域を回って紛争を止めていたと言ったが、どうやって止めたと思う?」

「それはもちろん話し合いで…」

「残念、俺はそんな回りくどい事はしない。争いを止める最も簡単な方法が何か分かるか?」

「…いいえ、分かりませんが…」

「皆殺しさ、要は争いをしている連中全員を殺してしまえばいい」
周りで息をのむ音が聞こえる

「それも、紛争を止めるために戦ったわけじゃない。
俺自身の力の実験台として紛争していた連中を選んだだけだ」
ま、それで結果的に助かった連中もいるがな。と付け加えて話し終わる

「…それでも、彼女の魔力が戻っている以上、ネギ君を殺さないという保証はありませんよ」

「俺が見張ると言っているだろう。」

戦友のガキを見殺しにするほど、俺は落ちぶれちゃいないさ。」

これedyouやくガンドルフィーニは「それなら…」と引き下がった

「これで終わりか？」

「そうじゃの、これからは正式に雇う事になる」

「…ちよつと待つてください、』正式に』ってどづいつ事ですか？」
ガンドルフィーニが聞き返す

「何だ、話して無いのか？」

「すっかり忘れておつたのじゃ、勘弁してくれ」

「さてお前ら、今までに敵の数が多いから引けつて言われた事がある
るだろ。」

その時に後始末していたのが俺だ。他に質問は？」

「あなたの實力を見せてもらえませんか？」

「そうじゃな、折角じゃし、模擬戦でもやつてもらおうかの」

「俺の實力なら大体の奴が知ってるだろ、一回侵入したときに戦闘
したし」

そう言つて仮面を見せる

これ以上ここに居ても収穫は無いと判断する

俺は返事を聞かずに

「じゃあな」とだけ言って帰った

次の日、午前中は特に何も無く過ごした

そして夜

今日は刹那と千雨ちゃんは来ていない
この間のような事にならないためにな

ネギに戦闘をさせる為に俺がメッセージを伝える事になった
ローブを着て、仮面をかぶり、俺が誰か分からない様にする

元々俺の事は知らんだろうけど

佐々木達を半吸血鬼化させて操る案は却下した、流石にこれやると
庇いきれん

魔力を完全に取り戻すために停電時の学園結界予備電源を落とし、
ダウンさせたのを確認してからネギの前に現れる

ダンッ！とネギの前に着地し、話しかける

「ネギ・スプリングフィールドだな？」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがお前に戦いを申し込む
逃げるようならこの寮に居る人間を全員殺す

殺されたくなければ大浴場に来い」

これだけ言えばすっぱかす事は無いと思っ
ている付け加えておいた

それだけ言っ
てとっとと帰ろうとする

「ま、待って
ください！あなたは誰ですか！？」

「い
ずれ分かる、今は教える必要は無い」

それだけ言っ
て虚空瞬動で大浴場へ移動する

…そう
いえば、今が俺とネギの初コンタクトじゃん
つまんねーな、これ

まあ
いいや、まずは戦いを楽しませて貰おう

と、思っ
ていたんだが、なんだこの状況は

「お前
ら、確か昨日会ったよな？」

「はい、
高音・D・グッドマンと申します。こちらは佐倉愛衣と夏
目 萌 です。」

あなた
は自分の事を英雄だと言いましたが、前回戦闘した時も逃げ
てばかりで攻撃をしていませんでしたよね？

英雄を
語る事なんて誰でも出来ますし、あなたの実力は未知数なの
で、一度手合わせを願います」

面倒な
ことになったな

昨日の
夜模擬戦しなかったから今日戦闘する羽目になっちまった

高音が戦闘モードだし、ここで引いても後々再戦しに来そうだしな
ここで叩き潰しておこう

「…いいだろう、相手をしてやる」

「では…『黒衣の夜想曲』!!!」
巨大な黒衣仮面の使い魔が背後に現れる

「メイプル・ネイプル・アラモード!」

「ラブ・チャプ・ラ・チャップ・ラグプウル!」

「魔法の射手・連弾・火の31矢!」

「魔法の射手・連弾・水の31矢!」

火と水の魔法の射手が俺に襲いかかる

高音が多数の影を使って槍の連続攻撃を繰り返す

俺は聖なる右を発動し、それらの攻撃全てを相殺する

高音達が驚いているが、気にすることなくもう一度右腕を振るい、
気絶させる

どうしようかと悩むが、近くにタカミチが見張っているのに気付き、
呼び出す

「…タカミチ、隠れてないで出て来い」

「ばれてましたか」

「俺から隠れられると思うなよ、それよりこいつらどうにかしろ」
高音は『黒衣の夜想曲』が解けて裸だ

この場にあの二人が居たら俺はまたボコられていただろう

その他二人は気絶させただけで外傷は無い

俺は早くエヴァとネギの戦闘を見たいと、そのままタカミチに任せ
てダッシュで橋へと向かう

橋では丁度ネギと明日菜が仮契約したところだった

俺は手出しせずにそのまま見ていた

実際、呪いは解いてるからどこで戦おうと一緒にだし、麻帆良の外に
出れば魔力は抑える結果も無いんだが
教えると原作通りに進まなそうなので黙っておいた

「行きます

ラス・テル・マ・スキル・マギステル

風の精霊17柱、集い来りて…」

「ハハハ、なんだその可愛い杖は！

魔法の射手・連弾・氷の17矢！」

「魔法の射手・連弾・雷の17矢！」

ドオオオン

「雷も使えるとはな！」

だが詠唱に時間がかかりすぎだぞ！

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊29柱！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、光の精霊29柱！」

「魔法の射手・連弾・闇の29矢！！！」

「魔法の射手・連弾・光の29矢！！！」

ふむ、これだけやれりゃ上等かな。原作通り進んでるし、これなら問題ないだろう

「雷の暴風！」

「闇の吹雪！」

お互いの魔力の奔流がぶつかり合う。これで最後だったはずだ

「マスター、結界の復旧が予想より早いです！」

だが、呪いを解いているから魔力が半分程度までしか抑え込まれていない

このままならネギの負けだな

「ハ、ハクシヨン！」

：魔力が暴走して威力が跳ね上がったのか、なんともまあ都合のいいことだな

エヴァの服は破けているが、魔力が残っているので落ちる事は無かった

俺は姿を現す必要は無いと考え、そのまま帰ることにした

第二十五話 麻帆良の停電（後書き）

はい、エヴァ対ネギでした

文章がだんだんと下手になっている気がします
どうにかしてうまく書けないものでしょうか

次回、修学旅行の辺りです

感想は常時募集中

では、また次回

第二十六話 護衛というのは要は引率の先生

第二十六話 護衛というのは要は引率の先生

エヴァは学校へ行き、俺は特にやる事が無い

暇なので適当な術式でも作ろうかなあ、とか思ったりしてる

そして行動を起こした

術式を作ろうと別荘にこもる

そしてとある術式を作り上げる

まだ未完成だがな

何を作ったかは秘密だ
完成してないし

そろそろ昼か、と思っただくらいの時間に外に出る

案の定十二時前だった

適当なカフェにでも行くこうと思い、出かける

そしてカフェで適当に注文し、席を探しているとエヴァと会った

「…何しているんだ？」

「昼飯食いに来たんだが、何か問題でも？」

「いや、別に問題は無いが、珍しいな」

「そうでもないと思うが、エヴァと会わなかっただけで結構な頻度で来てるぜ」

「ふーん、そうなのか」

などと雑談しながら席を探す

あいている席に座ろうとすると

「あ…」

「ぬ…」

ネギと会った

「こ、こんにちは、エヴァンジェリンさん」

「ふん、貴様と気安く挨拶を交わす仲間になったつもりは無いぞ」

「こんにちは、ネギ先生、明日菜さん」

「ところで、そちらの方は…」

「あ、はじめましてかな。」

俺はフィアンマ、エヴァの家に居候している」

「あ、僕はネギ・スプリングフィールドです。」

エヴァンジェリンさんの家に居候してることとは、魔法関係者で

すか？」

「まあな、一応関係者だ」

「そうですか：あ、そう言えばエヴァンジェリンさん、僕が勝つたら父さんの情報を教えてくれる約束でしたよね」

「：そうだったな、だが奴は十年前に死んだといわれているが…」

「実は、僕は六年前に父さんに会ったことがあるんですが…」

（おい、実際のところはどうかなんだフィアンマ）

エヴァがいきなり念話で話しかけて来た

（前にも言ったと思うが、生きてるよ。そこだけは保証できる
それ以外は分からんけどな）

（それだけ分かれば十分だろう）

（俺を死亡扱いしても信用する奴はいないだろうがな）

（当然だろう、お前は殺しても死なないといわれてるぞ）

（酷いな、身体能力は高いし聖なる右を使えて不老ではあるが、死
なないわけじゃないぞ）

（十分死なない要素たっぷりだバカ、それに不老だと？それは初耳
だぞ）

(あれ、言っでなかつたっけ)

(ああ、聞いた事無いな)

(まあぶつちやけ、俺神様ですつて感じで納得してくれ)

(出来るか!!ちゃんと話せ、お前は人間なのに何故不老なんだ)

(え、後で話すから今はとりあえずネギの話聞こうぜ)

(絶対だな、ちゃんと話せよ)

(分かつてるよ)

「でも、この杖以外に手がかりが無いんですよ……」

ネギの話は終わったが、話を半分どころか最初と最後しか聞いてなかつたんだが

「京都だな。京都に行ってみるといい

あそこに奴が一時期使っていた家が在る筈だ

探してみれば、何か手掛かりがつかめるかも知れんぞ」

そう言つとネギは喜んでいた

そのままネギは浮かればなしだったがあほつといて俺は帰った

そして夕方になり、特にやることも無くだらけていた俺はまたジジイに呼び出された

今度は学園長室まで来てほしいといっているので、面倒だったがわざわざ行ってやった

そんなわけで学園長室なう

「それで、今度は何の用だ」

「うむ、実は、修学旅行で京都に行くという事は知っておるかの？」

「ああ、今年はエヴァも旅行に行けるってんではしゃいでたな」

「そうか、それで用事の事じゃが、木乃香の護衛をしてほしい」

「いいよ」

「…えらくあっさり了承してくれたの」

「あの子はまだこつち側じゃ無いんだろ。」

詠春も甘いな、ナギを上回る魔力の保持者なんて狙われるのは分かり切っていただろうに」

「フオツフオツ、婿殿にも何か考えがあるんじゃないやろって」

「だが、護衛するのは口実だろう」

エヴァが行く以上俺が見張る必要性も在る」

「…何じゃ、分かっておったのか」

「其処まで頭の回転悪くねえよ。」

この前俺が面倒をみるって言っちまったしな。それに護衛なら刹那がいる」

「それなら話は早い…」

話していると突然のノック

「失礼します…あれ、フィアンマさん。どうしたんですか?」

「や、ネギ君、俺も学園長に呼ばれてね」

「そうですか。それで、学園長、用事とは?」

「うむ、実は…」

「ええー！ー！！」

修学旅行の京都市行きは中止ー!?!?」

「うむ、まだ中止と決まっておらんが

ううむ、何と説明してよいやら

日本にはワシが治めること、関東魔法協会と、京都にワシの義理の息子が治めている関西呪術協会があるんじゃないが」

「そうなんですか」

「その二つの協会は仲が悪いんじゃない

それで、先方が魔法先生がいると言ったら難色を示してのう…」

「僕としてはもうケンカ等せずに仲良くしたいんじや

そこで君には、この親書を持って向こうの長に渡して貰いたい
ただし途中で連中による妨害あるかもしれんが、それでもやるか
な」

「ハイ！分かりました、やらせてください！」

「そして、補佐としてフィアンマ君にも付いて行ってもらおうからの」

「オイコラジジイ、其処はまだ了承してねえぞ」

「なんじゃ、木乃香の護衛は了承したじゃろうに」

「それとこれは話が別だ。木乃香ちゃんの護衛はするが何で補佐って仕事まで押し付けられてんだ」

「いいじゃる補佐くらい。」

何か厄介な事になるわけじゃないんじやし」

厄介なことになるから嫌なんだが

「極秘で入らねえと駄目だろ、魔法先生一人で難色示すような奴ら
だぞ」

「…そうじゃな、ではネギ君、何かあつたら彼に頼るといい。
それと、孫の木乃香の事じゃが、

「アレは親の方針でな、魔法の事はなるべくバレン様にしてくれ」

「分かりました！任せてください、学園長！」

そう言って出て行った

「まったく、どさくさにまぎれて余計な仕事まで押し付けようとしてやがって」

「そう言つでない、彼一人では何かと荷が重いじゃろう」

「まあ、魔法関係の事について相談できる相手がいるってだけでも大分違うもんだからな」

「そういう事じゃ、それじゃよろしく頼むぞい」

「ああ。」

……そうだ、忘れるところだった」

「なんじゃ？」

「今回俺も動くから」

「それは護衛以外でかの？」

「もちろん、そろそろ詠春の為にも老害を排除してやらなきゃな
そういう名目だが、新しい術式を試したいだけだな

「…それで、どうするつもりじゃ？」

「流石に片方の陣営を皆殺しとかはやめてくれ」

失敬な、俺が全部皆殺しで片付けてるみたいない方じゃないか
事実だけど。零崎一賊がいたら仲良くなれそうだ

「流石に皆殺しにするつもりは無い、ちょっと『過激派』に対して
煽ってやるだけさ」

それで計画通りに動くなら楽なんだがな

「ま、うまくいくと思っぜ。

ちゃんと後始末までしておいてやるよ」

そう言っただけ

帰った後、エヴァに質問攻めにされたがのらりくらりと避けた

俺も京都に行くことになったっつたらえらく驚いてたが

何故驚く、俺が行っちゃおかしいのか

そして修学旅行前日の夜中まで日本全国の関西呪術協会の連中にな
いしてちよっとした煽りをかけてきた

これについては後々話すとする

全く、我ながら面倒な事をしたものだ、と思う

原作には関係ないが、おそらく何かしらのアクシデントは起るだ
ろう

俺の目的は特に無い、強いて言うなら暇つぶしといったところか

暇つぶしで一つの組織の半数近くが削られるってどうなんだろうな

第二十六話 護衛というのは要は引率の先生（後書き）

はい、今回は修学旅行前までの話でした

長かったので半分にしたんですが、そしたら短くなったので、もう少し付けたして投稿したいと思います

次回、修学旅行編開始です

感想は常時募集中

では、また次回

第二十七話 はしゃぎ過ぎるとロクな事が無い

第二十七話 はしゃぎ過ぎるとロクな事が無い

そんなわけで修学旅行当日

駅にて質問攻めにあっている

「何でフィアンマさんがいるんですか？」

「木乃香ちゃんの護衛、という名目でエヴァの見張り」

「は？どういう事だよ？」

「護衛なら刹那がいるが、他の魔法先生達がエヴァが麻帆良から出るのを駄目って言うてる奴らがいてな、
それで俺が見張ればいいだろって話になったんだ」

「なるほど、近衛の護衛は桜咲もいるし、その名目だと怪しまれな
いってわけか」

「だがまあ本人に話してる時点で見張りの意味が無いんだが。
問題無いだろ、エヴァも修学旅行を楽しみにしてたし、連れて行か
なかつたら暴れそうだし」

「ずいぶんと気にかけてるんだな」

「そりゃ家主だし、これから先も付き合っていくことになりそうだしな」

「え？どういう事ですか？」

「それについてはまた今度詳しく話す、それと、お前ら二人は今回俺の許可なくアーティファクトを使うなよ」

「何でだ？」

「え？魔法関係者つてばれたくないんだろ？」

「それはそうだが、桜咲は関係ないか？」

「修行のためだよ、アーティファクトつてのは使う人間の能力を上げる事が出来るからな」

「そんなものですか」

「まあ、今は京都旅行を楽しめ」

「お前は行った事があるのか？」

「一回だけな」

「ほう、ならば案内して貰おうじゃないか」

「オイコラ、案内させるなら刹那の方がいいだろ、地元民だし」

「構いませんが、私はお嬢様の護衛をしなくてはならないのですが」

…」

「そうだったな、まあ向こうについてから考えればいいだろ」

そういつて新幹線に乗り込む

ちなみに刹那、千雨ちゃん、エヴァ、茶々丸の四人が班になっている
これだと何かと動きやすいだろうしな

俺は少し離れたところに座って見守る

席に座ってウトウトしていると「キヤーッ！！」と悲鳴が聞こえてきた

カエルが大量に出ている

客観的に見ると、チャチな事をするもんだ、と思ってしまう

ガキの悪戯じゃあるまいし、何やってんだか

車両の間に移動すると刹那がいた

その時、ツバメが親書を持ってこっちに来たが、刹那が切った

そのあとネギが来て、刹那の事を怪しんでいたが、ほっておいた
別に何か問題があるわけじゃないだろうし

そんなわけで京都なう

清水寺か、久しぶりだな

「これが噂の飛び降りるアレ!!」

「誰か飛び降りてっ!!」

「では拙者が…」

「私がいくアルよ!!」

…デジャブ!!

オイ、これ前にも見た事あるぞ

ナギとジャックを思い出すな

「おい、なんか説明とかないのか？」

エヴァがこっちに来てさういう

しょうがない、この俺が説明してやるうじやないか

「うん？それじゃ…」

えー、ここ、清水寺は『清水の舞台から飛び降りる』という言葉から連想される通り、

世界有数のバンジージャンプスポットとして注目されている、今世界で最もホットでクレイジーな観光スポットです。

その高さは最早軌道エレベーターと見間違えう程で、毎年ここを訪れ

る修学旅行の生徒には必ず一人や二人酸欠に陥る生徒がいると言っ
笑い話もよくありますね

建立は…確か、平成四年。当時の有力武将、ド・小西氏によって
建造されたと聞き及んでおります。

そうそう、平成十年に起きた、人類の半分を消し去ったあの忌々し
き災害、『清水寺クライシス』によって半壊しましたが、
平成十二年、当時の有力武将K B Aちゃんさんによって修繕され
たのは、記憶に新しいところですね

『清水寺クライシス』の一件によって、耐震偽装という言葉も注目
されましたね」

以上、某生徒会副会長のセリフを盛大にリスペクトさせていただき
ました

ちなみに隣で綾瀬が本物の解説をしている

「オイコラふざけた説明してんじゃねえよ」

流石千雨ちゃん、このネタを知っていた

「いやあ、エヴァが説明しろってうるさいからさ。テキトーにしと
けばいいだろと思っ」

「テキトー過ぎるわ!!お前どんなパラレルワールドからやってき
たんだよ!!」

「もう良くね?清水寺クライシスの爪痕見たじゃん」

「見てねえし!!そもそもそういう観光スポットじゃねえから!!」

「人類半分消滅は流石に無いだろう、セカンドインパクトじゃあるまいし」

エヴァ、お前あの映画を…漫画とかアニメもあるけど…知っていたのか

「俺なら一人残さず消滅させられる」

「そういうのもいらねえから!!」

といった感じで過ごした、千雨ちゃん大活躍だねえ

少し離れたところに行くと、アーウェルンクスがこっちを見ていた

合図してここから離れさせる

ここで話してもどっちにも利点が無いからな

それにマジモンの清水寺クライシスを起こすわけにもいかんだろ

さて、俺とアーウェルンクスは近くのカフェに来た

さっさと認識障害の術式を発動させ、コーヒーを頼む

「さて、俺に何の用だ？」

「呼んだのは君の方だろう、僕は君とサウザンドマスターの息子を見ていただけさ」

そう言ってコーヒーを飲む

「そうかい、ま、俺も今は争う気は無い」

「…意外だね」

「何がだ」

「君は前大戦で僕等とは敵で、殺し合った仲だろう。」

それなのに君は僕を殺すどころか相手にしないと云う。これが意外じゃなければ何だと言っんだい？」

「…そうか、だが、俺は別にお前の事は嫌いじゃない。自分の目的のためには手段を選ばないところとか、な」

「ふうん、まあ僕としても今君と争う気は無いよ
君と戦っても勝てる気がしないからね」

「そ、別にどうだっていいさ」

「…それで、僕をここに連れてきた目的は何だい？」

「お前らの目的を教える。京都で何をしようとしているのかをな」

「それは、僕に利点はあるのかい？」

「俺の持つ情報を渡そう」

この言葉にアーウェルンクスは考え込む

その情報が何か分からない以上、判断しにくいのだろう

「判断しづらいなら先に教えてやる」

…お前ら、黄昏の姫御子を狙ってただろ。
今いる場所を教えてやる」

どうせこいつらじゃ今はまだ手を出せないだろうしな

「……それを信用しろと？」

「交渉において俺は嘘は付かない主義でね」

「…そうかい、なら僕も話そう。」

彼らの目的はリョウメンスクナノカミを復活させ、それを機に総本山へ攻撃を仕掛けるつもりだよ」

「なるほどなるほど、俺の予定通り動いてくれてるわけだ。」

さて、黄昏の姫御子だが、今いる場所なら京都、つまりこの近くにいる」

「それは本当かい？」

驚いているな、流石にこんな近くに居るとは思わなかったんだろう

あくまで『今』いる場所だがな

「俺は嘘はつかんといっただろう」

じゃ、これで俺の目的は達したわけだ。じゃあな、ここは払ってやるよ。」

…ああ、俺の事は他言無用で頼むぜ」

「分かった、いいよ」

そういうのを確認してからカフェが出る

手早く清水寺に戻り、ネギたちを探す

音羽の滝という場所で生徒が酔い潰れていた

「…何この状況」

「どうやら滝に酒が混ぜられていたようだぞ」

「ふーん…ゴクツ…安物だな、いらねえや」

「…わざわざ味見をするなよ」

「まあこんなことに高い酒なんて使うわけねえか」

それよりこんな小学生の悪戯見たいなことをやってんのかよ、関西
の連中

酔い潰れた連中をバスに乗せ、ホテルへと向かう

嵐山のホテルにて

「ああそうだ、エヴァ、俺ちょっと出かけてくるわ」

「何？どこに行くんだ？」

「ちょっと旧友のところにな」

そう言って瞬間移動で詠春の家に行く

「よう、久しぶりだな詠春」

「ええ、久しぶりですねフィアンマ

それで、今日は何か用でもあるのですか？」

「ああ、お前ら関西呪術協会の過激派を焚きつけた俺だとばれるようなへマはしてない

だから、十中八九この二、三日で動くハズだ」

「…ここ最近過激派がかなり動いていると思ったらあなたのせいですか…」

「感謝しろ、この騒動で過激派の幹部連中を潰してやるからこれがうまくいけば、東西の仲違なかつがいは無くなるだろう」

「それは外部の者が手出しすると余計にややこしくなると思っていますか…」

「問題無い、要は正体がばれなきゃいいんだ

それにこのでかい騒動でお前の腕が試されることになるちゃんと出来りゃこの組織はしっかりまとまる筈だ」

「そうですね…木乃香に危険が無ければ良いのですが」

「過保護だな、あれだけの魔力をもつてりゃ狙われるのは必然だろう。

教えておいた方が危険に対しても動けるだろうに」

「私としては、出来るだけこちら側には関わらせたくないのですがね。」
せめてもう少しの間だけは普通の学生として過ごして欲しいんですよ。」

「ふーん、子供のいない俺には分からない感覚だな」

「そうですね。そういえば、ナギの息子が親書を届けに来るとお義父さんから聞きましたが、どんな感じですか？」

「ああ、明日辺り来るだろう。」

俺は動き始めた連中を潰す事にするから、少し遅れる」

「分かりました、では、準備しておきましょう」

「…ああ、忘れるところだった。」

アーウェルンクスがいたぜ」

「…どういう事ですか？」

流石に目が真剣になっただか

「今日見かけたのさ、ま、なんとかなるだろう」

「アーウェルンクス…二十年前にナギが倒した筈では？」

「アレは人形だからな、作りなおしたんだろ
逆に言えば、アレを作れるだけの奴が戦争で生き残ってたってことだ」

「そうですか、分かりました。気をつけましょう」

それを聞いてからホテルへと戻った

ホテルへ戻ると、結界が張られていた

だがへボい、この程度ならちょっと腕が立つ奴でも破れるぞ

結界をすり抜けホテルへ入る

刹那がロビーにいた

「どうした刹那、見張りか？」

「あ、フィアンマさん。」

「一応結界を張っておいたんですが…」

「ああ、アレ？」

俺にあんなもん使っても意味無いよ」

「そうですか、一応西の呪符使いが入ってこれない様に対策をしておきたくてですね」

…異質な感じがする、恐らく陰陽術だろう。
入りこまれてるな

「…そうか、ネギは？」

「先ほど外を見回りして帰ると言って出て行きましたが？」

…なるほど、それですか。

全く、結界を内側から開けて入れるとは、魔法使いにとっても知っておくべき知識だろうに

「刹那、直ぐに木乃香の様子を見に行け」

「え？でも結界を張ってるから入れない筈じゃ…」

「ネギが外に出た時に入り込まれたんだろう」

「分かりました！」

そう言っていると走って木乃香の部屋へと走って行った

俺はエヴァ達のいる部屋へ戻った

「何やら面白い事になってるじゃないか」

「唯面倒なだけで、刹那が張るようなチャチな結界を自力で抜けないからな」

「そうは言っても、なかなかの使い手なんだろう？」

「だろうな、少なくとも木乃香を誘拐する役を請け負ってる奴だし。ハア、さっさと片付けるか」

「せいぜいがんばって来い、私はゆっくり休ませて貰うよ」

「ああ、そうかい」

数分後、刹那から連絡があった

（お嬢様がさらわれています、今私とネギ先生、神楽坂さんが追っています）

（おい、今どこだ？）

（どこかの駅かと、電車で駅を移動していましたから）

（わかった、直ぐに追いつく）

「じゃ、行ってくるわ」

「相手にはご愁傷さまと伝えたいところだな」

「まっただくだ」

「そうですね」

この三人は俺が出るからと軽口をたたき合っている

面倒だ、とため息をつきながら仮契約カードを出す

カードで場所を確かめて瞬間移動する

〈SIDE 三人称〉

そこでは既に戦闘が始まっていた

刹那はフィアンマに気付き、声をかける

「フィアンマさん！お嬢様をお願いしますー！」

刹那は構えていて、月詠と戦闘しようとしている

「はいはいつと、全く、術を使うのがお前の得意分野じゃないんだし、結界は俺に言えばよかったのに」

ブツブツと呟きながら敵を見る

「あんさん誰どすか？」

「通りすがりの殺人鬼だよ。そんなわけで返してもらおうか」

確かに、争いを止めるのに争っている奴を皆殺しにするなんて考え方の人間は殺人鬼と呼べるだろう

全くどんな訳か分からないだろうけどな、と呟いてからフィアンマは動く

瞬動で後ろに回り込み、木乃香を抱き上げてから千草を蹴り飛ばす

（なっ、守りの護符が全く意味をなして無いやと！？？どういう事や！）

千草は焦っていた、さっきまで戦っていた三人でも手に負えないのに、それより確実に格が違う相手を敵にしなければならぬからだ

守りの護符など、魔力で強化した聖人の蹴りの前では何の意味も無い

千草は猿鬼と熊鬼を再召喚し、フィアンマに向かわせる

フィアンマは木乃香を抱えたまま猿鬼を蹴り飛ばし、熊鬼にあてて
二体を戦闘不能に追い込む

千草はその間に別の式紙を使って月詠を連れて逃げる

「お、おぼえてなはれーっ！」と、お決まりのセリフを言いなが
ら。

〈SIDE フィアンマ〉

木乃香の無事を確認し、ホテルへ戻ってきた

ネギは俺の戦いを見て

「フィアンマさんってすごく強いんですね！」

とか、目をキラキラさせながら言うもんだから、少し引いたわ

とりあえずはエヴァ達の部屋へ行く事にした俺と刹那

刹那は元々班員なんだけどね

「いや、無事でよかったね」

「ですが、術者は逃がしてしまいましたよ」

「問題無いだろ、あの程度ならどうにでもなる」

「そうですね、取りあえずはお嬢様が守れてよかったです」

「次に戦うとき、お前はあの神明流剣士を相手にするだろうな。負けはしないと思うが、気をつけるよ」

「分かりました」

さて、俺も明日は動く必要があるな

予定通りに行くならいいが

第二十七話 はしゃぎ過ぎるとロクな事が無い(後書き)

はい、修学旅行一日目でした

ネギがどんどん足引っ張ってる気がします

次回、二日目

感想は常時募集中

では、また次回

第二十八話 特に問題無く進む二日目・昼（前書き）

最近ホントにサブタイトルが浮かばなくなってきました

第二十八話 特に問題無く進む二日目・昼

第二十八話 特に問題無く進む二日目・昼

〈SIDE 三人称〉

修学旅行二日目の朝

この日、フィアンマは朝からとある準備をしていた

恐らく修学旅行三日目に行動を起こすであろう関西呪術協会の過激派

その派閥に属する人数は協会のおよそ半数

いくらフィアンマとて、準備なしでは数が足りない

戦力では無く、数

戦力はこれ以上は必要ない。後はどれだけ数をそろえられるかだ

時間稼ぎさえ出来てしまえば後はフィアンマが全て片付けられる

行動を起こすのは全国、それに対して詠春も穏健派を動けるように準備をさせてはいるハズだが、被害は少ないほどいい

その上、狙われている木乃香を守らなければならない

木乃香に関しては原作通りいけば問題無いだろう

だが、過激派を焚きつけている以上、戦力を京都こゝに集める可能性が限りなく高い

それに対して原作通り進める為、イレギュラーを起こさない為に準備をしている

そしてその為の、守りの為のアイテムを作った

それはペンダントだった

唯のペンダントでは無い、フィアンマが作り出したとある魔術の術式が書き込まれている

それが緊急時にのみ発動する仕掛けもしている

これが発動すれば、恐らくアーウェルリンクスとて迂闊に手出しが出来なくなる程の代物

ただし、即興であるが故にその発動は一回が限界

運が良ければ二回目の発動もできるだろうが、恐らくその可能性は無い

それ程までに不安定。だが、一回は確実に発動でき、確実に守れる後は刹那に任せるしかないだろう

いくらフィアンマが多数の場所に同時に居られるとはいえ、その数

には限界がある

しかも、今回は戦闘。千雨の時と違い、一人一人が別の行動をとらなければならない。

よって、必然的に数は限られる

そして準備を終えたフィアンマはホテルから外に出てきた刹那達と合流する

「よう、ちゃんと休めたか？」

「あ、フィアンマさん。

はい、おかげでしっかり休めました」

昨日の夜、戻ってきた後でフィアンマが強力な結界を張っておいたアーウェルンクスでさえ容易く侵入できないほどのモノを張ったから、誰にも侵入できないだろうという事で、刹那達は安心して休む事が出来た

「今日はどうするんだ？」

エヴァが眠そうにフィアンマに聞く

「どつって、お前俺のやる事手伝う気無いだろ？」

「ああ、無いな

何故旅行に来てまでお前の手伝いをしなければならんだ」

「だったら金はやるから好きなだけ遊んで来い
明日にはどうせ巻き込まれることになるだろうしな」

そう言って適当に財布に金を詰めてエヴァに渡す

その中身を見て千雨と刹那は驚愕する

「…これ、いくらぐらい入ってるんだ？」

「十万くらい、明日の分も入ってるからなくすなよ」

元々ファイアンマの貯金は文字通り桁が違いため、十万くらいじゃ響かないらしい

「いいのか？」

「いいよ。千雨ちゃん達も楽しんできていい
何かあれば俺に連絡してくればいいから

…あ、そうだ。刹那、これ木乃香ちゃんに渡しといて」

そう言ってペンダントを渡す

「これ、なんですか？」

「見た目通りのペンダント。

ただし、中には俺自作の術式が書いてある

発動するのは一回のみだが、

怪物みたいな実力の奴の相手でも数分は持ちこたえられるだろう」

まあ、たぶん並みの相手なら数秒で終わるだろうが。と付け加える
それを聞いてまたもや刹那と千雨は驚愕している

「…でも、何故直接渡さないのですか？」

「いや、だって俺木乃香ちゃんと面識ないし」

よくよく考えてみるとフィアンマは一度も木乃香と話したりした覚えが無い

「それにお前から渡した方が木乃香ちゃんも喜ぶだろ」

「え？いや、私は…」

フィアンマは返事を聞く前にどこかへ行ってしまった

刹那は「困ったなあ…」と呟きながらも、その顔はうれしそうだった

「あ、そうだ。私はお嬢様の護衛をしなければならぬので、別行動をさせてもらいます」

「ああ、構わない」

「構いませんよ」

「あたしもいいぜ」

「ありがとうございます」

刹那はエヴァ、茶々丸、千雨に礼を言って木乃香のところへ向かう

「…しかし、フィアンマはこの修学旅行で何しようとしてるんだ？」

「さあな、しかし得したものだ。」

今日は奈良の観光だし、お土産を大量に買わせて貰おう」

「そうだな」

そう言つてエヴァ達三人は奈良公園でいろんなものを買いまくつていた

かなりの数のお土産を買い、手には大量のお土産袋がある三人

中には『鹿のフン』と書かれたチョコレートなどもあつた

今は適当な店で団子を食べながら駄弁っている

「お土産はまあこんなところだろうな」

「かなり買ったが、それ誰が持つんだ？」

「うん？影で『扉』^{ゲート}を繋げて家に送るに決まっているだろう」

「…便利だな」

「まあな。だがお前も準備をすればそれくらいはできるだろ」

「たぶんな、魔術つて準備さえ出来てれば大概の事は出来るものだし。」

それより、フィアンマは一体何をしようとしてるんだろうな」

「元々あいつの考える事を予想すること自体が不可能に近いんだがな。

ただ、あいつの行動理論は『興味のある事』と『自分に利のある事』と『暇つぶし』だから、

何か面白いものでも見つけたか、自分に利益のある事でもしようと思っっているんだろう」

「そうだな、弟子をとるのも暇つぶしでやるような人だし、何かを見つけたりしたんだろうな」

等と適当に会話して奈良を満喫していた

一方、刹那達はどうと

「え、えーと。お嬢様、これを付けてもらえませんか？」

刹那は顔を真っ赤にしながらペンダントを渡していた

「わー、きれいやな。

どこで買ったん？」

「え、えっと、あの…き、昨日清水寺を回ってるときにちょっと抜け出して買ってきたんです」

「へえー、そうなんかー。
ありがとな、せっちゃん」

ニコツと笑う木乃香、それに対して刹那は顔を真っ赤にさせて俯いていた

「い、いえ、それでは」

そう言っつて明日菜達と合流する

「何してたの？」

「い、いえ、なんでもありません」

「？ ふーん」

「それにしても、今のところはお猿のお姉さんは来ませんねー」

「恐らく今日は大丈夫だと思いますが、今日はフィアンマさんも何やら用事があると出かけていますし

念のために各班に式紙を放っておきました。

何かあれば直ぐ分かります。

一応フィアンマさんとは連絡が取れるようにはしていますし、このかお嬢様の事も私が陰からしっかりお守りしますので…

お二人は修学旅行を楽しんでください」

「何で陰からなの？隣にいておしゃべりでもしながら守ればいいのに」

「い、いえ。私がお嬢様と気易くおしゃべりなどをするわけには…」

「またもー、何照れてんのかなよ桜咲さん」

「なっ、わ、私は別に照れてなど…」

と言っていたところで木乃香、綾瀬、早乙女の三人が明日菜と刹那を別の場所へ連れて行く

一人残されたネギはのどかと一緒に回る事になった

刹那と明日菜はある店で休んでいた

木乃香、綾瀬、早乙女の三人から逃げ回り、休憩しているところだ

「もー、何でこのかから逃げるのよー」

「式紙に任せてありますから、お嬢様の安全は大丈夫です」

「そうじゃなくて、何でこのかと喋ってあげないの？」

「いえ、私が親しくして魔法の事をバラしてしまうわけにはいきませんし、

何より身分が…」

「何ぶつくさ言ってるのよ。」

…あ、そういえば、桜咲さんってフィアンマさんと知り合いなの？」

「え、どうしてですか？」

「いや、昨日駅で戦ったときに互いの事を知った風な感じで話してたから…」

「ああ、フィアンマさんは私の師匠です」

「師匠？それって、剣を教えてもらってるの？」

「いえ、本人は剣術は得意じゃないと言って、近接戦闘のやり方などを学んでいます」

「それってどういうモノなの？」

「実戦経験がほとんどなので、どういうモノかと言われると困るんですが…」

そう言っつて刹那は苦笑している

実際、刹那がフィアンマがしていたのは実践経験を積ませる事ばかりで、言葉ではあまり説明していない

というよりはフィアンマは近接戦闘そのものをあまりしないので、詠春の剣術を見よう見まねでやっているから説明できないだけなのだが。

聖人の身体能力があれば大抵の事は出来てしまう事と、聖なる右を使えば最初から勝負にならない事が、

フィアンマが近接戦闘をしない理由だろう

「ふーん、フィアンマさんってすごく強いみたいだし、敵が来ても大丈夫よね」

「そうですね、私はフィアンマさんが実際に戦っているのをあまり見た事はありませんが、少なくともエヴァンジェリンさんが認めるだけの實力はありますから」

「でも、エヴァちゃんってネギも倒したわよね？」

「姉さん、少なくともエヴァンジェリンはあの時封印で魔力は多少なり抑えられてたんだ。」

「實力は完全とは言い難いぜ」

「そう？でも、倒したんだからもう少し胸を張ってもいいと思うけど」

「ハハハ…」

刹那は事情を知ってるので、取りあえず苦笑をしていた

実際には完全に實力を出して無いどころか、ゲーム感覚でやっていかに過ぎないからだ

その後、ネギが宮崎のどかに告白されたり、ネギがその事熱を出してで倒れたりしたが、他に特筆すべき事も無かったので、割愛させていただきます

第二十八話 特に問題無く進む二日目・昼（後書き）

はい、二日目・昼でした

特に何も無く進む二日目です

次回、二日目・夜です

感想は常時募集中

では、また次回

第二十九話 下準備をする二日目・夜

第二十九話 下準備をする二日目・夜

〈SIDE 三人称〉

修学旅行二日目・夜

フィアンマも戻ってきて、特に異常は無かったとネギから報告を受ける

その時に顔が赤かったのは恐らくまだ熱が完全に引いて無かったからだろう

フィアンマはホテル（というよりは旅館に近い）の屋根に上って、考え事をしていた

フィアンマは今日、全てとまではいかないが、ほぼ全国を回っていた過激派が動き出すのを牽制するためだ

牽制といっても、とある情報を流しただけだが、

そのおかげで、今日木乃香を拉致しようと考えていた過激派の一部の連中は動きを制限された

一部、といつても、実際の人数を数えれば、恐らく百は下らないだろう

京都に居ない別の県の連中が動こうとしていた事、そして横のつながりで連絡しようとしていない事で、数は必然的に増えている

それら全てに対して牽制をかけている時点で、既にフィアンマは人間離れしているとした言いようが無いが

情報を操作すると言う事はそう難しい事ではない

そして、修学旅行三日目に動きだすように仕向ければ完璧だろう

既に過激派へ情報操作をして操り、そういう風に動くように仕向けている

特に問題は起きない筈だ

とある建物の内部、多重に結界が張っており、並みの術者では監視、盗聴などは出来ない場所

其処には過激派の幹部である十五人がいた

其処に居る十五人は全員四十は超えており、長年の知恵と経験を持つている者達だった

「…それで、今日動こうとしていた連中は何と？」

「それが、裏の組織のいくつかが怪しい動きをしているとの報告があったので、迂闊に動けば攻められる、と判断したようです」

「フム、その組織とは？」

「いくつか候補が上がっておりますが、『明け色の日差し』『海より来たる覇者』等が日本へ向かっているとの情報まであります」

「…厄介だな、だが、事実確認は取れているのか？」

「いいえ、これらの組織の動きとある情報屋に調べさせたところ、日本へ向かう動きは無いとのことですよ」

「してやられたな。」

「まんまと偽物の情報を掴まされたわけだ」

「しかし、我々にここまで巧妙な情報操作を行えるものなど、そういるでしょうか」

「それは分からん。現トップである近衛詠春がそういう関係に強い者を雇ったというところが有力だな」

「では、スクナ復活と同時に攻め込む作戦はどうしましょうか」

「それは今更変えるわけにもいかんだろう。

年単位で準備してきたのだぞ」

「しかし、スクナ復活と同時に攻め込むと言うのは最近決めた事ですし、やはり無謀なのでは？」

「構うものか。スクナが復活すれば、我々に恐れる物など無い」

「そうだ、スクナはかの紅き翼の力を持ってしても封印するしかなかったという伝説級の化けものだぞ。

何を恐れる事がある」

「そ、そうですね。我々には勝利が待っている」

「そうです。我々は明日作戦を決行することだけを考えれば良いのです。

一旦決行してしまえば、其処からはどうにでもなるでしょう」

「うむ、では、今日を持って作戦会議は終了とする。

各自、明日には全力を出せるよう努力してくれ」

リーダー格で、最も老けている男がそういつと、他の幹部達はそれぞれ自分の組織へと帰って行った

其処にとある術式が施してあり、盗聴、監視をされていると知らず、情報を最も渡してはならない者に渡してしまった

そして、その術式で監視、盗聴をしていた男は、とあるホテルで間抜けな男たちを見ながら苦笑していた

そして電話をかける

「……………ああ、詠春か。

ああ、俺だよ。それで、あいつ等は俺の予定通り動くようだ
明日の朝迄に例の物を運んでおく、しっかり手に馴染ませておけよ
明日の夜には全てが終わっているだろう……………分かっている、危険は
無い筈だ、奴らにとつて木乃香ちゃんは大切な鍵だからな

……………そういうな、俺も明日はしっかり見張る、命の危険は無い
……………ああ、取り逃がす事は無い、既に奴らは罠にかかっているのに、
かかったのさえ気付いて無い状態だからな。……………分かった、じゃあ
な」

それだけ言っつて電話を切る

そして男は次の瞬間にはホテルの一室にはいなくなっていた

まるで空気の中へと溶けたように消えていた

フィアンマはネギの後に刹那から「ネギ先生が朝倉さんに魔法使いだとばれた」との報告を受けて、どう動くか考えていた

知ったとしても関係は無いが、明日木乃香と共に関西呪術教会総本山へ行けば、まず間違いなく巻き込まれるだろう

しかも原作と違い、過激派が動いている

下手をすれば命を落とす危険性もある

そうなると原作から離れる可能性もある

「メンドクサ」

「何がですか？」

誰かが屋根に上ってきていた

考え事をしていて気がつかなかったようだ

「ああ、刹那か。」

いやなに、明日朝倉達が総本山へ近づけば、まず死ぬかな、と考えてたんだよ。

で、隠蔽が面倒になりそうだから、メンドクサって言ったんだ」

「…出来る事なら隠蔽する前に巻き込まないよう努力してください」

「どちらかといえばお前らが連れてくる可能性が高いんだが」

「努力します」

即答したが、たぶん巻き込む事になるだろうな、とフィアンマは考えていた

その前に釘をさしておこうと考える

そう考えると直ぐに朝倉を探そうとした

が、まずは千雨とエヴァのところへ向かった

特に意味は無いが、強いて言うなら修学旅行二日目にゲームしていた筈なので、それを確かめに行った

「ん？どうしたフィアンマ、何か用か？」

「いやなに、朝倉達が何やらゲームをしているようだからな、ちょっと見に行こうと思って」

「ああ、そう言えばそんな事やってたな」

エヴァ、茶々丸、千雨はそんなのは関係ないとばかりにゲームをし

ていた

千雨は雪広から逃げてきたらしい

「あ、エヴァ、罷仕掛けてたる、そっち行つたぞ」

「よし、この私が狩ってくれるわ！」

「お前ら修学旅行に来てまでゲームかよ」

ま、いいけど。と呟いて部屋を出ていくフィアンマ

部屋の外に出てロビーを見ると、千雨の代わりに雪広に捕まり、新田に捕まってしまった村上と、

フツーに新田に捕まった明石が正座させられていた

そいつらに見つからない様に朝倉とカモがいる部屋へ侵入する

中では朝倉が実況していた

「え、えーと。宮崎のどかが果敢にもネギ部屋に侵入しましたが、どうやらキスには失敗した模様

ネギ先生は逃亡しました！各オツズは変わらず！」

「あ、姉さん。俺っちの目の錯覚かなあ。

ネギの兄貴が五人いるように見えるんだけど」

「なっ…！？」

「面倒くさい事しやがって、お前らは何がしたいんだ？」

「へ？」

「ふい、フィアンマの兄貴!？」

「お前に兄貴と呼ばれる筋合いはないが？」

「す、すいやせん!」

「それで、これをどうやって收拾付けるつもりだ？」

「え、えーと。どちらさま？」

「ん？そうか、会うのは初めてか…」

「オイ毛玉、お前後で説明しておけ」

「ハ、ハイッ!」

「俺はお前に一つ言いに来ただけだ。

これから先、ネギに関わるようなら、命の危険があると認識をして
おけ

いくら俺達が守っていると云っても、限界があるからな

こつちの世界の事に足を突っ込む気なら、相応の覚悟をしておけよ」

「そ、それはどういふ事で？」

「分からんか？警告だよ、ネギはアレでも英雄の息子でね。

命の危険は常に付いて回る

それでもいいと言つのなら俺は止めんがな」

それだけ言つと部屋を出てエヴァ達のいた部屋へ行く

「ノックしてもしーしー！」

そう言つてもけやぶる事はしない

旅館の人の迷惑になるからだ

そうやってふすまをスパーン！！という音を立てながら開けて中に入ると

「よっしやー！狩猟時間五分切つたー！」

「来たぞコレ、レア素材ゲットオオオオ！」

と、思いっきりはっちゃけているエヴァと千雨が居た

「……お前らテンション高過ぎ」

「ん？ああ、フィアンマか、どうした？」

「いやなに、明日はお前らにも手伝ってもらつ事になりそうだから、ちよつと説明をな」

「何を言っている、私は手伝う気は無いぞ？」

「右に同じ」

「明日は好きなだけ暴れさせてやる」

「前言撤回だ、何故それを先に言わない」

「オイエヴァ、手伝うのかよ!」

「麻帆良に閉じ込められてからストレスをゲームで発散してきたからな。」

「暴れられるならそれに越したことは無い」

「…ああ、そう。」

「で、計画の内容だが……」

それから一時間かけて説明してやった

エヴァは結局スクナの相手をする事になるだろう

千雨はフィアンマの計画の予備の戦力、といったところだろう

そして修学旅行は三日目を迎え、フィアンマの計画は動き出す

第二十九話 下準備をする二日目・夜（後書き）

後書き はい、二日目・夜の出来事でした

監視、盗聴していたのは当然あの男です。同時に多数の場所に存在
出来ますから。

隠す意味は全くありませんが

一応魔術組織は存在しています

禁書のように沢山あるわけではありませんが、黄金夜明や薔薇十字
等の有名な組織は存在しています

次回、三日目

感想は常時募集中

では、また次回

第三十話 狂いなく進む三日目

第三十話 狂いなく進む三日目

〈SIDE 三人称〉

修学旅行三日目

朝、ネギたちは旅館のロビーに居た

「ちょっと、こんなにカード作って一体どう責任取るつもりなのよ！」

「えうつ！僕ですか!?!」

「まあまあ、姉さん」

「そーだよ、もーかったってことであーじゃん」

朝倉とカモはフィアンマの言った事を全く理解していなかった

「朝倉とエロガモは黙ってて!」

「はい…」

「エロガモ!?!」

「…そう言えば、刹那さんはどこでしょうっか？」

「え？エヴァちゃんのことじゃないの？」

「一緒の班だし」

「そっか、そうですね」

「それと、本屋ちゃんには魔法使いってばらさない方が…」

そして話題が上がった刹那達はというと

「…それで、結局手伝う事にしたのですか？」

「まあな、京都に入ってくる奴らを蹴散らすだけだ、特に問題は起きまい。」

それに、ジジイには伝えておくとフィアンマは言っていた」

「まったく、何であたしまで手伝うはめになってんだか…」

「何を言っている、長谷川」

本格的に来るのは夕方から夜にかけてだ、昼間は遊び倒すにきまっているだろう」

「其処まで体力が持てばいいけどな」

「大丈夫だろ、お前といい、桜咲といい、アイツの修行で体力はかなり付いてる筈だからな」

「…それはそうだと思うが…」

「そう文句を言うな、要はピンチに駆けつければいいんだ」

「まあ、そうなりますね。」

出来る事ならピンチになるような状況は避けたいところですが…」

「…そういえば、この計画を立てた張本人はどこだ？」

「フィアンマさんなら朝から何やら用事があると言って出かけましたが」

「あいつは何をやっているんだ？」

「さあ？分かりませんが、連絡してみますか？」

「いいだろ、別に。」

必要な時に連絡すればいいだけだ。それより、さっさと出かけるぞ」

そう言って準備し始める一同

〈SIDE フィアンマ〉

俺は特にやることも無く町をぶらついでる

朝はちょっと用事があったが、昼は暇で仕方が無い

エヴァ達とどっか遊びに行くか

…よし、行こう

有言実行とばかりに瞬間移動し、エヴァ達と合流する

来たのはいいけど、寺かよ。

吸血鬼が寺を見学っておかしくね？

「ん？どうした？フィアンマ。

何かあったのか？」

「いや、何も無いけど。

暇だからエヴァ達とどっか遊びに行こうと思って」「

「いや、暇だからって……それでいいのか？」

「いいんじゃないね？敵さんもどうせ夜まで動かねえだろ」

「そうか……よし、移動手段を確保したし、あそこへ行くか」

「どうぞだよ」

「貴様は黙って連れて行けばいいんだ」

そうやって連れて行かれた先で遊んでいる

今現在はこういう状況

「「ヒヤッホオオオー！！！」」

「……何で京都旅行なのにUSJ？」

「気にしない方がいいんじゃないでしょうか」

「そうだな、あたしはあっちの奴に乗ってくるわ」

「私はマスターを待ちますので、どうぞ」

思いつきり修学旅行をエンジョイしていた

SIDE 刹那

今、私はちよつと困っている、

「せつちゃん、一緒に遊ぼうで」

「あ、ちよ、ちよつとお嬢様」

「ほら、これや、せつちゃん一緒にやってみーひん？」

「は、はい」

と、やりだしたのは音楽系のゲームだった

ギター、ドラムなどがあり、バンドのように複数人でプレイするところが可能なタイプだ

「よっしゃー、あたしの本気だしちゃうよ」

「これなら私でも出来るです、桜咲さんも一緒にやりましょう」

既に全員準備万端だった

用意在速くないですか？

でも、またお嬢様と一緒に遊べるならいいかな

…ハッ、いやいや、私はお嬢様を守ればそれでいいんだ

私がお嬢様の近くに居る訳にはいかない

付かず離れず、お嬢様を守れば、それでいい

あまり気を抜くわけにはいかない

先日戦った神明流剣士もいるようだし

〈SIDE フィアンマ〉

ネギから電話がかかってきた

『…あ、フィアンマさんですか？』

「ああ、どうした？」

俺達はUSJで遊び、今度はシネマ村に向かっていた

エヴァの奴、俺をタクシー代わりに使いやがって

『実は……』

これまでの事を簡単に説明してくれた

「…なるほどね、そりゃ災難だったな。

だが、あっちから妨害かけてくるのは当然だろう。それを分かってこの仕事を引き受けたんだろ？」

『はい、ですが、ここまで案内してくれた刹那さんの分身が消えたので、刹那さんの方に何かあったのでは、と思ひまして』

「ああ、そっちについては大丈夫だろ。あいつはそんな所そこの奴に負ける程弱くは無い」

『ですが、念のために一応確認を取るべきでは？』

「問題無い、危険になればあいつから連絡してくる筈だからな、緊急時の連絡手段はとってある

お前等は本山へ向かえ」

『そうですか、分かりました』

そう言って電話を切る

「…で、ぼーやは何と言っていたんだ？」

「あつちの妨害にあつたつてさ、狗族のガキが戦いに来たらしいが、勝ったそうだ」

「そうか、他には？」

「…想い人の子供がどうなってるか心配でたまらないと？」

「違うわッ！！いいから教えろ、計画を手伝ってやらんぞ」

「分かったからそんなにでかい声出すな、うるせえよ。

…でだ、ネギが言うには刹那の方で何かあつたらしい。

だが、俺達は気にすることなくシネマ村へ直行だ、刹那が負けたら罰ゲームだが」

「鬼だなお前！」

「気にするな、元からだ。

どうせ助けが欲しけりゃあつちから呼ぶだろ、それにちゃんと保険も掛けてある」

「…そうだな、私達はとりあえずシネマ村へいこう」

「…ドンマイ、桜咲」

「ドンマイですね、桜咲さん」

俺達がシネマ村に付いたころ、何やら騒がしくなっていた

「何かあってるのかな」

「さあな、それより、衣装を借りてみないか？」

「コスプレ魂が燃えるぜ！」

「千雨ちゃんちょっと落ち着こうか」

「マスター、あそこで衣装が借りられるようです」

「よし！いくぞ、長谷川！！」

「おっつー！！」

そう言つとエヴァと千雨は走って行った

「……元気だなー、あいつら」

「フィアンマさんは着替えないのですか？」

「ん？俺も着替えるよ。茶々丸もいつて来い」

「はい、では」

そう言つと茶々丸はエヴァ達を追いかけて行った

そして数分後

「……おまえ、それは……」

「いや、似合っていると言っか、似合いすぎてると言っか……」

「とにかくそっちの方が違和感が無い気がするのですが」

「お前ら言いたい放題だな」

俺は赤い修道服を着ていた

原作からそのまま出てきたような格好だ

エヴァはどこぞのお姫様のようなゴスロリのドレス

千雨と茶々丸は無難に和服を着ていた

「とりあえず見て回ろっぜ」

「そうだな、こうしていてもしょうがない」

そう言って近くのお土産などを見始めた俺達

そうしていると、橋の近くで何かやっているらしいので、見に行くことにした

近くの橋の上では、刹那と月詠が戦っていた

そのそばにある城の屋根の上にはネギと木乃香がいた

「どうする？助けるのか？」

「いや、連絡してこないところを見ると、大丈夫だと判断しているんだろっ」

「なら、あたし達は傍観でいいのか？」

「そうだな、だが、いつでも助けに入れるようにしておいた方がいいだろうっ」

「りょーかいだ」

「ふん、一般人がこれだけ居る中で戦うわけにもいかんだろっ」

「大丈夫だ、大概の事はごまかせるさ。既に認識障害をシネマ村中に展開させてる
っーか、ネギの奴は何をやってんだ？アイツ親書届けに行ったんじやなかったっけ」

「知るか、桜咲の事を心配してこっちに来たんじゃないか？」

「自分の事も対して管理できないガキに心配されるほど、刹那は弱くは無いんだがな」

「そうだな、お前の自慢の従者が、そう簡単には負ける事は無いだろっ」

〈SIDE 三人称〉

刹那は落ち着いて戦っていた

近くにネギの分体が来ていると言つのもあるが、
フィアンマの作ったと言つペンダントを木乃香に持たせているから
というのが大きいだろう

月詠の斬撃をかわし、逸らし、攻撃する

斬撃はしっかり見える、其処まで重い攻撃では無い

月詠が小さく何度も切りかかる

刹那は避けながら腕を集中して狙う

月詠は避けきれずに小さい切り傷をいくつも作っていく

「随分とチマチマしたやり方しはるんですな」

「うちの師匠のやり方でね」

そう言つと少し大きく切りかかる

その隙を尽くように月詠は懐に入って切る

刹那はそれを剣で受け止め、蹴りを入れる

懐に入った分近距離でまともに喰らった為、月詠はゲホツゲホツ、と咳をしていた

刹那はチラツ、と木乃香の方を見る

(どつやら追いつめられているようだ、早く助けに行かねば)

その頃、城の屋根では

「さあ、少しでも動いたらイチコロや、そっちは紙型のようやし、あきらめてお嬢様をわたしい！」

ネギと木乃香を狙い敵の鬼が弓を構えている

「大丈夫や、せつちゃんが必ず助けに来てくれる」

その時、ひときわ強い風が吹き、ネギが動く

それに反応して鬼が矢を放つ

「木乃香さんっ！」

ネギは受け止めようと手を伸ばすが、紙型であるため、あっさりつきぬける

矢が木乃香にあたろうとした瞬間、ペンダントが光り、矢を弾く

木乃香はその光を見て目がうつろになり、言葉を発する

「一本足の家の人食えばあさん」

木乃香の歌声に合わせるように千切れる影を纏う老婆が猛威を振るう

鬼を吹き飛ばし、術者へと襲い掛かる

「ひっ、な、何やアレは!!」

千草は叫ぶ、得体のしれない物への恐怖を混ぜて

アーウエルクスは『石の槍』を大量に放つ

老婆はそれに押され、弾きながら隙を窺う

千草は猿鬼と熊鬼を召喚し、老婆に向かわせる

猿鬼は老婆に掴みかかろうとするが、巨大な炎の塊が爆発し、熊鬼と共に消え去った

そして、老婆はまた術者を狙う

だが、アーウエルンクスが対抗して『冥府の石柱』を使おうとした瞬間、老婆は消え去った

「…やっぱりそううまくはいかねえな」

「アレは何だ？老婆のような何かが近衛を守っていたようだったが…」

「アレは『一本足の家の人食いばあさん』だ」

「それって…確か、ロシアの民話じゃなかったか？」

「良く知ってるな。」

「アレはロシアの民話を元に作り出した魔術だ」

「そんなものまで作ったのか…」

「まあな、面白そうだったし、作ってみた。」

「だがまあさっきの数分だったし、まだ調整中だがな」

「ふーん。だけど、何でそんなの使ったんだ？」

「気分的な問題」

「……ああ、そう……」

「そんな呆れた顔で見なよ」

「無理に決まってるだろ！あんなでたらめな魔術を気分的な問題で使われてたまるか！」

「とりあえずは救出に行かなきゃな」

そう言ってどこからともなくロープを取り出し、仮面をかぶる

フードまでかぶり、傍から見れば誰か分からない状態だ

フィアンマはそのまま瞬間移動し、城の屋根に現れた

「なんやったんや、アレは…？」

「さあ、分かりませんよ。」

ですが、消えたのなら丁度いい、早くお嬢様を攫いましょう」

「おっと、そういうわけにもいかないね」

不意に声が聞こえた

後ろから聞こえた筈だが、アーウェルンクス達が振り返っても其処には誰も居なかった

カツン、カツンと音を立てて木乃香の隣に立つ

「…誰や、アンタ？邪魔するなら容赦せえへんで！」

「容赦なんていらさないさ。俺がやるのは木乃香ちゃんをここから逃がす事だからな」

「何やて…？それをやってあんたに何か利でもあるんか!？」

「利ならいくらでもあるさ。例えば、お前らの計画を邪魔出来たりな」

それだけ言ってフィアンマは木乃香を抱えて瞬間移動する

刹那は月詠を追いつめていた

月詠は小さい切り傷をいくつも作り、血が流れている

対する刹那も小さい切り傷こそあるが、血はほとんど流れていない

この状況は実力的には刹那が上回っている事を証明していた

「やりますなあ、センパイ。

ウチはこういう死合いを望んでたんや〜」

「そうか、私には関係無いな。

…決着をつけさせてもらう」

その一言で構える二人、次で決着をつけようとしたその時だった

「其処までだ、刹那」

「…フィアンマさん、お嬢様は？」

「大丈夫だ。それと、一度本山へ向かうぞ」

「ですが、本山は今危険ではないのですか？」

「一度詠春に会っておく必要がある。

木乃香ちゃんの事だな」

「……分かりました。ですが、アレはどうしますか？」

刹那は月詠から目を離さずに話していた

「放っておいても問題あるまい。

実力的にお前に劣っている、大丈夫だろう」

「ゆうてくれますやんか、お兄さん。
ウチがそう簡単に逃がすと思うてますのん？」

「逃げる手段はいくらでもある、同様に倒す手段もまた然りつてな」
そう言うと、月詠は今にも切りかかってきた

（まったく、バトルマニア戦闘狂は扱いやすいな）

フィアンマはローブから大量に剣を出して防ぐ

技術では無く数

質より量という考え方である

月詠はその何千ともいえる剣を防ぎながら下がる

月詠がフィアンマを見ようとしたとき、何かが光った

（閃光弾！？まさかこんな物をつこうてくるとは…）

次に月詠が見たときは既にフィアンマも木乃香も刹那もいなかった

（…ウフフフフ、次こそは決着付けさせてもらいますえ）

月詠は逃げられた事より、また刹那と死合いが出来ると言う楽しみ
が大きかった

第三十話 狂いなく進む三日目（後書き）

はい、各地で戦いが起こり始めた三日目です

ただ今この小説の下手さにあきれ、ガッツリへこんでおります

やはり誰かの作品を参考にするとかした方がいいんでしょうか

次回、本格的に戦闘が始まります

感想は常時募集中

では、また次回

第三十一話 戦い始める三日目（前書き）

別の小説書き始めました

良かったら見て行ってください

出来る限り両方並行して進めて行きたいと思っておりますので

第三十一話 戦い始める三日目

第三十一話 戦い始める三日目

〈SIDE 三人称〉

月詠達から逃げたその後、フィアンマ達は関西呪術協会の本山へと向かっていた

ちなみに全員ちゃんと着替えている

フィアンマ達の後ろでは、エヴァ達と目が覚めた木乃香、刹那のバツクにしかけたGPSをたどってついてきた朝倉達がいた

刹那はフィアンマと話している

「…ところで、今本山へ向かうのは危険ではないのですか？」

「今いかずにいつ行くんだよ。」

それに詠春が自分の子供に手出しする筈ねえだろ」

「…そうですね。ですが、本山へ攻め込まれた場合などはどうするんですか？」

「それこそこっちの思いつきだよ。」

木乃香が本山へ入れば、否応なしに過激派は動かざるを得なくなる。

「そうやって動き出したところを一網打尽だ」

「それが、フィアンマさんの計画ですか？」

「まあな、タイミング的にもちょうどいいだろ。」

「奴らを取り逃がしたわけだし、適当な理由でちよつとばかり実力のある奴を連れてきてくれれば、

それこそ過激派の連中は守りの戦力が足り無くなる」

「……其処まで考えてたんですか？」

「いや、半分近くは即興だな。」

「本当はもうチヨイ時間かけてやるような事だし」

刹那は呆れた顔してフィアンマを見ていた

「どうせ、本山の結界を抜けられるほどの実力持った奴なんてそうはいない。

最終的には物量で攻め込んでくる事になるだろうな。」

だから……あいつらを連れてくると死ぬ可能性があるんだよなあ」

木乃香達と話している朝倉や早乙女達を見ながらため息をつく

「……面目ありません。ですが、フィアンマさんがいれば大丈夫なのでは？」

「残念ながら俺はずっといる訳じゃない。」

他のいくつかの場所に増援として行くことになってる

全国に散らばってるし、今回は戦闘だ、ずっと一緒に居て守るってわけにもいかないんだよ」

「そうですか、分かりました。
私もできうる限りは守るようになります」

「ああ、そうしてくれ。」

俺は詠春にちゃんと頼んどいてやるから」

そう言っつて数分ほど歩き、ネギ達と合流

「ちょ、ちよつと桜咲さん！

何でみんないるわけ！？」

「実は、先ほど朝倉さんに捕まっつてしまいまして…」

「んふふー、私から逃げよう何て百年速いよ」

「フィアンマさん、いいんですか？」

「昨日の夜に釘を刺したんだが、バカは死なんと治らんらしい」

「バカは酷いな、私はついてきただけじゃん」

「朝倉、アンタこの危険さ全然分かつて無いでしょ？

ネギなんてさつき死ぬところだったのよ！？」

「あ、アレ入口じゃない？」

「よーし、レッツゴー！！」

「あ、ちょ、ちよつとみんなー。其処は敵の本拠地なのよ！？」

「そつですよ、何が出てくるか……!!」

そついうネギ達を置いて木乃香達は門を開ける

「「「「「お帰りなさいませ木乃実お嬢様、このかお嬢様ーっ」
「「「「「」

「「へ?」」

「うわあゝ、木乃香の実家っていいんちょ並じゃん」

木乃香の家はかなり広い、この家だけで京都の山の一角を占めている程だ。

隣で刹那がネギ達に説明したが、ネギ達はかなり驚いているようだ

「さあ、じつちやゝ」

そんなことは知らず、木乃香は自分家に友達連れて来たかのように平然と案内する。

というか自分家に友達連れてきてる状況なのだが

しばらく歩いて、木乃香に連れられてきたところは、かなり広い和

風謁見の間のような部屋だった。

「ちよ、ちよっと真ん中に座っていいの？」

「ええよ、ええよ」

みんなが部屋の真ん中に用意された座布団に座る、友達の家でもここまでの豪華さでは木乃香以外は慣れていないようで緊張している。

「よく来てくれましたね、木乃香のクラスメイトの皆様。そしてネギ君、任務ご苦労様です。」

部屋の奥から陰陽師の服を着た詠春が出てきた

「お父様久しぶりや〜！」

「こらこら、木乃香。」

木乃香が詠春の胸に飛び込んでいる

その後、ネギ達は帰るのではなく、本山に留まる事になった

なぜなら、暗くなったところを敵に関係者と間違われて襲われないとは限らない

親書を渡すネギだけならともかく、朝倉や早乙女、宮崎や綾瀬まで居るのだ

フィアンマも夜になれば自由に動けなくなるため、留まる事になった

今は宴会場に来ている。

詠春が夕飯を準備したのでみんなと共にご馳走になっている。

みんな今日はかなり走ったからなのかよく食べる。これでまた疲れなければいいが。

「もつと飲め飲め〜」

「ちょっと、これお酒じゃ「そんなわけない〜」完全に酔ってるでしょ。」

各々楽しんでるらしい、酒を飲んでるのは確実のようだが

「刹那君」

「は、はい長！」

仕事を終わらせると言って席を外していた詠春が、別件で出ていたフィアンマと共に戻って来て刹那に後ろから声をかける。

その声に刹那は瞬時に振り返り詠春に跪く。

「そんなにかしこまらなくていいですよ、貴方は昔からそうですかね。」

「い、いえ」

そう言われても真面目な刹那だ、そう簡単に態度は変えられない。

「お前の性格がつつつたんじゃないか？お前に似て真面目だぜ」

「ハハハ、そうかもしれません。」

貴方には苦勞をかけたね、まさか昼間から向こうが襲ってくるとは」

「いえ、こちらの不注意でお嬢様を危険な目に…」

刹那はやはり申し訳なさそうな顔をする。

「ははは、大丈夫ですよ、木乃香はどこか抜けてますし、周りもイベント程度にしか思っていないのでしょうか？」

まあそうだろうな、あれだけのことがあってイベントで済ませるくらいだ。大抵のことは許容できそうだ、学園長がアレだからか？

「それにフィアンマが助けてくれたのでしよう。フィアンマ、礼を言います。」

「別にいいさ、俺は友人のガキを見捨てるほど薄情じゃない」

「ええっ！長さんとフィアンマさんって知り合いなんですか！？」

「まあな、それは後で話してやる。」

それより、そろそろ時間だ。

俺は行つて来るぜ」

「ええ、お願いします。フィアンマ」

それを聞くと、フィアンマは部屋の外に出てロープを出し、瞬間移動した

そして、数時間後

突如として戦闘ははじまった

十四人という少ない人数

だが、全員が腕に覚えのある猛者ばかり

その場に居た詠春とエヴァの二人が協力して押さえていた

「『魔法の射手 闇の二十九矢』！！」

「『雷光剣』！！」

「ケケケケケケケケケケ！！」

エヴァの使う魔法の射手が敵を牽制し、一瞬の隙について詠春とチヤチャゼロが攻撃する

三人はたった今結成したとは思えない程息があっていた

「舐めるなよ！」

そう言った誰かが瞬動で攻撃を仕掛ける

隙だらけもいいところ

詠瞬はその攻撃を防ごうと構える

だが、その体で隠すように横からいくつも符を使った攻撃が繰り出される

詠瞬は慌てて回避をする

息があっているのはエヴァ達だけでは無い、曲がりなりにもいくつも戦いを切り抜けてきた猛者たちだ

その実力は高い、それこそ、これだけの人数で息を合わせれば、エヴァ達を相手に戦えると自負できる程の実力者

「少々厄介ですね」

そういう詠春の手にはひと振りの日本刀が握られている

雷切らいぎり

かつて天からの攻撃を迎撃したという逸話を元にフィアンマが作り出した霊装

使い慣れた夕凧では無いが、その感覚のズレを補強するように霊装から力を引き出す

「ふん、後でフィアンマにはたつぷりと報酬をもらわねばな」

「ケケケ、俺トシチャア殺セルナラドウドモイインダケドナ」

吸血鬼とその従者は笑う

本来なら他にも兵は居る

守りの為の兵は本山である以上は他とは違う、それなりの実力を持っている

だが、木乃香が本山へと入った所為で、物量で木乃香を奪おうとする連中が出てきた

それを迎撃しているのだ

そして、エヴァ達の目の前に居るのはその迎撃を抜けてきた者達

千雨と茶々丸は朝倉達の守りにしている

この戦闘音も聞こえない様にいくつかの仕掛けをしている

「さあて、さっさと終わらせて酒でも飲むか！」

「アア、悪クネエナ！」

そう言つてチャチャゼロは動く

近くに居た剣士はそのナイフを受け止める

ギギギ、と音が響く

「『魔法の射手 連弾・闇の五十九矢』！」

チャチャゼロの後ろから魔法の射手が飛んでくる

近くに居た四人は符を使い剣を振るつてそれを防ぐ

いくつかの魔法の射手は地面に当たり、砂煙を起こす

ヒュン、と音がした

数人そちらを見る

瞬間、逆方向から詠春が攻撃する

「『百花繚乱』！」

固まっていた五人は防ごうと符を出す

その瞬間、先ほど音がした方向から複数のナイフが飛んでくる

それをまた防ごうと三人が動き、一か所に集まる

「『こおる大地』！」

固まっていた八人は詠唱を終えたエヴァによる攻撃をまともに受ける

五人は戦闘を続けられる状況では無い

三人は少なからず怪我を負っている

直ぐに回復させようと後ろの四人が動くが、チャチャゼロはそれを許さない

ナイフを拾い、また投げる

敵はそれを避けるが、その間に詠春が距離を詰め、刀を振る

「『雷鳴剣』！」

三人はとっさに符を出して防ぐ

「『闇の吹雪』！」

強力な魔力の奔流が詠春の攻撃を防いだ敵を襲う

また別の四人がそれを防ごうと符を使う

それによって砂煙が巻き起こり、視界が狭まる

(クツ、またか!!)

敵は何か飛んでくるのではと構える

「『魔法の射手 連弾・三十九矢』」

予想通りとばかりに直ぐに符を張って防ぐ

だが、防いだところで足を何かで切られる

「余所見八敵禁ダゼ!」

チャチャゼロが足元を狙って攻撃していた

固まっていた八人は足の腱を切られ、動けなくなる

「…これで終わりか？」

「今のところは、ですね」

「チツ、ツマンネーナ」

全員を気絶させ、辺りを確認する

「中々の手だれだったな」

「それでも、無理をする必要はありません。

敵は増えるでしょう、私も戦わねばなりません」

「そう焦るな近衛詠春、敵の狙いは近衛木乃香でもある。ぼーやもいるが、アレはあまりあてにするな。見習いだしな敵がこれで終わるとは思えん」

「…そうですね、敵の狙いが木乃香である以上、それを守りとおさねば」

「まあそうだな…ん？」

（おい、エヴァ、大変だ！！）

（どうした？）

（あたしがちょっといない隙に他の奴らが石にされてる！！）

（何！？石化だと！茶々丸もか！？）

（ああ、それに近衛と綾瀬がいない！桜咲はネギ先生と一緒に敵を追っているらしい！！）

（わかった、フィアンマに連絡は入れてるのか？）

（ああ、桜咲が直ぐに連絡すると言っていた！）

（なら、直ぐにでも来るだろう。

私も追う事にする）

（分かった、あたしはどうする？）

（長谷川も直ぐに追え、お前は一对一より一对多の方が得意だろう）

（チツ、ここまで来たら四の五の言ってもらえないな。
分かった、直ぐに行く）

「どうしたのですか？」

「近衛木乃香が攫われた、今ばーや達が追っているらしい」

「何ですって！？それでは、先ほどの敵は…」

「ああ、困だろうな。」

私達が戦っている間に攫うとは…しかし、結界を抜けて其処まで出来る奴がいるとは」

「私も迂闊でした。」

「この結界を少しばかり甘く見ていたようですね」

「そうだな、結界にあまり頼り過ぎない事だ。」

…さて、また来たようだな」

「ええ、これが終われば前衛の者たちの援護に行かねば」

「ああ、私もこれが終われば追う事にするよ」

「ケケケ、俺八殺セルナラドツチデモイイゼ」

そう言って三人は構える

第三十一話 戦い始める三日目（後書き）

はい、三日目の戦闘が開始されました

長くなりそうだったので、二つに分けました

次回、刹那と千雨の戦闘、ネギ達の戦闘、フィアンマの戦闘が入る
と思います

感想は常時募集中

では、また次回

第三十二話 戦火の三日目（前書き）

まず最初に

更新遅れてすいませんでした！！

もう一つを書き始めてからずっとこっちは書けず、取りあえずゴ
ールデンウィークを駆使して書いてみました

今後の更新は長い休みに入るまではほとんどできないと思いますが、
どうぞよろしくお願いします

第三十二話 戦火の三日目

第三十二話 戦火の三日目

ネギ達は木乃香を追っていた

アーウェルンクスにあしらわれ、木乃香を連れ去られてしまった事を悔み、全速力で追っていた

そして、刹那はフィアンマと連絡を取っていた

(…なるほど、分かった。

だが、直ぐには向かえない)

(何故ですか！？お嬢様は既に連れ去られているんですよ！？)

(分かっている。だが、こっちも数が多くて中々大変なんだ)

(…分かりました。それと、アーティファクトの使用許可をください！！)

(構わない、全力で連れ戻せ)

(ハイ！！)

「刹那さん、見えてきました！！！」

そして、連れ去った敵を見据える

「待て！！其処までだ、お嬢様を離せ！！」

「…またあんたらか」

「天ヶ崎千草！！おとなしく投降しろ！

明日の朝にはお前をとらえに応援がくるぞ！」

「ふふん、応援がなんぼのもんや

あの場所まで行きさえすれば…

それより、あんたにもお嬢様の力の一端を見せたるわ

…お嬢様、失礼」

そう言つて木乃香に符を張り付ける

そして言葉を紡ぐ

そうすると、百を超える鬼が次々と召喚されていく

「あんたにはその鬼どもと戦つてもらおか

ま、ガキやし、殺さんよーにだけは言つとくわ。

ほな」

そういうと、千草は木乃香を連れてどこかへ行ってしまった

「兄貴、時間が欲しい、障壁を」

「うん

逆巻け 春の嵐 我らに 風の加護を 風花旋風 風障壁！！！」

竜巻のような風がネギ達を中心に巻き起る

「こ、これって?」

「風の障壁です。ただし二、三分しか持ちません!」

「よし、手短かに作戦を立てようぜ!?
どうする?こいつはかなりまずい状況だ」

「刹那さん、フィアンマさんに連絡は?」

「しました。ですが、時間がかかるそうです

…ここはやはり、二手に分かれるしかありませんね

「で、でも…」

「四の五のいつてる暇はありません!お嬢様をお願いします!」

「な、なら、私ものこる!」

「いや、しかし…」

「いや、いい案かもしれないぜ。姉さんの使うハリセンははたかだけで召喚された奴を送り返せる。

あの鬼達を相手にするには丁度いいぜ」

「ですが…(おい桜咲、聞こえるか?)ちょっと待ってください」

(どうかしましたか!?)

(あたしも直ぐにそっちに向かう、出来る事ならネギ先生と神楽坂は其処にはいさせないでくればれたくないからな)

(どれくらいで到着できそうですか?)

(一分だ)

(了解しました)

「…援軍がくるそうです。なので、ネギ先生達は先へ行ってください
い」

「でも…」

「速くしてください！時間がありません！」

「仕方がない、だったら、仮契約しようぜ！」

この際四の五の言ってるらんねえ、手札は多い方がいいに決まってる
だろおが!!」

「必要ありません、既に持ってますから」

「」「」「？」

「アテアット
来たね！」

刹那の手にひと振りの刀が現れる

それを見た三人（正確には二人と一匹）は驚いている

「速く行ってください！…ネギ先生、お嬢様をお願いします！」

「わ、分かりました！！」

その時、風の障壁が解けた

「『雷の暴風』！」

雷の奔流が鬼達を吹き飛ばす

ネギは明日菜を連れ、箒で飛んで行った

「…なんや、残ったのは嬢ちゃんだけか？」

「そうだ。だが、手加減はいらんぞ」

「そうかい。なら、全力で行かせてもらおうで！」

その時、上空から声がした

「『弾丸は魔弾 効力は召喚されたモノを還す、および絶対命中 弾数は魔力が続く限り』」

ダダダダダン！！という音がする

銃弾は飛び交い、当たった鬼達は還っていく

ダンッ！という音と共に千雨は着地する

上空には千雨のアーティファクトである鷹が飛んでいる

「ジャスト一分ですよ」

「当たり前だ、時間には正確でな

さて、鬼共。悪夢を届けに来たぜ」

両手にハンドガンを持ち、刹那と背中合わせに構える

服装は動きやすいようにジャージを着ている

「『百列桜華斬』！」

刹那は円を描くように剣を振り、複数の敵を一度に斬る

千雨は銃を構え、次々に鬼にあてて還していく

「やるなあ嬢ちゃん、だが、油断したらあかんでえ」

鬼はこん棒を振り上げ、千雨に向けて振り下ろす

「『右方から衝撃』」

千雨は振り返る事無くそう呟く

「何っ!？」

こん棒は左側にズレ、千雨には当たらなかった

千雨は銃を後ろに向け、そのまま撃つ

「……どういうことや？後ろに目でもついとるんか？」

「まさか。こんなの、振り返る必要も無いだけだよ」

「ゆうてくれるやんけ、其処までゆうなら後悔すんなや！」

複数の鬼が千雨を囲み、そのまま一斉にこん棒を振るう

「『縛』」

そのたった一言

それだけで、鬼は動きを止められた

しかし体全体の動きを止められた訳ではない

関節を固定し、動かなくさせていただけの事

体全体を止めているわけではないので、余計な魔力を使わずに済む

「『斬魔剣』！」

動かなくなったところを刹那が切り捨てる

そして、二人はまた背中合わせになる

「ちよーっと数が多過ぎやしないか？」

「そうですね、長谷川さんは魔力大丈夫ですか？」

「…いまさらだが、千雨でいい。魔力は心配するな、ちゃんと節約してる」

「なら、私も刹那で構いません。

私もまだ気は節約してますからね、まだ大丈夫ですよ」

「なら、あきらめるにはまだ早いな」

「ええ、まあ元よりあきらめる気なんてありませんが」

「そりゃそうだな。あきらめる意味が無い」

二人は笑って攻撃を始める

ダダダダダン！！

ザン！ズバア！

と、音が響く

そうやっている、かなりの数が還ったらしく、残っているのは数体だった

「さて、残りはお前らだけだが？」

そう言い放つ千雨に鳥族の一人が剣を振る

「やりおるなあ嬢ちゃん達。だが、某は^{それがし}今までの奴らとはちと出来

「が違つぞ！」

対する千雨は紙一重で攻撃を避けながら言葉を返す

「みただいな！クソツ、厄介なのが来やがって！」砂鉄による自動
防御』！」

「むっ！？」

周囲から砂鉄が集まり、蠢く

砂鉄は千雨を庇うように盾となり、攻撃を受ける

千雨はその一瞬で烏族の男を打ち抜き、還す

刹那も別格の鬼を倒したらしく、少々息が上がっている

「とりあえずは終わり、か？」

「そうですね。ですが、直ぐにでもお嬢様を追わねば」

「少し落ち着け、まずは怪我を治す』治れ』」

そう言うと、傷口が徐々に塞がっていく

「ありがとうございます。では、直ぐにでも……」

「だから焦るなつての、あたしのアーティファクトであつちは見えてる。」

状況は芳しくない、一旦フィアンマに連絡を取れ」

「そうですね、フィアンマさんが来れば、この戦いは勝ったも同然ですし」

そう言っただけ連絡を取り始める刹那

その時、龍宮と古菲が其処に到着した

綾瀬が援軍として呼んだのだ

「……何だ、助けはいらなかったようだな」

「アイヤー、もう終わってたアルか」

「……何でお前らがここに居るんだよ」

「それはこっちが聞きたいな。

長谷川は一般人の筈だろう？」

「あたしはとつくの昔に関係者だったの」

「そうだったのか、知らなかったよ」

「そりゃ、話して無いからな」

等と不毛な会話を繰り返す二人

少しすると、刹那が連絡を終えたらしく、三人に話しかける

「フィアンマさんももう少しで到着できるそうです」

「そうか。だがどうする？近衛は捕まったままだろう。助けに行くのか？」

「はい、直ぐにでも」

その時、多数の鬼と共に刀を持った少女が現れた

「そうはさせませんえ。センパイにはウチと殺し合いをしてもらわな〜」

「月詠…まさかこのタイミングで来るとはな」

「ウフフ、楽しみにしてたんやで〜。セ・ン・パ・イ」

月詠は刀を構え、今にも斬りかかるうとする

「…しよーが無い。刹那、先行け」

「！しかし!?!」

「いいんだよ、こっちは援軍が来てくれてるし」

そついいながら古と龍宮を見る

「分かってるよ」

「いいアルよ。面白そうアルね」

「と、言う事だ。お前は近衛を助けに行け。フィアンマが来るまで

の時間稼ぎさえできれば問題ないだろ」

「……分かりました。お願いします」

「フッフ、簡単に逃がすと思わんといってください」

ダツ！と瞬動で距離を詰める月詠

「『砂鉄による自動防御』」

しかし、その攻撃は砂鉄によって遮られる

「『球形に閉じ込める』」

その言葉と共に月詠は砂鉄の中に閉じ込められる

刹那はその隙に走りだし、木乃香を救うために急ぐ

古と龍宮は既に鬼達を相手に戦っている

ザン！という音と共に砂鉄の檻が斬られる

「邪魔せんといってくれませんかね」

「そいつは無理な相談だな」

月詠は刀を構え、千雨は銃を構える

其処から先は千日手とも呼ぶべき状態だった

月詠が斬りかかり、千雨は砂鉄で防ぐか避けて距離をとり、銃を放つ神鳴流に飛び道具は効かない。月詠は弾丸を弾き落とし、瞬動で距離を詰めて斬りかかる

その繰り返しだった

(…そろそろ魔力が足りなくなってきたな)

元々千雨の魔力量は多い方では無い

そして大量の鬼と月詠を相手にして、魔力が尽き始めている

千雨は賭けに出る

「『』」

「!?!」

千雨は動きを止め、向かって来る月詠を見据え、銃を構える

(相打ち覚悟？魔力も少ないみたいやし、間違いではないかな？)

月詠は疑問を持ちながらもスピードを落とさない

そして、千雨が近距離で銃を撃つ瞬間、月詠は体をひねり、弾丸をかわす

そのまま千雨に斬りかかり、勝利を確信する

しかし

(手応えが無い?)

倒したと錯覚した一瞬だった

「『縛』」

その一言で動きを止められる

「…!どういう事ですか?」

「厘気楼って知ってつか?」

厘気楼とは、密度の異なる大気の中で光が屈折し、地上や水上の物体が浮き上がって見えたり、逆さまに見えたりする現象だ

千雨は『擬似・黄金練成』でこの現象を人為的に引き起こし、眼の錯覚を起こした

「終わりだ『弾丸は魔弾 効力は人の意識を奪う 銃弾は一つで十分』」

バン!という音と共に、月詠は倒れる

(…取りあえずは終わったか)

「そっちも片付いたようだね」

「龍宮。そつちも終わったのか」

「ああ、後は古が戦ってる分だけだ。この仕事代はフィアンマさんにでもたかるさ」

「そうしろ。あの人金はえらく持つてるから」

「…随分フィアンマさんに詳しいんだな」

龍宮はにやりと笑いながら千雨に聞く

「師匠だからな」

「…なるほど、それならさっきの魔法も納得がいくよ」

「…あの人を普段どんな目で見てんだよ」

「うーん…人間ビツクリ箱、かな」

「…まあ間違っではないと思う」

普段のフィアンマの魔術を思い出しながら千雨は呟く

「それより、刹那の方…!!」

千雨が湖の方に目をやると、巨大な光の柱が天へと伸びていた

「……こりゃ間に合わなかったかな」

「かも知れないね。千雨は行かないのかい？」

「あたしは魔力切れだ。今行っても足手まといにしかならねえよ」

「冷静なんだな。友人のピンチかも知れないのに」

「あたしは元々こういうスタンスなんだよ。それに、冷静さを欠いてもいい事は無い」

「確かにそうだ。後はかの英雄に任せよう」

「そうだな。あの人なら神様相手でも勝てる気がするよ」

二人の喧きは誰にも聞こえる事は無いはずだった

「其処まで信用されてるなら、それに応えなくちゃな」

光の柱を見ながら、二人の会話を聞いて、神上は呟いた

第三十二話 戦火の三日目（後書き）

はい、今回は千雨と刹那の活躍シーンです

千雨は知識がそのまま武器になるという理不尽さがよく分かった話でした

次回、ついにファイアンマ参戦です

感想は常時募集中

今後更新は遅れますが、よろしく願いします！

第三十三話 終戦の三日目（前書き）

久しぶりに書くと意外と筆が進んだ

そんなわけで意外と速くできましたのでアップします

それではどうぞ

第三十三話 終戦の三日目

第三十三話 終戦の三日目

広い湖

其処には巨大な光の柱が立ち、其処には神と名のつく鬼がいた

リヨウメンスクナノカミ

二面四つ手の飛驒の大鬼神と呼ばれるモノで、千六百年前に封印され、十八年前にフィアンマが悶絶させた相手である

其処には、白い髪をなびかせるアーウエルンクス

赤い髪と大きい杖を持ったネギ、その従者アスナがいた。ついでにカモモ

「…復活したようだね。君もがんばったけど、ここまでだ」

「くっ…」

「ヴィシユ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト

小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う 毒の吐息を 石の息吹！！」

石化する煙が蔓延し、ネギは避けるが、腕にかすってしまふ

「ウツ…！」

「ちょ、ちょっとネギ、大丈夫なの!？」

「大丈夫です。それより、木乃香さんを助け無いと…」

「できると思ってるの?」

アーウエルンクスは瞬動で距離を詰め、そのまま殴ろうとする

バシン!!

「!？」

「無事ですか!？ネギ先生！」

刹那が間一髪で拳を弾き、そのまま距離をとる

「刹那さん！」

「刹那さん、鬼達は…」

「大丈夫です、援軍に任せられました。それより、アレをどうにかしないと…」

「……すみません、僕がふがないばかりに…」

「泣きごとを言ってる暇があるのかい? 『石の槍』」

無数の石の槍がネギ達を襲う

「！クツ！！」

刹那とアスナは懸命に弾くが、それでもいくつか弾道を逸らすので精いっぱいだった

傷だらけになり、それでも木乃香を助ける事をあきらめずにアーウエルンクスを見る

「…何故其処まで頑張るのか、僕には理解できないね」

そして、また石の槍を飛ばす

さっきより多く、さっきより魔力を込め、確実に息の根を止められるように

(ここまでか……)

三人は目を瞑る

しかし、石の槍はいつまでたっても襲ってこない

ネギは恐る恐る眼を開ける

其処に居たのは、大量の水で石の槍を弾いたフィアンマの姿があった

「ようネギ。助けに来たぜ。感動したか？」

「…っ！バカな事を言っていないで、速くお嬢様を…」

「ちよ、バカな事って酷くね!? コレでも相当な数の敵戦闘不能に
してきたんだぜ!？」

それも詠春の要望通り気絶で済ませてるのに、この扱いは酷くね!
?」

「来るのが遅いんですよ! 既に鬼神は目覚めてるんです!? アレを
どうにかできるんですか!？」

「できるけど、ちつとばつかし厄介なのがいるな」

フィアンマはそう言ってアーウエルンクスを見る

「…『魔の腕』か、厄介なのが来たね」

「さて、改めて挨拶と行こうか。テルティウム三番目」

「っ! 何故その名を……いや、フェイトでいいよ。あの名前は嫌い
なんだ」

「ッ! 知り合いなんですか!？」

ネギは声を上げ、フィアンマとアーウエルンクスを交互に見る

「いやいや、知り合いという程でも無い。強いて言うなら腐れ縁だ
よ」

「こんな見境なしに人殺す男と一緒にしないで欲しいな」

「喧嘩なら買っぜコラ」

「構わないよ。僕も君は気に食わなくなってきたところだ」

そう言つて二人は戦闘態勢を整える

(刹那、もうすぐエヴァが来る。鬼神はそっちに任せろ。アーウェルンクスも俺が相手する。)

どうにかして木乃香ちゃんを助け出せ)

(どうにかつて…っ！まさか、知ってるんですか!?)

(英雄舐めんな。ま、木乃香ちゃんはそれで見離すような子じゃない。気にするな)

(そうは言つても……)

(人を変えるのは小さな勇気だ、と昔誰かが言つたと思う)

(思つつて…それは私に勇気を出せという事ですか?)

(理解してくれるさ。ずっとそばに居たいんだろ？だつたらなおさら隠して置く意味が無い)

(……………わかりました!!)

それを念話で聞いた後、フィアンマは笑つた

「…話しは終わったかい？」

「律儀に待つてくれてありがとうよ」

「君に不意打ちは意味の無い事だと知っているからね」

「そうかい、じゃ、早速……」

ダン！と湖へかけ出すアーウェルンクス

フィアンマは靴底に水を張り滑るように高速移動する術を使い、音も無く滑るように移動する

「ヴィシュ・タル リ・シュタル ヴァンゲイト

おお 地の底に眠る 死者の宮殿よ 我らの下に 姿を現せ

『冥府の石柱』」

空中で呪文を詠唱し、巨大な柱状の柱を六本ほど頭上に作り出す

フィアンマはそれに対し、大量の水があるという利点を生かし、周囲二キロから数百トンの水を掌握し、空中に浮かせる

「！？何を……」

「教える必要があるのかよ」

それは複雑な魔法陣を形作り、多数の術式を発動させる

二十メートル近い水のハンマーや三十メートルを超す巨大な水の槍を複数ぶつけ、冥府の石柱を相殺する

「っ！驚いたね、こんなことまでできるなんて。魔の腕は使わないのかい？」

「だーら魔の腕じゃねえつつつてんだろ！それにコレはまだまだだよ」

アックアなら周囲二キロから五千トンの水だからな、と呟く

フィアンマがコレをできるのは、少なくともアックアのレベルを指し、

多少なり水の魔術を練習していたおかげでもあり、インデックスの知識があつてこそできる事だ

（流石は魔道図書館。基本的な魔術から封印級の魔術まで何でも来いだな）

それでも、アックアと比べれば、まだチャチな部類

「それは困るね、唯でさえ厄介なのに、こんなモノまで使われるとは……」

アーウェルンクスは虚空瞬動を駆使し、水のハンマーや槍を避ける

「安心しろ、今回『右腕』は使わない。今回は実験だよ」

どうせ使う必要性も無いからな、と呟き、また水を操る

本来フィアンマの得意系統は火だ

しかし、魔術とは本来使用する魔術の中に全ての属性が混じっている

一つの魔術を使うのにも、全ての属性を知っていなければならない

故に、魔術師は得意でなくとも別属性の魔術は多少は扱える

ファイアンマは火以外に水も修行し、ある程度は行使できるようになっているからこそできる芸当

攻撃の手を緩めず、様々な角度から襲いかかる水の尾、ボール状の巨大な塊をぶつける

「数価。四十・九・三十・七。合わせて八十六
照応。水よ、剣となりて蛇のように突き刺せ」

続けてファイアンマが呪文を詠唱し、水の柱がまるで蛇のように鎌首をもたげた

その蛇のような水は槍となり、アーウェルンクスをめがけて突き刺そうとする

「『千刃黒耀剣』」

無数の石の件は水の蛇を斬り裂き、ファイアンマへと向かう

しかし、詠唱することなく水の塊をぶつけ、相殺する

「『万象貫く黒杭の円環』」

アーウェルンクスは無数の石化の針を飛ばし、ファイアンマに逃げ場のない攻撃をする

「甘いな。もっと隙間なく攻撃しなきゃ俺には届かない」

フィアンマは周囲の水で魔法陣を作り、水の龍のようなもので防ぐ

「やはり強いね『石化の邪眼』！」

アーウェルンクスは石化する光線をフィアンマに向けて射出する

フィアンマは大量の水にルーンを刻み、凍らせて盾にする

凍らせた水をまた融解させ、アーウェルンクスの周りにばらまく

別のルーンを刻み、膨張させて爆発させる

そのまま戦いは激しく、熾烈になっていく

一方、その様子を見ていたネギ達

「……………ねえ、ネギ」

「…何でしょうか」

「フィアンマさんって、実はものすごい魔法使いだったりするのかしら」

「そっかないじゃないでしょうか…」

目の前で起こる魔術と魔法のぶつかり合いを見て、素直に感想を述

べる二人

「だが、コレはチャンスだけ。兄貴、木乃香嬢ちゃんを助けるんだ
!」

「う、うん!」

「でも、どうやって?フィアンマさんはあの白いのと戦ってる
し、第一どうやって近づけばいいのよ!」

「…私が行きます!」

刹那が声を上げ、二人を見た

「私なら、あそこまで行けます」

「あ、あんな高いところまでどうやって…」

「ネギ先生、明日菜さん…私…、2人にもお嬢様にも秘密にしてお
いたコトがあります…」

「え……」

刹那は身を屈めるように力を込める。

そして

「でも…今なら…あなた達なら…」

バサアッ

刹那の背中から、天使のような白い翼が生えた。

「…これが私の正体。奴らと…同じ…化け物です。でもっ…！誤解しないでください！

私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！

…今まで秘密にしていたのは」

そう言う刹那は瞳に涙を浮かべる。

「…この醜い姿をお嬢様やフィアンマさんに知られて嫌われるのが怖かっただけ…！私っ…！」

刹那は振り絞るように声を出す

「宮崎さんのような勇気も持てない…情けない女ですっ……！」

「…ふうーん。」

「ひゃー！」

アスナはおもむろに刹那の翼を触り始めた

「あの…明日菜さん？」

そしてそのまま腕を振りかぶり

バッチイーン！

背中を叩いた

「なーに言ってるのよ刹那さん。
こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん。」

「え……」

「あんたさあ……このかの幼なじみで、その後2年間も陰からずつと見守ってたんでしょ？」

その間あいつの何を見てたのよ。

このかがこの位で誰かのことを嫌いになったりすると思うっ？
ホントにもう……バカなんだから。」

「あ……明日菜さん……」

「それに私達もそんなんで嫌いになるわけないじゃない。
フィアンマさんだって……」

チラツと戦闘している様子を見る

フィアンマの後ろに大量の水が空中に浮き、複雑に魔法陣を描いている

「……うん、あっちの方がよっぽど化け物じみてるわ」

「ハハハ……」

刹那はまるで返す言葉が無く、苦笑いするしかなかった

「行って刹那さん！私たちは何もできないけど、邪魔する奴がいれば何とかするから！」

「…ハイッ！」

刹那が顔だけネギの方へ向ける。

「ネギ先生…：…お嬢様の…：…このちゃんのために頑張ってくれてありがとございます。」

そう言い残し、刹那は飛び上がる

邪魔する者はいない

バサア！と翼を広げ、木乃香へと向かう

「…さて、私達はアレどうにかしなきゃね」

スクナを見て、アスナは言う

「でも、どうするんだ姐さん。兄貴はもうほとんど魔力がねえぜ？」

「う…：…フィアンマさんはあっちで戦ってるし、ネギは魔力切れ…：…手詰まり？」

「…いえ、魔力を振り絞って、もう一度攻撃を仕掛けて…：…」

「その必要は無い」

タン、と

ネギ達の近くにエヴァと茶々丸が降り立った

「随分と面白そうなのが出ているな。フィアンマには感謝だ。こんな大物の相手をさせてくれるとは…」

「え、エヴァンジェリンさん…」

「そう怖がるな、私はフィアンマに頼まれてアレの相手をしに来たんだ。」

刹那が近衛を助け次第、アレを倒す」

「あ、ありがとうございます…！」

「別にぼーやに礼を言われるような事はしていない。私はフィアンマに頼まれたからであって…」

「マスターは礼を言われるという事に慣れて無いので、照れているのです」

「ええい！何を言っているポケロボ…！」

「こういうときはそう言えとフィアンマさんが言っていましたので」

その状況を見てネギとアスナは呆れる

「……………それにしても、あいつも随分と派手に戦ってるな」

「…エヴァンジェリンさん、フィアンマさんの使ってるアレは魔法なんですか？」

呪文詠唱もなしにあんなすごい事ができるなんて…」

「ああ、アレは魔法じゃ無い。魔術と呼ばれる技術だ」

「魔術？それって魔法とどう違うの？」

アスナが首をかしげながらエヴァに聞く

「私もよくは知らん。だが、少なくともあいつはそれの一流の使い手で、そこら辺の雑魚じゃ相手にすらならないというのは良く分かるだろ？」

「…魔術ですか……僕も使えるかな……」

「やめておいた方がいい。アレは生半可な事じゃできんし、そもそも魔法使いがアレを使えるようになるまでかなり時間がかかる」

「え？どうしてですか？魔法使いだから、魔力の扱いには慣れてるし……」

「だからこそだ。魔法使いと魔術師では使う魔力の精製方法が違う。魔法を使う感覚と魔術を使う感覚は全く別物だ。おかげで私も扱えん」

実際フィアンマも魔法を使えるようになるまで時間がかかったし、そもそもフィアンマは魔法を使うこと自体があまり得意ではない

魔術でも宗派によって魔力の精製方法は違うが、フィアンマは天草式のようにいくつも使い分けているからこそ、多数の宗派の魔術を行使できる

「そうなんですか……」

露骨に落ち込むネギ

しかしエヴァは見ておらず、スクナを見据えていた

「…そろそろだな。茶々丸」

「了解しました」

茶々丸は飛びあがり、銃のようなものをスクナへ向ける

「マスター、結界弾セットアップ」

「やれ」

ズシン！！とスクナは動きを止められる

「マスター、この質量が相手では数十秒が限界です」

「分かっている。さて、ぼーや、よく見ておけ。魔法使いなど究極的には唯の砲台。その最強の力を見せてやる」

エヴァは飛びあがり、呪文を詠唱する

「リク・ラクラ・ラック・ライラック

契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみ！

えいえんのひょうが！！」

呪文を唱えた瞬間、スクナ周辺が凍り付く。

「な、な、何者やあんだ!？」

「くくくく。相手が悪かったなあ女…。」

ほぼ絶対零度150フィート四方の広範囲凍結殲滅呪文だ。そのデカブツでも防ぐこと適わぬぞ。

我が名は吸血鬼エヴァンジェリン!! 『闇の福音』!!
最強無敵の悪の魔法使いだよ!!
アハハハハ!!」

「ノ、ノリノリねーエヴァちゃん。」

「全ての 命ある者に 等しき死を 其は安らぎ也

“ おわるせかい”
…砕ける」

呪文を唱えきると同時に、スクナは氷ごとバラバラに破壊された

「…:…どつやら、あつちも終わったらしいな」

水の塊がアーウェルンクスを襲う

「みたいだね。どうやら、僕がこれ以上にここに居る理由もなさそう
だ」

冥府の石柱の呪文を詠唱し終わり、水の塊ごとフィアンマを押しつ
ぶそうとする

「おいおい、喧嘩の途中で帰んのか？」

巨大な水の槍とハンマーで冥府の石柱は粉々に砕ける

「あなたの相手をするには場所が悪過ぎるからね」万象貫く黒杭の
円環」

無数の石の針がフィアンマに襲い掛かる

「俺の相手をするのに場所を選ぶ必要は無いと思うがね。
今回は俺が手加減して『右腕』を使っただけで」

フィアンマはそれをローブから巨大なメイスを取り出し弾く

更に魔法陣を描いて大量の水の槍でアーウェルンクスを襲う

「だから余計に性質タチが悪いんだよ」

アーウェルンクスはそのまま水の槍に貫かれ、体が水に融けて消えた

「幻像、か」

フィアンマは小さくつぶやいた後水を戻し、エヴァ達の所へ向かう

「おい、無事かー？」

「フィアンマさん！」

すたすたと水の上を歩きながら来るフィアンマに顔を向け、話しかける

「フィアンマさん！大変なんです！ネギが…！」

「…！？ネギ先生！？」

「どうしたでござるか！？」

「楓さん！夕映！」

ここにほとんどのメンバーが集まった

「…危険な状態です。」

ネギ先生の魔法抵抗力が高すぎるため、石化の進行速度が非常に遅いのです。

このままでは首部分まで石化した時点で呼吸ができず、窒息してしまいます。」

「…ど、どうにかならないのエヴァちゃん！？」

「私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。…だが。」

エヴァはフィアンマの方を向く

「お前、何とかできるだろ。やれ」

「何で命令形？いやまあやるけど」

フィアンマは聖なる右を発動し、石化の呪いを解く

「…う…ん……」

「ネギっ！！」

「「ネギ先生っ！！」」

アスナ達が勢いよく抱きつく

「…全く、いつ見ても気味が悪いな」

「悪かったな、手っ取り早く呪い解くならコレが一番なんだよ」

聖なる右をさっさと解除し、歩いて本山に戻る事にした

森の中

そこで一人の女が走っていた

「ハアッ、ハアッ…まさかあんな化け物が出てくるとは…しゃあな

い、一旦仕切り直しや」

草木をかき分け、一生懸命に走っていた

だが

「『縛』」

その一言、たった一言で、千草は動きを止められる

「全ク、俺一人デ十分ダト思うケドナ」

ガサツ、と草をかき分けて人形が現れる

「気に済んな。俺は唯の保険だし」

その後ろにはめんどくさそうに人形と話すフィアンマの姿があった

「ケケケ、殺シチャ駄目ナンドロ？」

「詠春の要望だからな。できる限り生きて捕えろってさ」

「テカ、モウ捕エテルジヤネエカ」

「そりゃそつだ」

コソトのように話す二人を見ながら、千草は思っ

(な、なんやこいつ等。か、体が動かん…)

「あー、無理に動かさない方がいいぞ。固定してるのは関節だけだし、骨が外れるぞ?」

その言葉に千草は抵抗をやめようとはしなかった

「…ショーが無い、さっさと気絶させて連れてくか」

「切り殺せ無クテ残念ダゼ」

物騒な言葉を残し、フィアンマ達は其処から姿を消した

第三十三話 終戦の三日目（後書き）

今回は終戦ですね

フィアンマVSアーウェルンクス

今回、フィアンマにはアックアみたいな戦い方をして貰いました

聖なる右を使う機会が無い…

次回、後日談。というか残りの修学旅行ですね

感想は常時募集中です

第三十四話 修学旅行エピソード(前書き)

修学旅行の終わりの話です

つなぎの話なので短めですが、ご了承ください

では、どうぞ

第三十四話 修学旅行エピソード

第三十四話 修学旅行エピソード

とにかくいろんな事があつた次の日

朝、俺と詠春は居間で話し合っていた

「今回は迷惑をかけましたね。フィアンマ」

「いや、ぶっちゃけ俺が持ちこんだ騒動もあつたし、どっこのどっこのいだろ」

「ハハハ、そうですね。ですが、あなたのおかげで証拠が掴めなかつた連中を一網打尽に出来ましたし、お礼を言っておきます」

「ま、素直に受け取っておこう。これから先、何か必要があるなら言ってくればいいぞ」

「いえ、これからは組織として動く事になりますし。フィアンマには組織の後ろ盾も無いので、これからは特に頼む事も無いと思いますよ」

「いや、言つての忘れてたけど、一応組織はいくつか従えてる」

戦争が終わってアリカの処刑までの間と、京都旅行してから麻帆良に行くまでの間にいくつか組織に恩を売り、自由に動かせる体制を

とってる

「……何とか、何でもありですね」

「まあ、魔術組織だし、表どころか裏でもあまり知られてない連中もいる

自由に動かすには中々出来た連中だ」

戦闘、諜報、その他諸々

資金や仕事を用意してやれば従ってくれるし、問題はあまりない

「そうですか。そちらの魔術師と手を組むことが出来れば心強いですね」

「実質トップが俺だしな。いずれは一つの組織として認めさせるつもりだ」

とはいっても、クリアすべき問題は多々あるのだがな

その辺は追々やっていけばいい

「少なくとも、関西呪術協会と協定を結びたい」

少しずつやっていけばいい訳だし、別に焦る必要も無い

「一か麻帆良にある関東魔法協会も合併していいんじゃないの？」

同じ日本で別組織として扱うのは結構面倒なんだがな

「いつその事関東と関西でまとめればいいのにな」

「流石にそれはまだ難しいでしょう。何らかのきっかけがあれば別ですが…」

「…ふむ、きっかけ、か」

考えておくのでしょうか、暇だしな

そんな事を考えていると、何やら騒がしいので見に行ってみる

詠春は他に仕事があるらしく、どっか行った

簡単に言うと、庭先でネギ達が騒いでいた

「…何してんの？お前等」

「あ、フィアンマさん！実は、私達の身代わりがストリップショーをしてるらしくて…」

ああ、あつたなあそんな事

「フィアンマさん…」

「刹那か。結局どうするんだ？」

「私は………」

「離れるのが嫌なら一緒にいるよ。そもそもお前を追い出した烏族の掟なんざ守る必要性は無い」

「……分かりました。お嬢様のそばに居ます！」

「そうか、なら頑張るんだな」

「刹那さん、行きますよー！」

「あ、待ってくださいー！！」

刹那はネギ達を追いかけて行った

「……フフ、あなたには敵いませんね」

詠春……いつの間に？

「お前の弟子なんだろ？悪いな、なんか」

「いえ、お礼を言うのはこっちのほうですよ。彼女の悩みが吹っ切れたようですし」

詠春は笑って言った

ま、それならいいけどな

そして昼

俺達はナギの別荘を訪れていた

「やあ皆さん。ゆっくり休めましたか？」

「はい。長さん、よろしくお願いします！」

そう言っって歩く事数分

「ここが…父さんの…」

ネギが感慨深そうな表情をしてる。

まあ憧れの親父の家に来れたんだから当然か。

「それでは、どうぞ」

詠春にそう言われ、中に入っていく

ここに来るのも久しぶりかな

前に来たのは京都旅行で寄っただけだったし

「「「わーーーーー」」」

「ほづ、ここが紅き翼の隠れ家か…」

「すごーい、本がたくさん」

「彼が最後に訪れたままの状態で保存してます」

「これが、父さんの…」

「わあすごいこの本！なんて書いてあるかわかんないけど…！」

「パルやゆえがいろんな本をあさくりながら言う」

「オイ、あれはいいのか？」

「素人目には何の本か分からないでしょう。」

「お嬢様方！故人の物ですからあまり手荒に扱わないでくださいね！」

その後全員適当に散策していた

「どうですかネギ君？」

「ハ、ハイ！」

「見たいものや調べたいものがたくさんあって……時間がもつとあれば。」

「ハハハ、またいつでも来ていいですよ。鍵をお渡ししましょう」

まあ修学旅行中だしな

京都ってそう気軽に来れる場所でも無いし

「あの…長さん…」。

父さんのこと聞いていいですか？」

「…ふむ、そうですね。」

詠春は少し考えたように呟き

「…ではこちらを。」

フレームに収まった写真を見せた。

「…この写真は？」

ネギが写真を手に取る

「それはサウザントマスターとその戦友たちの写真です」

「戦友？」

「はい、もう二十年前になりますね」

タカミチは映って無いけどな

「…コレを見ると、もう二十年もたったんだと改めて思っな」

「考え方がジジイ臭いぞ、フィアンマ」

俺達の話す横で明日菜や木乃香が写真を見て話している

「へー、それがネギのお父さん？」

「この人やて、かつこええなあ。お父様も若い」

「…あれ？こつちの赤い髪で黒いローブを着てるのは…」

「お、コレ俺だよ。懐かしいな」

「『えええええー！！！！？』」

ネギ達が絶叫した

刹那は知っていたから驚きは無かったようだが

「何だよ、いきなり叫んで」

耳がキーンてなったぞ

「いや、だってこの写真に写ってるって事はつまり…」

「フィアンマさんも紅き翼の一員だったんですか!？」

「まーね」

「で、でも、昔と全然変わってないじゃない!？」

「そりやお前、アレだよ。俺だからだよ」

「説明になってないのになんか納得」

「分かります。基本常識が通用しませんから」

「あれ？自分で言っというてなんだけどなんか非常識の代名詞みたいに扱われてる！？」

刹那とアスナが納得していた

なんか悲しいんだけど

「私とフィアンマはかつての大戦で、まだ少年だったナギと共に戦った戦友でした」

あ、スルーした

「そして20年前に平和が戻った時、彼は既に数々の活躍から英雄……サウザンドマスターと呼ばれていたのです。」

「……………」

「しかし……彼は10年前突然姿を消す……」

彼の最後の足取り……彼がどうなったかを知る者はいません。

ただし公式の記録では1993年 死亡。

それ以上のことは私にも……すみませんネギ君。」

「い、いえ、そんな。ありがとうございます。」

まああのバカがそんな簡単に死ぬはずも無いしな

アルもジャックも仮契約カードは生きていた訳だし

「ハイ！そつちのみなさん難しい話は終わったかな？

記念写真撮るから下に集まって！」

その後写真を撮っていたが、俺と詠春も映っていたらうな

帰りの電車

流石に騒ぎ疲れたらしく、かなり静かなものだった

「やれやれ…。あれほどのさかつた3Aが、静かなものですな。」

「ふふ、ホントに…。」

ハシヤギ疲れたんでしょね。」

新田教員と源教員がそう言っていたのが聞こえた

俺はちゃんと最後まで起きていたぞ

家に帰るまでが修学旅行です、ってな

第三十五話 ネギが弟子入りしたらしい(前書き)

テスト前なのについ書いてしまう

少々短めです

第三十五話 ネギが弟子入りしたいらしい

第三十五話 ネギが弟子入りしたいらしい

〈SIDE エヴァ〉

眠い

非常に眠い

修学旅行明けの日曜日

流石にはしゃぎ過ぎたのか、かなり眠く、時計を見ると昼近くになっているのに起きる気がしない

まあ偶にはこんな日があってもいいかな…

と、思っていたんだが

「お願いします！僕を弟子にしてください！」

と、まあこんな感じでぼーやが弟子にしてくれとつづるオチく言ってくる

何故私がそんな面倒な事をせねばならんのだ

「断る。馬鹿か貴様…」

「何ですよ！　いーじゃ無い、教える位！」

「ピーピー喚くな神楽坂明日菜。一応、ぼーやと私はまだ敵なんだぞ？」

「え、でも京都では助けてくれたじゃない」

「別にぼーやを助けに行つたわけじゃない」

アレは私の個人的なストレス発散の為だ

スッキリしたよ、おかげで

フィアンマの頼みでもあるしな

……ん？

「茶々丸、そう言えばフィアンマはどうした？」

「フィアンマさんなら早朝に学園長へ今回の事件を報告、その後『ちよつと出かけてくる』とヴェネツィアまでいかれました」

「ヴェネツィアって…何処？」

神楽坂が首をかしげて茶々丸に質問している

「イタリアの北東部に位置する基礎的^{コムーネ}地方公共団体です。何やら探し物がどうか言っておられましたか」

「どうせまたおかしなモノだろ。この間ロシアに行ったと言っていた時も変なモノ持ちかえってきたしな」

アレは何だと言っていたかな

確か…媒体がどうか言ってたな、まあ覚えて無いから大したものじゃないだろう

「イタリアって…そんな気軽に行けるの？」

「フィアンマさんは我々とは違う移動手段をお持ちですから。距離が離れていても移動できるらしいです」

「へえ〜そうなんですか。すごいんですね！」

「……で？結局ぼーやは何がしたいんだ？」

ぼーやはハツとした顔で私の顔を見る

……目的を忘れてたな、コイツ

「戦い方などタカミチにでも習え。私は弟子など取らん」

「タカミチは海外に出張したりでほとんど学園にいないし……」

「とにかく知らん。帰れ」

「何ですよ！教えてあげてもいいじゃない！」

「私は悪の魔法使いだぞ！？いわば貴様達の敵だ！」

「それを承知できました！でも魔法の戦い方を教わるにはやはりエヴァンジェリンさんと…」

しつこいな、面倒くさい…

適当にあしらってやろうか

「エヴァンジェリンさん、僕を弟子にしてください！」

「本気か？」

「はい！！！」

「ククク、いいだろう。ただし！ 私は悪の魔法使いだ、それなりの代価を払ってもらおうか…」

「だ、代価…？」

「まずは足をなめろ、我が僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ」

そう言っつて足を出す

「子供に何アダルトな要求してんのよーっ！！！」

スパーンという音を立てながらハリセンで叩かれた

「な、何をするんだ神楽坂明日菜！」

仮にも真祖の吸血鬼である私の障壁を無視するなど…

「ネギがこんな一生懸命頼んでるのに、ちょっとひどいんじゃない！？」

「頭下げた程度で物事が通るなら世の中苦労せんわ！！」

世の中何事も実力行使だ

力が無いなら何も出来ん

と、その時だ

「ただいま」

のんきな声を出しながらフィアンマが帰って来た

そのまま二階にまで上がってきて見渡す

「あれ？ 何でネギとアスナがいんの？」

「弟子入りしたいとき」

「エヴァに？ モノ好きだな、お前等。この合法ロリに弟子入りなんて…」

一分後

フィアンマは頭にタンコブを作り、シューウウウと煙を出しながら倒れている

「……俺の扱いがだんだんと酷くなって無いか？ 冗談だって分かってるだろ？」

「お前が冗談を言ってもいらつくだだけだ」

「酷いいわれようだな、おい」

倒れたまま顔だけこちらに向けて言う

最近かなりウザくなって無いか？ コイツ

「しかし、エヴァに弟子入りねえ。魔法を習うならつってつけだろうけど、性格がなあ……」

「氷漬けにされたいか？」

「全力で遠慮させて貰う」

「ならちよつと黙ってる」

そう言うとフィアンマは一階に下りて行った

あいつがいると調子が狂うな、全く

「…で？ どうしてもあきらめる気は無いのか？」

「はい！ 僕を弟子にしてください！！」

…これは何を言っても聞かんだろうなあ

私も結構忙しいのだが

ベツレヘムの星の整備の為の人形の制作

予備も含め、かなりの数を作らなければならない

バカみたいに広いからな、あの城

おかげで去年の夏から作っているのにまだ作り終わらない

それ以上にサボっているというのが大きいのだろうか

そして学問としての魔術の勉強。これは純粋に私の興味を引き付けたからだ

いつか使えるようになってみたいモノだ。魔術

……よくよく考えると、結構忙しくないか？ 私

「坊や、弟子入りの件は後日テストを行うから、それで決めさせてもらう。」

……そうだな。また土曜にでも来い。」

それだけ言つと、ぼーやは元気よく返事して帰っていった

まあ、多少弄れるおもちゃが手に入ったとでも思えばいいか
別荘を使えばいいのだしな

その後、一階に下りてお茶を飲んでいる

「所でお前は何しにヴェネツィアまで行つたんだ？」

「まあその土地特有の魔術つてものがあるからな。それを見に行つてた」

そんな物を見に行くとは、随分と暇なんだな

「……というかお前、二十年位ずっと世界を回つてただろ？ その時見に行かなかつたのか？」

「俺も忙しかつたんだよ。『ホルス』の解析とか、いろんな魔術の実験とかで」

「そうか、唯のニートじゃ無かつたんだな」

「……まあ、今の生活見るとそう取られてもおかしくは無いけど」

まともに働くのは夜の警備のみだからな

自宅警備員（笑）

それも週に何度かだけ

私よりも墮落して無いか？ コイツ

「メキメキと墮落してるよな、ホント」

「失敬な。最近はベツレヘムの星改造計画で忙しいんだ」

「それは麻帆良から生活必需品を確保する為だろ？ 最終的に私もそっちに移るんだし」

「まーな。お前の倉庫になった部屋もかなりあるし」

現段階で既に城のいくつかの部屋は私の荷物を置いている

私の人形に整備させてるんだ、多少の我儘位構わんだろう

作り終わってないのは文句を言われてもしょうがないんだがな

「もしもの時の為の術式とかも用意しなきゃならんしな」

「もしもの時？」

「戦闘になった時の為のモノだ。使う機会がないならそれでいいんだがな」

めんどくさいと言わんばかりの顔で言い切った

……コイツ、いつかどっかの国とかと戦争でもする気か？

私は私に被害が来ないなら別にどうだっていいんだがな

〈SIDE フィアンマ〉

ネギがエヴァに弟子入りしたいと言い出して数日

古菲に中国拳法を習っているらしい

早朝、俺はその修行の様子をその辺の自販機で買ったコーヒーを飲みながら見る

「フィアンマさんって朝から暇なんですね」

「ほっとけ。暇なのはあってるけど」

実際はエヴァの付添で早朝から叩き起こされたんだが、別に関係無いので黙っておく

肩の上で俺に話しかけたのはさよ

京都に行ったときに霊を憑かせる為の媒体を入手し、人形に入れた

その時のさよはホントに泣いて喜ぶ様だった

人形だから泣けないだろうけど

広場ではエヴァとネギが言い争いをしている

「ふん、ずいぶんと熱心じゃないかばーや。そっちの修行をする」とにしたのか？

じゃあ私への弟子入りは白紙ということだな」

「ええっ！？ こ、これはあの白髪の少年の戦い方で…」

「ふん、もういい。子供にはカンフーごっこがお似合いだ」

「何よー！エヴァちゃんだってお子様体型じゃないの！ それにネギ君強いからエヴァちゃんに弟子入りする必要なんかないもんねー！」

何を根拠に言ってるんだか

バカピンクの異名は伊達じゃないらしい

「え、ちよっ、まき絵さん!？」

「クククク、いい度胸だな。よし、貴様の弟子入りテストの内容が決まった」

エヴァもエヴァで挑発に簡単に乗ってるし

「な、なんですか……」

「そのカンフーもどきで茶々丸に一撃入れる。それで合格にしてやる。もちろん一対一だ」

「ええええ！？ エヴァンジェリンさん！」

「嫌か？ じゃあやめろ」

「そんなのネギ君なら余裕だもんねー」

だから何故あいつが返事をしてるんだ

「マイペースですよね」

「ペースが崩れないよな」

「……何してるんですか？ フィアンマさん」

後ろから声がしたので振り向く

其処には刹那、アスナ、古菲がいた

「観戦。ネギの修行のな」

「……暇なんですな」

さよにも言われた事を……

俺ってそんなに暇人に見えるのかねえ

実際暇なんだけども

「どちらさまアルか？」

「ああ、初対面だっけ。俺はフィアンマだ。よろしく」

「古菲アル。見たところ、結構強そうアルね。勝負を申し込みたいアル」

この格闘バカめ

面倒な事になりそうだ

「フィアンマ、帰るぞ」

「ん？ もういいのか？」

ネギの方を見ると、茶々丸にやられたらしく、K・Oされていた

助かったよ、全く

古菲の相手なんざしてられん

俺は基本身体能力に頼りつきりだし、武術なんてもっての外だからな

……刹那との戦闘はホントに身体能力に頼りつきりだからなあ
豊穰神の剣は使わない

偶に使うけど、下手したら急所刺して殺しそうになるんだよね

ちゃんと見張って操らないと駄目なんだよ

「ネ、ネギーっ!？」

アスナと古菲はネギの方へさっさと走っていった

「お前は行かないのか？」

「茶々丸さんの事ですから、最低限手加減はしてるでしょうし、大丈夫だと思うので」

まあ、最近一緒に修行してるから大体分かるんだろうな

……ん？

最近刹那と修行⇨茶々丸の格闘レベルUP⇨ネギの勝率ダウン⇨弟子入り取り消し

……ヤベ、ちょっと不味いかもなあ

これはアレか？ 弟子入りできなくてレベルが低くなったとかそんなオチか？

このままだと『完全なる世界』の連中に負けるかもなあ

いざというときの為に世界を救う術式でも開発しておくでしょうか
まあノリでやるような規模の事じゃないけど、出来ない事は無いと
思っただよね

第三十五話 ネギが弟子入りしたいらしい（後書き）

ネギが古菲に弟子入りし、エヴァの弟子入り試験を受ける事に

使って欲しい魔術とか在ったら言って貰えば考えますので、よろしくお願ひします

感想は常時募集中です

更新停止について

早速で申し訳ありませんが、この小説を一旦消してもう一度投稿しようと思いい立ちました

何をトチ狂ったんだ、と思われるかもしれませんが、設定の甘さや原作等の矛盾が出てきてしまいましたので、設定を練り直して書き直したいと思います

このまま続けてもグダグダになるだけなので、正式に更新を停止します

次の作品、ていうかりメイクですが、それが出来上がるまでこの小説は消しませんので、こんな駄作品で良ければ読んでください

活動報告にも書いておりますが、次の作品が出来上がるまで時間があるので、別作品等からこんな魔術を出して欲しい、と要望があれば知識を入れておきます

それでは、次の投稿を待つただければ、ありがとうございます

お知らせ

え〜。リメイクを書くと言って二カ月近く経ちましたね。遅ればせながらも報告をば。

新しく投稿しました。

タイトルは『とある右方の異世界目録（仮）』です。

こちらが、聖なる右を持つ者のリメイクとなっております。

リメイクとなつていますが、設定等かなり変わっておりますのでお気を付けください。

取りあえずこちらにも書いてお知らせしておいた方がよいかと思い、書きました。

簡単に言つと原作千年前からなつています。

それでは、今後もそちらでよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4721r/>

聖なる右を持つ者《更新停止》

2011年7月10日18時40分発行